ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA KIRIGIRI
3
北山猛邦
Kitayama Takekuni
小松崎類
Illustration Komatsuzaki Rui
e+FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ霧切 3

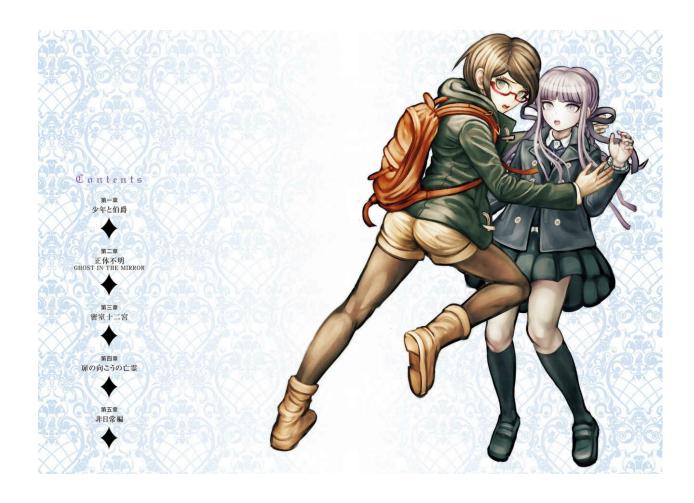
北山猛邦
Illustration／小松崎類

星海社

3
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章

少年と伯爵

新しい年の始まり。
あの人はそう云った。
もしかすると、わたしたちが直面しているのは単なる暦の年明けというより、何か大きな時代の終わりと始まりなのかもしれない。
一月七日。
冬休みが終わり、新学期が始まった。
クラスメイトたちの眠そうな顔が、柔らかい日差しの窓辺に並ぶ。始業のチャイムが鳴ってもまだ、教室はけだるい空気のままだ。先生が黒板に走らせるチョークの音だけが、鬱陶しいほどハツラツとしていた。
休み時間になって、中学クラスの教室を覗きに行く。
霧切響子の席は空っぽだった。
近くにいる子に尋ねると、やはり彼女は欠席しているらしい。
──あの日から彼女がいない。
ノーマンズ・ホテルで行なわれた『黒の挑戦』を退け、異様な幕引きを目の当たりにした、あの日。二人で手を取り合って、震えながら逃げ出した、あの場所。
今にして思えば、あのあと彼女と別れたのは失敗だった。わたしは何がなんでも、彼女の手を放すべきではなかったのかもしれない。
彼女が自宅へ向かうのを、わたしは引き止めなかった。何処よりもそこが安全だと思ったからだ。彼女が帰るのを見届けてから、わたしは寮の自室に戻った。
それからの一週間は、殺人事件や『黒の挑戦』などとは無縁の毎日だった。
けれど宿題をやっている時も、シャワーを浴びている時も、ベッドで横になっている時も、死んでいった人たちのことが頭から離れることはなかった。わたしの心はまだ事件に囚われているのだろう。今のわたしには、何もない平和な時間こそ、嘘っぽい非日常に思えてならない。
霧切と話がしたくて、家に電話をかけてみたけれど、誰も出なかった。彼女どころか、彼女の祖父も、住み込みで働いているというお手伝いさんも出ない。いつ電話をかけても同じだった。
不審に思い、彼女の家まで赴いた。インターホンを押しても反応はなく、監視カメラがこちらをじっと見つめているだけだった。高い塀の向こうに見える屋敷には、明かりもついておらず、人の気配さえ感じら

れない。

まさか霧切の身に何かあったのではないだろうか。

彼女が学校に来ていないことを知り、いよいよわたしはそう確信する。

まるでこの世から霧切響子が消え去ってしまったみたいだ。

もしかしたら犯罪被害者救済委員会がとうとう動き出したのかもしれない。組織のボスである新仙帝（しんせんみかど）と、探偵である霧切の祖父は何やら因縁（いんねん）があるらしい。霧切響子はそのいざこざに巻き込まれてしまったのではないか。

もし彼女が組織に誘拐されたのだとすれば、探偵図書館分類（DSC）における『88』ナンバー――誘拐事件専門――を持つ探偵、わたしの出番だ。

必ず彼女を救い出してみせる。

――といっても、本当に霧切が誘拐されたのかどうかはわからない。そもそも彼女が簡単に敵の手に落ちるとも思えなかった。代々探偵業を継ぐ霧切家の一人娘の驚くべき才能は、わたしもよく知っている。

霧切響子は何処へ行ってしまったのか。

いなくなった人間を捜すのも探偵の役目だろう。

わたしは彼女の足跡をたどるため、探偵図書館へ向かうことにした。もしかしたらメッセージや手がかりが残されているかもしれない。

探偵図書館には、およそ六万五千五百人の探偵の情報ファイルが所蔵されている。ファイルは一般に公開され、何人（なんぴと）も自由に閲覧することができる。探偵に関する情報を手に入れたい場合は、まずここを訪れるのが基本だ。

『探偵図書館前』停留所でバスを降り、古めかしい門をくぐる。歴史を感じさせる西洋館風のエントランス・ポーチを上がると、そこはもう探偵の森の入り口だ。

わたしは今までに何度かこの場所を訪れている。つい先日も霧切と一緒に来たばかりだ。けれど今、あらためて見る探偵図書館は、ただ神秘的というだけではなく、底知れない深い闇（やみ）をたたえているように見えた。

たぶん『黒の挑戦』を二度も経験したせいだ。探偵図書館の背後に、犯罪被害者救済委員会の不気味な黒い影がひそんでいるように思えてならない。

表向きには、探偵図書館はあらゆる組織といっさい関わりを持たない中立の立場を表明している。

はたして本当だろうか？

そもそも犯罪被害者救済委員会を立ち上げた新仙帝は、十五年前に探偵図書館の創立に携(たずさ)わったメンバーの一人だという。また『黒の挑戦』はDSCのランクを参考に、召喚(しょうかん)する探偵を選び出している。しかもDSCにおける最高ランク『000』のナンバーを持つ探偵たちが新仙と手を組(く)んでいるようだ。

　これだけ状況証拠が揃(そろ)っていれば、探偵図書館と犯罪被害者救済委員会が裏で繋がっていても、何も不思議(ふしぎ)ではない。

　そしてもしそれが事実なら、わたしは今、たった一人で敵の本拠地に来てしまったことになる。

　大丈夫。怖くない――

　はずがない。

　それでも怯えている姿を見せないように、胸を張ってカウンターへ向かう。きっと顔色の悪さは隠し切れていないと思うけれど。

「わたし宛てのメッセージはありませんか？」

　白髪交じりの初老の職員に、探偵図書館登録カードを提示する。彼も実は犯罪組織の一員だったりするのだろうか？

　職員はカードでわたしの名前を確認し、すぐに首を横に振った。

「ありませんね」

「じゃあ……カードの更新をお願いします」

　職員は緩慢な動作でパソコンの前まで移動し、手元の端末にわたしのカードを差し込んだ。

「更新はありません」

「えっ、本当ですか？」

　職員は無言のまま肯(うなず)いて、わたしにカードを返した。

　前回の『黒の挑戦』では、確かにわたしはなんの役にも立たなかった。それでも、もしかしたらランクが一つくらい上がっているかも、と期待していたが、やっぱり現実は甘くはないようだ。

　わたしはカウンターを離れて、書架のある部屋へ向かう。

　整然と列をなす本棚に、無数のファイルが並んでいる。ひと気はなく、ひっそりとして、わたしの足音だけが高い天井(てんじょう)に反響する。わたしは本棚の間をぬって、『9』ナンバーの棚まで移動した。

　霧切響子のファイルを見つけ、棚から抜き出す。

　開いてみると、中身は前に見た時と何も変わっていなかった。ノーマンズ・ホテルの事件のことにはいっさい触れられていない。

　前の事件では霧切が探偵役に選ばれたわけではないので、記録として残されなかったのだろうか。

いや、でもシリウス天文台の事件のことは、ちゃんとファイルされている。あの時も霧切は探偵役ではなかった。

ひょっとするとノーマンズ・ホテルの事件は、公的に事件化されていないため、記録として残されなかったのではないか。事実、テレビや新聞で事件のことが報じられているのを見たことがない。

ふと思い立って、わたしは『900』の棚に移動した。七村彗星のファイルを見つける。七村はノーマンズ・ホテルの事件に召喚されたダブルゼロクラスの探偵だ。

彼の輝かしい業績が綴じられたファイルには、その結末を記したページは存在しなかった。すでに亡くなっている探偵はプロフィール欄に没年が記されるが、その記述もない。

しかし七村が死んだのは紛れもない事実だ。彼は拳銃で自らの頭を撃ち抜いた。そのあと彼の屍体はノーマンズ・ホテルもろとも、折り畳まれて消えてしまった。

新仙帝がわたしの目の前でハンカチを折り畳むと、同時に視界にあった風景すべてが折り畳まれていった。まるで夢でも見ているような気分だった。

けれど霧切はすぐに、それが現実であることを教えてくれた。

「結お姉さまの視界はハンカチで隠されていたから見えなかったでしょうけど、私の目には確かに、ホテルが周囲の地面と一緒にひっくり返るのが見えたわ」

「ひっくり返る？」

わたしたちはホテルが建っていた場所まで引き返し、敷地を囲う塀の土台と、地面との間に、ほんのかすかな隙間があるのを発見した。彼女が云うには、もともとホテルの敷地全体が分厚い板のようなものに載っていて、その板の中央に手前から奥へと通された回転軸があり、いわゆるどんでん返しの要領で板が百八十度回転すると、何もない更地に変貌するという仕組みになっていたらしい。一見して気づかれないように、地面の切れ目は塀などの境界線でごまかしていたようだ。

「ホテル内で密室殺人が起きた時に、壁がどんでん返しのように回転するのではないかと結お姉さまは疑っていたけれど、回転するのは壁ではなく、ホテル全体だったようね」

新仙帝がわたしの目の前でハンカチを広げたのは、一時的にその仕組みを隠すためだろう。手品師やイリュージョニストがよくやる手だ。

「物音一つ立てずに、あれだけの質量をスムーズに回転させるには、想像できないほど大がかりな装置が必要だわ。もしかしたら『黒の挑戦』に関わる建物は、様々な方法によって周囲の目から瞬時に隠すことができるようになっているのかもしれない。普段は隠しておいて、ゲームをする時だけ表に出すの」

「じゃあ周りの風景が折り畳まれて消えてしまったのは、どう説明するの？」

「実際に折り畳まれて消えたのだと思う。ほとんどが書き割りやペーパークラフトみたいなもので、いつで

も回収できるようになっていたんでしょう。『黒の挑戦』は一種のショーなのだから、背景まで含めてすべてが舞台装置だったとしても不思議ではないわ」

霧切はそう云ったが、わたしにはとても信じられなかった。犯罪被害者救済委員会は、いろいろな場所で、いろいろな犯罪を提供している。それらすべてに、大がかりな装置を設け、書き割りの背景をセッティングしているというのだろうか。いくら資金があっても足りない気がする。

それに資金の問題だけではなく、人手の問題もある。舞台を準備したり撤収したりするのには、それなりに人手が必要だ。関わる人数が多ければ多いほど、秘密が外に漏れやすくなる。

それでもなお、『黒の挑戦』が今まで人知れず行なわれてきたのだとしたら……彼らは徹底して統率された組織だと云える。

一体どれだけの人間が、犯罪被害者救済委員会に関与しているのか。わたしが知らないだけで、町ですれ違う人たちの何人かは、彼らの側の人間ということもあり得るかもしれない。

そう考えると、云いようのない悪寒に襲われた。

彼らが去り際にわたしたちに見せつけたのは、その圧倒的な資金力と組織力だったのだろう。あるいは冗談みたいな悪夢を実現させることのできる実行力か——

あの時、もう少し詳しく調べていたら、せめて七村の亡骸を見つけてあげることくらいできただろうか。彼らの屍体が発見されない限り、事件がおおやけになることはないだろう。

わたしは重いため息を零しながら、七村のファイルを棚に戻す。

ひょっとしたら、この棚に並んでいる探偵たちの何人かは、犯罪被害者救済委員会の協力者かもしれない。

むしろまっとうな探偵が何人いるというのか。尊敬すべきトリプルゼロクラスの探偵たちでさえ、敵側の人間だというのに。

何も信じられない。

今見ている風景さえ作りものかもしれない。

わたしにとって唯一信じられる存在——霧切響子がいない今、一体何を頼りにウソとホントを見分ければいいのだろう。

結局、わたしは探偵図書館で霧切響子の行方を示す手がかりを見つけることはできなかった。

閉館の時間が近づいていたので、部屋の出入り口へ急ぐ。

気のせいか、途端に辺りが暗くなった気がする。出口の頭上に設置されたランプ風の照明がぼんやりと灯り始めた。

淡い光の中、戸口をくぐろうとした、その時——

正面から唐突に現れた人影が、わたしの横をするりと通り抜け、部屋に入っていった。

すれ違う瞬間、わたしは甘い香りをかいだ。

香水のような化学的な匂いではなく、朝に咲く花の匂い。何処か懐かしくて、愛おしい香り。

鮮やかな髪色の少年だった。

大人びたスリーピースのスーツで、脱いだ上着を腕にかけ、ベスト姿で足音も立てずに歩く。彼の顔を見たのは、すれ違う一瞬だけだったが、わたしは思わず息を呑んでいた。

彼のことを何処かで見たことがある。

それはわたしの記憶の中にいる誰かではなく……もっと普遍的な誰か。たとえば宗教画に描かれる天使たち。たとえば物語の中で光と戯れる妖精たち。何処かで見たような、けれど幻想でしかありえない、この世ならざる美少年――

わたしは振り返って彼のうしろ姿を目で追った。

けれどそこにはもう、彼の姿はない。

ただ残り香だけが、彼の行方を物語っていた。

幽霊か幻でも見たような気分だ。

あの子も探偵を必要としているのだろうか。

なんとなく気にかかりながらも、わたしはそれ以上詮索することもなく、探偵図書館をあとにした。何処の誰とも知れない少年のことより、霧切の行方の方が気がかりだった。

翌日も霧切は登校してこなかった。

担任の教師や学園長のシスターに尋ねても答えは返ってこない。大人たちはまだ、霧切響子がいなくなったということについて、事の重大さを認識していないようだ。

このまま霧切がいなくなってしまったら、わたしはどうしたらいいのだろう。わたしだけで犯罪被害者救済委員会と戦っていけるのだろうか。それとも、闇の世界で彼らがうごめいているのを知っていながら、知らないふりをして、ごく当たり前の日常を過ごす？

そんなことできるはずがない。

悪の存在を知りながら、それを見過ごすことは、悪に加担することと何も変わらない。霧切が帰ってくるまで、わたしは一人でも戦う。たとえ彼女がもう帰ってこないとしても……

次の日、わたしは再び探偵図書館に足を運ぶことにした。

あらためてメッセージがないか確認するためだ。望みは薄くても行動することに意味がある。わたしはそ

う信じて、小雪の降る中、『探偵図書館前』でバスを降りた。
　古びた戸を開けて、建物の中に入っても、まだ息が白い。雪降りのせいか、いつにもまして寒くて物静かな気がする。エントランスにある傘立てが空っぽなところを見ると、来客はゼロかな。
　カウンターでメッセージの有無を尋ねたが、やはり何もなかった。
　人捜し専門の探偵に協力を依頼すべきだろうか。けれどそうして呼び出した探偵が、敵側の人間とも限らない。警察に相談しようか？　はたして警察は頼りになるのか。過去の経験上、警察は信用できない。
　とても孤独な気分だ。
　誰も頼りになんかならない。
　大げさな表現でもなんでもなく、わたしの目に映るこの世界は、数ヶ月前と今とでは、まったく様変わりしてしまった。『黒の挑戦』に関わるまでのわたしにとって、世界はもっとシンプルなものだった。それが今では、夕暮れの道端に落ちるビルの影にさえ、覗き込めば正気を失うほどの深い闇がひそんでいるように思えてならない。
　こんな時、傍に霧切響子がいてくれれば、どんなに心強いか……
　霧切ちゃん、何処に行ってしまったの？
　わたしを置いて――
　あてもなく書架の間を歩いていると、数ブロック先を人影がふいに横切った。
　――今のは？
　なんとなく気になって、わたしは人影を追うように、本棚の角を曲がった。
　すると二十メートルほど先に、先日見かけたベストの美少年がいた。
　あの甘い香りがする。
　彼はスーツの上着を右腕にかけて、まるでわたしが来るのを待っていたかのように、こちらを向いてたたずんでいた。
　身長は霧切より少し低いくらいだろうか。年齢は……よくわからない。ただ幼くて未成熟ということだけはわかる。
　目が合うと、彼は微笑んだ。
　その微笑は、少年めいて無邪気で、少女めいて魅惑的だった。
　たとえるならそれは、図書館の妖精。
　透き通る肌に長いまつげ。華奢な体つき。もしかすると女の子？　いや、性の未分化な子供か。彼は今、少年でも少女でもない、それこそ妖精のような存在なのかもしれない。少し長い髪に、青みが

かった瞳が、より彼の不思議さを際立(きわだ)たせている。
　彼はすぐに本棚の陰(かげ)に姿を隠した。
　わたしは彼の残像を追うように、急いで本棚の向こうへ回り込む。
　少年は数十メートル先で、またしてもわたしを待つように立っていた。
　そしてすぐに本棚の陰に姿を消す。
　追いかけっこのつもり？
「ちょっと、君！」
　わたしは声をかけながら、彼を追う。
　次の本棚を曲がると――
　少年の姿がない。
　その代わりに、奥の突き当たりの壁に小さな鉄の扉があった。
　あの扉の向こうに逃げたのだろうか。
　そもそもあんなところに扉なんかあったっけ。
　まるで不思議の国の入り口だ。
　わたしはおそるおそる扉に近づき、ひんやりとするノブを掴(つか)んだ。
　そっと開ける。
　すると冷たい風が吹き込んできて、雪がわたしの髪に絡(から)まった。
　外だ。
　石畳の小道が、生垣(いけがき)のアーチの向こうに続いている。裏口だろうか。こんな出入り口があるなんて、今まで知らなかった。
　少年はいない。
　きっとアーチの向こうに隠れているのだろう。
　わたしは小雪の中に出て、生垣のアーチをくぐる。
　その先は駐車場になっていた。背の高い生垣によって周囲が囲まれ、およそ自動車二台分のスペースが設けられている。今はそこに、白い雪の中で、黒のコントラストを強調したような、車体の長いリムジンが停められていた。
　車の横に、さっきの少年が立っている。
　彼はわたしを誘(さそ)うように、リムジンのドアを開けた。
「どういうこと……？　わたしに乗れって云うの？」
　少年は無言のまま肯く。

「冗談じゃない」わたしは身構えて云う。「行き先は何処？　二度と帰れない場所なんでしょ？」

　少年は何も答えない。喋れないのか、それともわたしの言葉を理解していないのか。彼はホテルマンのように、ただ車のドアを開けて待つだけ。

　一体、誰がなんの目的でわたしを連れ出そうとしているのだろう。誘拐にしては丁寧すぎる。でもパーティの招待にしては怪しすぎる。

　こんなみえみえの罠にかかるなんて馬鹿らしい。

　けれど踵を返して立ち去るわけにもいかない理由があった。

　もしかすると、霧切響子も同じ手で何処かに連れて行かれたのかもしれない。だとしたら、あえて乗るのも一つの手だ。行き先はきっと同じだろう。もしかしたら、到着した場所で霧切と再会できるかもしれない。

「わかった。乗る」

　わたしは勇気を奮い立たせるように、語気を強めて云った。

　ベストの少年は微笑んで、わたしをエスコートするように手を差し出す。自分より小さな子に優しくされるのは妙な気分だった。

　彼の手を取り、身体を屈めて、暗い車内へ入る。

　すぐにドアが閉じられた。

　その音に少しびっくりして、飛び上がりそうになる。

　仄かなルームランプの明かりの中、対面式のシートの向かいに座る男の顔が浮かび上がった。

　見覚えのある男——

　気づいた時、わたしは悲鳴を上げかけていた。実際には悲鳴を上げるより先に、身体が反射的に、ドアを開けるレバーを探していた。

　逃げなきゃ！

「君に危害を加えるつもりはない」男性的な太くて重い声。「我輩にそのつもりがあるのなら、君はすでにこの世にはいない。わかるね？」

　わたしは思わず首を竦め、こくこくと何度も肯く。

　薄暗い車内に浮かび上がったのは——口周りに髭を生やし、長めの髪をオールバックにした野性味のある男の顔。情熱を秘めたような、ぎらぎらとした目もとが印象的だ。けれど一方で、長い間日の光を浴びていないかのような肌色や、こけた頬の陰影など、不健康そうな一面も窺える。物腰は落ち着いていて、大人の余裕が感じられた。

「我輩を知っているね？」

　彼は咳込みながら、黒いマントのような外套の内側から、探偵図書館登録カードを引っ張り出した。それを無造作にわたしに突きつける。

龍造寺月下　DSCナンバー『０００』

　初めて見る三つのゼロ。

　探偵としてすべての分野でもっとも優秀であるという証。

　彼こそ探偵図書館の頂点に君臨する一人、『安楽椅子伯爵』こと龍造寺月下だ。

　わたしはカードを丁重に龍造寺に返す。龍造寺は小刻みに震える手で、それを受け取った。彼の指先は枯れ枝のように細く乾いていた。

　彼はまたひとしきり咳込むと、サイドテーブルのグラスにウイスキーを注いで、一口呷った。まるでそれが薬であるかのように――

　同時に、車が動き出す。

　どうして彼がこんなところに？

　わたしを待ち構えていたのか？

　車の速度が上がると同時に、わたしの頭の中を高速で疑問がよぎっていく。

　移動する密室の中で、わたしと龍造寺は二人きり、向かい合っていた。さっきの少年は仕切りの向こう側、助手席に乗っているようだ。シートはふかふかとして座り心地がよく、恐怖心で凝り固まった身体を少なからず和らげてくれた。

　こんな状況でなければ、龍造寺月下と対面できるのは何よりも光栄なことだったはずなのに。

　運命は何処で狂ってしまったのだろう。

「君はいくつだね？」

「……十六です」

「悪くない数字だ。十六の月が象るのは、ためらいと希望――」

　龍造寺は手元のグラスに目を落としながら、独り言のように呟いた。なんのことやらよくわからないけれど、ダンディな声がとても耳に心地いい。

「戸惑っているようだね。なんでもいい、尋ねてみたまえ。答えよう」

「この車は……何処に向かっているんですか」

「子羊たちが救いを求める場所だ」
「子羊……？」
「闇に道しるべを奪われた彼らは、何千という群れを作って、我輩の光を求める」
　謎かけのつもりだろうか。
「もしかして……龍造寺さんの探偵事務所ですか？」
「ご名答。間もなく我輩の仕事場に着く。ぜひ君を招待したい」
　龍造寺はトリプルゼロクラスの三人の中で、唯一探偵事務所を持ち、一般客の依頼を受けつけている。彼が一日にさばく仕事は、事件数にして百件とも二百件とも云われている。そしてすべての事件を、事務所の椅子から動かずに解決するため、安楽椅子探偵になぞらえ『安楽椅子伯爵』と呼ばれるようになった。伯爵というのは、その風貌（ふうぼう）からイメージされたものらしい。
「どうしてわたしを？」
「君の関わった『黒の挑戦』を見た。もっぱら君の無能ぶりが評判だったが、我輩は君を笑うことができなかった。何故だかわかるかね？」
　龍造寺は答えを待つように口を閉ざした。
　わたしが答えられずに黙っていると、彼はすぐに続けた。
「かつての我輩と似ていたからだ。それどころか、君のひたむきさは尊敬に値する」
　龍造寺は奇妙なことを云い出す。
　そんな言葉を真に受けることはできず、わたしはむしろ見下されているように思えた。
「……どういう意味ですか」
　少し反抗的になって云う。
「このまま君を失うのは惜（お）しいという意味だ」
「失う？」
「君は自分が死ぬ瞬間のことを想像したことがあるかね？　あるいは遺書を書いたことは？」
「え？　えっ？」
　質問の意味がわからなくて、わたしは首を傾（かし）げる。考えれば考えるほどおぞましい質問だ。
「あの……それってどういう……」
「失礼、時間だ」
　龍造寺は突然遮（さえぎ）るように片手を挙げると、何処からともなく携帯電話を取り出し、何処かにかけ始めた。
　電話で相手を呼び出している間に、運転席に向かって声をかける。

「法定速度をこのまま維持しろ。一キロもオーバーするな」

　一体何が始まったの？

　次に龍造寺は携帯電話に向かって指示する。

「六十秒後、四号線のAポイントからCポイントまで、信号を赤にしろ」

　続けて別の携帯電話を取り出す。

「彼らの目的はバスジャックによるテロ行為ではない。真の目的は、乗客の金品を盗むことだ。そのバスには五千万の現金入りのスーツケースを持った老人と、二億円相当のアクセサリを鞄に入れた婦人が乗っている。いや、偶然ではない、それも犯人たちの計画通りだ。乗客たちはバスジャックの混乱で、手荷物に対する警戒が薄れている。すでに金品は盗まれ、偽物のスーツケースと鞄にすり替えられているだろう。金品は道路上で別の仲間に受け渡される。仲間はオープンカーに乗っているはずだ。この真冬にルーフ全開で走っている。交差点でバスとオープンカーがすれ違う時、バスの窓からオープンカーめがけて金品が投げ落とされる計画だ」

　龍造寺の口頭でのやり取りから、わたしはおおよその状況を把握する。どうやら現在進行形でバスジャック事件が発生しており、龍造寺はその解決のために動いているようだ。

「次の交差点の中心で車を止めろ」

　龍造寺は運転席に向かって指示する。

　わたしは窓から外を覗いた。

　車は間もなく交差点に入っていくところだった。しかし進行方向の信号は赤になっている。わたしたちの前に車はない。

「二秒……一秒……ゼロ」

　龍造寺のカウントダウンが終わった瞬間、進行方向の信号が青に変わった。車は速度を落とすことなく、そのまま交差点に入る。

　その時、交差点の左から、猛烈なスピードでオープンカーが向かってきた。龍造寺が云っていたように、小雪が降る中、ルーフを全開にしている。

　一方、右方向からは、電光表示にSOSの文字を灯した路線バス。

　ここですれ違う気だ！

　両者とも、信号が変わったばかりのこのタイミングで、無理やり交差点を突っ切るつもりらしい。

　しかしわたしたちの乗ったリムジンが、道路を塞ぐように、交差点の中央で急ブレーキをかけて停まった。車体が長いため、両車線が塞がれる。

　左右からオープンカーとバスが迫ってくる。

このままじゃ……

「ぶつかるっ！」

　わたしは目を閉じて、思わず縮こまった。

　急ブレーキの音が耳に突き刺さる。

　一瞬、死を覚悟した。まだ遺書を書いていないことを後悔した。

　けれど衝撃は起こらなかった。

　目を開けると……

　リムジンのすぐ横、やや左前方寄りにオープンカーと、右後方寄りにバスが、鼻先をほとんどくっつけるようにして停まっていた。

　サイレンを鳴らしてパトカーが集まる。オープンカーとバスはバックして逃げようとしたが、すぐにパトカーに取り囲まれた。

　機動隊が犯人たちを急襲し、無事に人質が解放される。映画でしか見たことがないような出来事が、目の前で繰り広げられていた。

「す、すごい……」

　わたしは窓の外の光景を見て思わず呟いていた。

　いつの間にか事件に巻き込まれ、いつの間にか終結している。凡人が名探偵に振り回されるのはいつものこととはいえ、龍造寺月下はまた別格かもしれない。

　一通り修羅場を終えたところで、警察官たちがこちらに向かって敬礼をする。

　それを事件終結の合図とするように、リムジンは再び走り出した。

「死ぬかと思った……」

「安心したまえ、我輩の解決編では死人は出ない」龍造寺は携帯電話を片手に、ひどく咳込みながら云った。「ああ、失礼。こっちの話だ。おそらく犯人はその土蔵ごとトレーラーに積み込んで移動したのだろう。移動先で土蔵を開けて、中で被害者を殺す。その後、元の場所に戻り……」

　彼はすでに別の事件の謎解きを始めていた。

　これが『安楽椅子伯爵』の龍造寺月下か……

　パラレル・シンキング＆マルチ・タスクの天才。探偵図書館に登録されている探偵の中でも、もっとも事件の解決数が多い男。

「さて、他に我輩に聞きたいことは？」

　龍造寺は携帯電話を魔法のようにさっと何処かにしまうと、膝の上で指先を組んで云った。

「霧切ちゃんを連れ去ったのはあなたたちですか？　彼女は今、何処にいるんですか？」

「残念だが彼女の所在は把握していない。これは本当だ。我々が一個人の行方を見失うなどというのは本来あり得ないが、それでもなお発見に至っていないということは、彼女は探偵のスキルを駆使して、自ら行方をくらましていると考えるべきだろう」
「霧切ちゃんが自ら……？」
「心当たりはないかね？　我々から逃げ隠れするのは時間の無駄だから、やめた方がいいと忠告してあげたまえ」
　どうやら犯罪被害者救済委員会も霧切を捜しているようだ。彼女は捕まったわけではない。そのことがわかっただけでも、ここまで来たかいがあった。
　できることならもう帰りたいのだけれど。
　肩を落としてシートに沈み込む。
「心配することはない」龍造寺は穏(おだ)やかに笑いながら云う。「さっきも云ったように、我輩は君に危害を加えるつもりはない。おとぎばなしのお姫様のように君を迎え、お姫様のように君を送り返すつもりだ」
「目的はなんなんですか？」
「個人的な都合だよ」
「個人的……？」
「そう、君が今ここにいるのは、犯罪被害者救済委員会の意思とは関係ない。我輩の独断による抜け駆けだ」
　ますます意味がわからない。
　わたしは首を傾げる。
「これは内部機密だが……すでに委員会は、君を探偵役とする次の『黒の挑戦』を用意している」
「えっ……」
　衝撃の事実だけど、なんだかまともに驚けない。目の前で起きる急展開の連続にまるで頭がついていかない状態だ。
「君への挑戦状は我輩が預かっている。それを渡すのは簡単だが、しかし君を気に入っている我輩としては、君を失いたくない」
　甘い声に酔いそうになる。
　できればそういう言葉は、別の人から聞きたかった。
「そこで我輩は、一つの賭(か)けに出ることにした。あいにくギャンブルなどとは程遠い人生だったが、運命に答えを見つけてみたくなったのだ」龍造寺は雪の当たる窓をしばらく見つめてから、視線を戻す。「五月雨結君(さみだれゆい)——我輩とゲームをしてみないか？」

――ゲーム？

またろくでもない大人の考えたゲームに付き合わされることになるのか。

「このゲームには難しいルールは何もない。我輩はこれから君に、二度、選択を迫る。君は自分の信じる答えを選ぶだけでいい。ただし問いかけの内容は、二度とも同じだ」

「選択肢を選ぶだけですか？」

「そう理解してもらって構わない。よろしいかね？」

わたしはわけもわからずに肯く。

とても簡単なゲームに思えるけど……

「では尋ねよう」

龍造寺は外套の内側から、真っ黒な封筒（ふうとう）を取り出した。あの忌（い）まわしい封筒。犯罪被害者救済委員会の封蠟（ふうろう）が、ついさっき押されたかのように赤々としている。

その封筒とは別に、彼はさらにもう一つ、別の封筒を取り出す。今度は真っ白だった。しかし封蠟は同じマークだ。

龍造寺は左手に黒い封筒、右手に白い封筒を持って、わたしの目の前に差し出した。

「黒い封筒は、おなじみの挑戦状だ。委員会が用意した。召喚される探偵は五月雨結、君だ。これを開封すると『黒の挑戦』が始まる」

わたしの戸惑う視線も気にせず、龍造寺は続ける。

「白い封筒は、犯罪被害者救済委員会の一員になるための推薦状だ。通常、委員会に入るには幹部の推薦状が必要となる。これは我輩が、君のために署名したものだ」

龍造寺は試すような目でわたしを見た。

わたしはようやくゲームの意図を理解する。

白か、黒か。

彼らに従うか、抗（あらが）うか。

「第三の選択として、どちらも選ばないという道もある。しかし我輩が思うに、君はその選択肢だけは選ばないだろう。さあ、時は来た。どちらか選びたまえ」

車が赤信号で止まった。

同時に車内の時も止まる。車が再び動き出すまで、わたしは身動きできずにいた。

「そんなに緊張することはない。さっきも云ったように、選択の機会は二回ある。結論は二回目で出せばいい」

「それならこの一度目の選択はなんの意味があるんですか」

その問いに龍造寺は答えなかった。
　彼はただ、選択のタイムリミットを迫るように二つの封筒をわたしに突き出す。
　はっきり云って、迷うような問題ではない。
　それでも戸惑いを隠せなかったのは、龍造寺がわたしを委員会に誘おうとしていることに驚いたからだ。特別な才能もなく、大した実績もないわたしを仲間にして、何かメリットがあるのだろうか。
「答えは出たかね？」
「はい」
　――決まってる。
　わたしはすかさず黒い封筒を指差した。
　誰が犯罪組織の仲間になんかなるものか。
「よろしい」龍造寺は不敵な笑みを浮かべつつ、二つの封筒をスーツの内側にしまう。「楽にしたまえ」
「これで終わりですか？」
「続きはあとだ。もうすぐ我輩の仕事場に着く。そこで君に見せたいものがある。付き合ってくれるかね？」
「……はい」
　怖くて逃げ出したいけど、考えようによっては敵の城内を視察するチャンスかもしれない。少しでも彼らの情報を集めなきゃ損だ。
　窓から見える風景が、次第に都会のビル群から、雪に染まった畑や山林に変わっていく。
「我輩が犯罪被害者救済委員会のメンバーに加わったのは六年前――」龍造寺は唐突に独白し始める。「それ以来、我輩は『黒の挑戦』のトリックを作成し続けてきた。ほとんどの場合、『黒の挑戦』は何人かのクリエイターとコーディネーターによって形作られ、最終的に新仙帝が監督することになっている」
　まるで世間話でもするかのようなさりげなさで暴露を続ける。わたしに秘密を知られたところで、自分の地位は揺るがないという自信があるのだろう。
　神に等しい名探偵たちの堕落――
　あらためて本人の口から、その事実を知るのはショックだった。
「君はおそらく、犯罪被害者救済委員会をただの犯罪組織と考えているだろう。趣味のいい御仁たちを相手に殺人ショーを提供する闇の組織だと」
「違うんですか？」
「それはあくまで組織を動かすための集金システムに過ぎない。少なくともそこに理念はない。委員会が

その程度の組織だったら、我輩は初めから協力などしていなかっただろう」

　理念……か。

　彼らにも彼らなりの正義があるというのだろうか。

　車が煉瓦のアーチをくぐって、枯れ木の並木道を進む。

「この辺りから私有地だ」龍造寺が外を眺めながら云う。「君には聞こえるかね？　探偵を求める彼らの声が」

　わたしは窓の外を見る。

　町中でもないのに、並木道を歩く人影がちらほら窺える。家族連れや、恋人たち。道行く子供たちが、何故だかこちらに向かって手を振り、車を追いかけるように走り出した。けれど車の速さにはついてこられず、少しずつ距離が開き、やがて視界から消える。

　道を進むに従って、人の数が増えていった。

　やがて群衆は整然とした行列に変わっていく。

　なんの行列だろう？

　車は並木道を抜けて、再び煉瓦のアーチをくぐった。正面は噴水とバラの庭になっている。冬の季節には寂しい景色だが、壮麗な印象は失われていない。行列は噴水の庭を迂回して、さらにその先に続いている。

　車は行列をなぞるように、奥へと進む。

　やがて龍造寺の探偵事務所が見えてきた。

　それは城と呼んでも差し支えないような建物だった。高い塀の周囲に設けられた空堀に、古風な石橋が架けられている。それを越えた先に見える城門や、円塔に並ぶ無数の窓、屋上に設けられた凹凸型の狭間などは、まさしく中世ヨーロッパの城郭そのものだった。私有地に入ってからというもの、現実離れした風景が続く。

　大理石のエントランスの前で車が停まった。

　ベストの少年が外からドアを開ける。差し伸べられた彼の手を取って、わたしは外に出た。

　気づくと、エントランスまで続く行列がにわかに乱れ、車の周りに人だかりができていた。老若男女、様々な人たちがいる。彼らは期待に満ちた顔で、やや遠巻きに車を覗き込んでいた。

　やがてリムジンから自動的にタラップが伸び、龍造寺が電動車椅子で降りてきた。

　すると周囲の人だかりから、歓声にも似た明るい声が沸き起こる。

「龍造寺先生、おかえりなさい」

「おつかれさまです、龍造寺先生」

「この前はありがとうございました！」
　みんなが龍造寺のことを歓迎している。ちょっとしたアイドルか映画スターが登場したかのような沸きっぷりだ。龍造寺は片手を挙げて、無言のまま彼らを落ち着かせるようなポーズをとる。
　ベストの少年がすかさず龍造寺の後ろに回り、建物の入り口へ向けて車椅子を押し始めた。
　わたしはあっけにとられたまま、彼らのあとをついていく。
　入り口のドアが自動で開いた。
　城内一階はホテルのロビーのようになっていて、フロントにスーツ姿の受付らしき恰好をした子供たちが数人立っていた。ふかふかの絨毯（じゅうたん）に待ち合い用のソファ。
　驚いたことに、入り口から正面のエレベーターまでの間に、従業員と思しき制服を着た子供たちが並んでいて、龍造寺を出迎えた。
「せーの……」
「龍造寺先生、おかえりなさい」
　子供たちは揃って礼をする。挨拶（あいさつ）の声がやや不揃いなのが、いかにも子供らしい。
　外から続く一般客の行列は、ロビーを抜けて奥の扉へと続いている。彼らは龍造寺を頼ってやってきた悩める子羊たちだろう。おそらくその先の部屋で、事件の相談をしたり、悩み事を打ち明けたりするのだ。
　ベストの少年がエレベーターのボタンを押す。すぐにドアが開き、彼らは車椅子をバックさせながら乗り込んだ。
「君も乗りたまえ」
　龍造寺に云われ、わたしは従う。
　エレベーターのドアが閉まる直前に、モップとバケツを持った作業着姿の子供が二人、慌てて乗り込んできた。
「あっ、龍造寺先生、おかえりなさい」
「おかえりなさい」
　二人の子供が声を揃えて云う。
　エレベーターのドアが閉まり、上昇し始めた。
「掃除は終わったのかね？」
　龍造寺が少年たちに尋ねる。
「はい、窓も床もぴかぴかにしてきました」
「ぴかぴかにしてきました」

「よろしい」
　龍造寺の言葉に、子供たちは得意げだった。
　子供たちは三階で降りていく。エレベーターはさらに上昇を続け、わたしたちは五階で降りた。
　赤絨毯の廊下（ろうか）が、正面に真っ直ぐ続いている。
　ベストの少年はゆっくりと龍造寺の車椅子を押し始めた。
「なんの茶番かと君は考えているだろうな」龍造寺がわたしの心を見透かしたように云う。「あるいはカルト教団にでも迷い込んだ気分かね。しかしこれが何一つ偽りのない、我輩の日常だ」
　龍造寺を先生と敬（うやま）い、救いを求めて集まる人々。
　彼を信頼し、彼のもとで働く子供たち。
　これが誰よりも多くの人々を救ってきた名探偵（ヒーロー）の日常風景——
　彼がわたしに見せたかったのはこれなのか。
　成功した探偵の椅子から見える世界。
　そして彼の築き上げた平和のネバーランド。
　長い廊下の先に、両開きの扉がある。
　わたしたちが近づくと、扉はセンサーで自動的に開いた。
　しかしそこはネバーランドの清らかな世界とは対照的な、英雄の孤独な戦場だった。
　うずたかく積まれたファイルと書類の山。雑然と並べられた資料本。あちこちに張られた写真とメモ。その部屋はおよそ三十畳はあろうかという広さだったが、ところどころに積まれた本が山脈をなし、散乱する紙束が海をなしていた。まるで大自然の箱庭だ。あるいはこの部屋は、龍造寺の脳の中をそのまま具現化しているのかもしれない。
　部屋に入ると、龍造寺はすいすいと自ら電動車椅子を操作して、かろうじて机とわかる一角に収まった。
　今まで車椅子を押してきたベストの少年は、一礼すると部屋を出ていってしまった。
　龍造寺と二人きりになる。
　龍造寺は苦しそうに咳込んだあと、何かの錠剤（じょうざい）を口に放り込み、ウイスキーの瓶（びん）をそのまま口に当てて飲み込んだ。
「我輩はここで孤児（こじ）を雇（やと）っている。彼らは皆、探偵見習いなのだよ。必要に応じて彼らを捜査に向かわせることもある。彼らは我輩の目と耳であり、手足でもあるのだ。シャーロック・ホームズでいうところの、ベイカーストリート・イレギュラーズだな。先人から学ぶことは多い」
　龍造寺は云いながら、書類に目を通し、何かを書き込んでから別の書類を手に取る。どうやらこうし

ている間にも、彼の手で事件が一つまた一つと処理されているようだ。
「あの子たちも犯罪に加担させているんですか？」
　わたしは尋ねる。
　すると龍造寺は口元に笑みを浮かべて、首を左右に振った。
「彼らの仕事は探偵だけだ」
「——ということは、あの子たちはあなたが裏で何をしているか知らないんですね」わたしは苦々しい思いで口にする。「探偵として地位も名誉(めいよ)も手に入れ、今も事件解決に尽力しているあなたが、何故犯罪組織に加担するのか……わたしにはわかりません。探偵としてのあなたと、犯罪被害者救済委員会のあなたは、矛盾(むじゅん)せずに存在し得るのですか？」
「むしろ何が矛盾するというのだね？」
　あまりにも堂々とした口ぶりに、わたしは思わず言葉を失う。
「誰かを救うという目的は探偵も委員会も変わらない。もちろんその手段は正しいことばかりではないかもしれない。我輩の手は血にまみれてもいるだろう。だが事実、我輩はこの手で、誰よりも多くの人々を救ってきた。それが我輩の誇りだ。そしてその誇りがあるからこそ、探偵を続けられる」
　龍造寺は書類を次々に処理しながら話す。
「それでも犯罪を正当化することは許されないはずです」わたしは云わずにはいられなかった。「探偵ならなおさら！　……なおさら犯罪を憎み、理不尽な相手とだって戦わなきゃいけないはずです」
「フフ……そうかもしれないな」彼は一瞬、書類をめくる手を止めて、わたしを見た。「しかし勘違いしてはいけない。我々だって犯罪を憎み、理不尽な相手と戦っている。むしろ手を汚さずにきれいごとを並べているだけの君と、実際に血の雨の降る戦場に立つ我々、どちらが真に戦っていると云えるのかね」
「うう……でも……」
　わたしは言葉を探す。
　たかだか数年探偵をかじっただけのわたしに、十年以上も一線で活躍し続けてきた探偵を云い負かせるはずもなかった。
「長く探偵を続けていると……まっとうなやり方では絶対に誰も救えないという状況に直面する。我輩は法律においても、倫理においても、常にルールと名のつくものに対して厳格に向き合い、自分を律してきた人間だが、そのため何度も歯がゆい思いをしてきた。我輩は何度も神に祈ったものだよ。どうかもっと多くの人を救わせてくださいと」
　優れた探偵だからこその祈り——
　この世界は彼の才能を受け入れるには小さすぎたのかもしれない。

「それが……あなたが犯罪被害者救済委員会に身を置く理由ですか？」

「簡単に云えばそうなるだろう。『黒の挑戦』はあくまでフェアなルールのもとで行なわれる。我輩が新仙帝に見出した光は、そのフェアな精神性だ。彼が単なる恐怖主義者なら、我輩はまず彼を許しはしなかった」

「復讐に無関係な人間を巻きこんで、それでもフェアだと云うんですか」

「純粋なる救済の前に犠牲はやむをえない――それが我輩の出した結論だ」

「そ、そんな……そんなの本末転倒じゃないですか！」

　わたしはキャリアも能力も圧倒的に彼より未熟だけど、これだけははっきりとわかる。人を殺すことを正当化して、そのことに疑問を抱かなくなったら、もはやそれは悪以外の何ものでもないと。

「我々を許せない――君はそう考える」龍造寺はゆっくりと机の向こう側から出て、わたしに近づいてきた。「君は我輩と同じだよ。我輩も悪を許せなかった。だから我輩は悪を倒すために、彼らより強い武器を手に取る決断をした」

「違う……わたしは違います」

「いや、君はまだ決断していないだけだ」

「違います！」

　本当に違うのか？

「わたしは……」

　正義の味方になりたかった。

　救いを求めている人を助けたかった。

　だから探偵の道を進み始めた。

　あらためてそう考えると、自分のことが急に怖くなる。

　わたしの理想とする探偵像とは、龍造寺月下そのものではないか。

「迷うのは仕方あるまい。そして我輩が気に入っているのは、君のそういうところだ。君はかつての我輩なのだ」

　違う……

　わたしはそうじゃない。

「君は探偵として誇りを尊ぶ。それこそが、探偵であり続けるための唯一（ゆいいつ）絶対の条件だと我輩は思う」

　龍造寺はいつの間にかわたしの目の前にいた。

　彼の瞳（ひとみ）が、わたしを射貫くかのようにぎらつく。

「さあ、耳を澄ませ。君には聞こえるはずだ。君に救いを求めている声が――」

お姉ちゃん……

……結お姉さま。

ああ……またわたしを呼ぶ声がする。

それは救いを求める妹の声。

霧切ちゃんの声。

わたしはなんのために戦うのか。

「我輩は知っている。君は本質的にこちら側の人間なのだ。救いを求める者のために、手を汚すことさえ厭わない者なのだ」

探偵の正義って？

そもそもわたしは――何がしたかったの？

「さあ、ゲームの続きをしよう」

龍造寺は唐突に切り出す。

わたしはその言葉にはっとして、現実に引き戻された。

「ルールは覚えているね？　君はただ選択するだけでいい。だが君の人生を大きく分ける選択になることは間違いない。慎重に選ぶことだ」

わたしが戸惑っている間に、龍造寺は外套の内側から、二つの封筒を取り出した。

一つは真っ黒な封筒。

一つは真っ白な封筒。

「どちらかの封筒を手に取ったら、すぐに回れ右して部屋を出て行きたまえ」龍造寺は部屋の出口を示す。「扉の向こうはその時すでに、君自身が選択した新しい世界だ」

白と黒。

本当に人を救うのはどちらなのか。

わからない。

わたしはどちらを選ぶべきなのか？

わからない。

ただ一つはっきりとしているのは――

彼女の呼び声。

答えはそこにあるのかもしれない。

進もう――

わたしは片方の封筒を手に取った。

――自分の選んだ道を。

龍造寺は満足そうな笑みをかすかに浮かべて、くるりと車椅子の背をこちらに向けた。

「我輩の賭けは勝ったようだ。君の決断を我輩は誇りに思うよ」

わたしも彼に背を向け、部屋の出口へ向かう。

扉を開け、わたしは戦場をあとにした。

赤い絨毯の先、エレベーターの前にベストの少年が立っていた。片方の腕に上着をかけたまま、腕組みしている。彼はわたしが近づくのを待って、口を開いた。

「そちらを選びましたか」

「なんだ、君、喋れるの」わたしはびっくりして云う。「動くお人形さんかと思ってた」

冗談めかして云うと、彼は無言でわたしの右手を摑み、彼自身の胸に引き寄せて、そこに触れさせた。ベストの布越しに小さな鼓動が感じられる。わたしは気恥(きは)ずかしくなって、思わず手を離した。

彼は何か問いたげな表情で、わたしを見上げる。

「わかったわかった、君は人形じゃない。完璧な証明だ」

わたしが云うと、彼はにっこりと笑ってエレベーターのボタンを押した。

すぐに扉が開く。

エスコートに従い、わたしは彼のあとに続いて乗り込む。

小さな箱の中で、二人きりだ。相変わらず少年はいい香りがした。

「どうしてそちらを選んだのか、教えてもらえますか？」

少年は振り返らず、エレベーターのボタンパネルを見つめたまま云った。

「わたしの大切な友人と今度会う時に、胸を張っていたいからだよ」

わたしは探偵の哲学や倫理に答えを出せるほど経験もなければ大人でもない。

それでも失ってはならないものがあることくらいはわかる。

それを彼は『誇り』と呼んだのかもしれないけれど。

わたしはあらためて手の中の封筒を眺める。

黒い挑戦状――

それは前に手にした時よりも、分厚い気がした。もしかしたら次の『黒の挑戦』は、もっとややこしい

ルールを必要とするゲームなのかもしれない。
　それでもわたしは負けるわけにはいかない。
「凛々しいですね」少年は感想のようなことを口にする。「あなたがどちらの封筒を選んだとしても、しばらくの間、僕があなたをサポートすることになっています。よろしくお願いします」
「……よろしく。君の名前は？」
「必要ですか？」
「ん？」
「名前です」
「名前がわからなきゃ、君のこと呼べないよ」
「ではリコルヌと呼んでください。ここの人たちにはそう呼んでもらうようにしています」
　おかしな云い回しだ。いろんな家を渡り歩いている野良猫みたいに、場所によって呼ばれ方が違うのだろうか。
「リコルヌ君ね」
　わたしは確認するように口にする。
「短く『リコ』でも構いません」
「わかった、そうする」
　エレベーターが一階についた。一般客の行列はまだ途切れていない。子供の従業員たちはロビーを離れ、それぞれ持ち場で働いているようだ。
　わたしとリコは大理石のエントランスを抜ける。
「早速質問だけど、君も犯罪被害者救済委員会の仲間なの？　子供たちは犯罪に関与してないって龍造寺さんは云ってたけど、君はこの黒い封筒のことを知っているみたいだね」
「僕は委員会とは何も関係がありません。事情を知っているというだけです」
「そう……でも君は龍造寺側の人間でしょう？」
「ええ。そのうえで僕はあなたをサポートします」
　要するに監視役？
　それとも本当にただのサポート役なのだろうか。もしかしたらこれが龍造寺なりのフェアなやり方なのかもしれない。
「君はいつから龍造寺さんのところで働いているの？」
「半年くらい前からです」
　彼は首を傾げながら、思い出すように答える。そのしぐさは子供っぽかったけれど、全体的に雰囲気

は大人びている。つくづく不思議な子だ。
　建物の入り口にリムジンが停められたままになっていた。運転席には運転手の姿が見える。さすがに運転手は子供ではないようだ。
　リコが後部ドアを開けて、わたしの手を取り、車内へ促した。
「どちらまで送りましょうか？　探偵図書館？　それとも自宅ですか？」
「寮まで送ってくれると嬉しい」
「わかりました」
　リコは車の前方に回り込んで運転手に何か指示した。それからすぐに戻ってくる。
「今日のところは僕もここで失礼させてもらいます。最後にこれをお持ち帰りください」
　リボンをかけた細長い木箱を受け取る。両手の中に収まるくらいの大きさで、けっこう軽い。
「龍造寺からの贈り物です。ただし必要な時にだけ開けてください」
「必要な時、ね……」
「それではまた」
　リコはドアを閉じると、車から一歩離れてお辞儀した。
　まもなく車が動き出す。
　噴水とバラの庭を迂回し、救いを求める人たちの行列を逆にたどるように、車が速度を上げていく。窓に見えていたリコの姿も、やがて見えなくなった。
　煉瓦のアーチを越えて、並木道を進む。辺りはすっかり暗くなり、点々と灯る街灯の明かりの中に、小雪のちらつく様子が見てとれた。
　途中、街灯の下をほうきがけしている子供を二人見つけた。
「運転手さん、ちょっと止まってください」
　わたしはとっさに運転席に向かって声をかけた。仕切りの壁があるため運転席はここから見えないが、声に反応して車はすぐに止まった。
　掃除中の子供たちが何事かと車を覗きに来る。
　わたしはパワーウィンドウを下げて顔を出した。
「ねえ、君たち」
　子供たちに声をかける。
　小学生くらいの彼らは、不思議そうな顔でわたしを見返した。
「龍造寺先生ってどんな人？」
　少年たちは顔を見合わせてから、素直な笑顔を見せる。

「とってもいい人だよ」
「怒ると怖いけど」
　二人は口々に云う。
「僕は先生みたいな探偵になるのが夢なんだ」
「僕も大きくなったら先生みたいになりたい！」
「そう……教えてくれてありがとう。お掃除がんばってね」
「はーい」
　手を振って別れる。
　車が再び動き出した。
　子供たちが嘘を云っているようには見えなかった。少なくとも何かを強要されていたり、洗脳されていたりする人間の表情ではない。
　けれど犯罪被害者救済委員会の力を考えれば、今日見たすべてのものが、あらかじめ用意されたまやかしだったとしてもおかしくない。わたしはまだ夢の中にいるような浮遊感を拭えずにいる。
　ぼんやりと窓の外を眺めているうちに、景色が次第に見慣れた都市の風景に変わっていった。
　わたしは黒い封筒を窓にかざし、街明かりを使って中を透かし見ようとしたけれど、まったく何も見えなかった。

　やがて校門の前で車が止まる。
　運転手は何も云わなかった。わたしはドアを開けて、車を降りる。運転手に向かって一礼すると、車は何事もなかったかのように車線に戻り、わたしの視界から消えていった。
　やっと現実に戻ってこられた気がする。遠目に見える寮の明かりが懐かしく感じられた。
　寮に入ると、廊下に人だかりができていた。
　なんだか騒がしい。
　胸騒（むなさわ）ぎがする。
　寮の別の部屋に住む子たちが、わたしに気づいて声を上げた。
「あっ、結！　大変だよ」
「何かあったの？」
「いいから早く、こっち」
　彼女たちに手を引かれ、わたしは廊下を進む。どうやら人だかりができているのは、わたしの部屋の前らしかった。

「結の部屋にピッキングで入ろうとしていた怪しいやつがいたんだ」
「ピッキング？」
　寮の仲間たちをかき分けて、たどり着く。
　わたしの部屋の扉を背にして、女の子が膝を抱えて座り込んでいた。
　寮の古ぼけた蛍光灯の下でさえ、つややかに光って見える髪に、いっそう青ざめて見える白い頬。彼女は不服そうな顔で正面を見据えていたが、わたしに気づいて、ぱっと明るい顔になった。
「結お姉さま！」
　霧切響子だった。
　彼女は立ち上がって、わたしに抱きついてきた。
　その小さくて軽い身体を抱きとめる。彼女の服はところどころ汚れていて、土と埃（ほこり）の匂いがした。こんなふうに彼女がわたしに身体を預けるなんてこと、今までなかったと思う。彼女の頭を抱くと、もろくて壊れてしまいそうな気がした。
　事情が飲み込めない寮の生徒たちは、わたしと霧切の様子を見て、何故だか拍手（はくしゅ）を送り始めた。感動の再会に見えたのだろうか。
「警察に通報しなくって大丈夫？」
　寮の仲間が尋ねる。
「うん、大丈夫。この子は知り合いだから。みんなありがとう」わたしは云いながら、扉を開けて自分の部屋に霧切を押し込んだ。「それじゃ、みんなおやすみ。あとのことは任せて」
　わたしは部屋に入って、ざわめきと好奇の目を遮断するように、後ろ手に扉を閉めた。
　鍵をかける。
　霧切は困ったような顔で、わたしを見上げた。
「忍び込もうとしたところを見つかってしまったの」
「誰にでも失敗はあるよ」わたしはリュックをベッドの上に投げ出し、霧切をその横に座らせる。「そもそも正面から忍び込もうっていうのが失敗じゃない？」
「最初は窓を割って入ろうとしたわ。でも窓に穴が空いていたら寒いかと思って」
「気を遣（つか）ってくれたんだね。ありがとう」
　霧切の頭をなでなですると、彼女は納得していない顔つきで、ぶるぶると頭を振った。
　わたしは勉強机の椅子に座って、彼女に向き合う。
「どうしてわたしの部屋に忍び込もうとしたの？」
「私にはもうここしかなかったから……」

霧切は俯(うつむ)いて、膝の上で組んだ指先を見つめた。
　沈黙が訪れる。
　このままわたしが黙っていれば、何か説明を始めるのではないかと期待したけれど、彼女は黙ったきりだった。
「とにかく無事でよかった」わたしは彼女の手に自分の手を重ねた。「心配してたんだよ、霧切ちゃん。連絡も寄越(よこ)さないで、何処に行ってたの？」
「……今は話せない」
「それってどういう意味？」わたしは少しむっとして云った。「わたしを信用してないから？　それともわたしなんかじゃ頼りにならないから？」
「そうじゃないの」霧切は切迫した様子で云う。「まだ気持ちの整理がつかないというか……」
　冷静沈着な彼女が取り乱している。わたしの知らないところで、よほど彼女を混乱させるような事態が起きていたのだろう。探偵としても一流である彼女を、ここまで追いつめることができる存在といえば、一つしか思い当たらない。
「あいつらが何かしたんだね？」
　霧切は長い沈黙のあとで肯く。
　――許せない。
　中学生の女の子を相手に、大人たちが全力でかかってくる。彼女がたまたま探偵の血をひく一家に生まれたばっかりに……
「いずれ結お姉さまにも説明するわ」霧切は目を伏(ふ)せたまま云う。「とにかく、この数日、私は彼らから逃げ回っていたの。少なくともお祖父(じい)さまが来るまで時間を稼(かせ)ごうと思って。今のところ彼らの狙いは私なのだから、私さえ姿を隠していれば、彼らは何もできないはず……」
「さすがだね。あいつらは霧切ちゃんの行方を見失っていたよ。君が何処にいるか、わからないって――」
「結お姉さま」霧切は愕然とした表情で、わたしの言葉を遮った。「それ、誰から聞いたの？」
「あ、えっと……」
　わたしは逡巡(しゅんじゅん)する。
　今日あった出来事を彼女に打ち明けるべきだろうか？
　新しい『黒の挑戦』の話をすべきだろうか？
　けれど彼女をさらに追いつめる結果になってしまうかもしれない。これ以上、つらい目に遭(あ)わせたくない。
　しかし悩むまでもなく――霧切にはわたしの迷いさえ、お見通しのようだった。

「委員会が接触してきたのね？」霧切は眉間に小さな皺をつくって、下唇を噛んだ。「遅かった……やっぱり想像していた通りになってしまったわ。私がいない間に、もしかしたら彼らの矛先が結お姉さまに向けられるかもしれないと思ったの。私を引っ張り出すために、お姉さまを利用するかも……って。だから真っ先にここに来たのよ」
「そっか……でも今回は君だけが目的じゃない気がする」
「どういうこと？」
　わたしは龍造寺とのやり取りを話して聞かせた。
　話を聞いているうちに、霧切はだんだんといつもの凍てついたような探偵の顔つきになっていった。そんな彼女はかっこよくて、でも少しかわいそうだった。彼女の才能は、彼女自身を滅ぼしてしまいかねないほど強く、そして儚い。
「わたしが白い封筒を手に取っていたら、彼らは本当にわたしを仲間として受け入れたのかな」
「後悔しているの？」
「まさか」わたしは鼻で笑って返す。「あいつらの思い通りになんかさせないよ」
「でも……結果的に彼らの思い通りになっている気がするわ」
　確かに龍造寺は、わたしが白の封筒を取らないと考えていたようだ。結末がわかっていてなお行動に出る、そういう確信犯的なところが恐ろしい。
「龍造寺さんの話を聞く限り、彼らは本当に『黒の挑戦』が犯罪被害者を救う手段だと考えているみたい。もしかしたら彼らにとって、霧切家は最大の邪魔者なのかもしれないね」
「どうかしら……」
　霧切は考え込むようにして呟いた。心ここにあらずといった様子だ。
「ちなみに、これが新しい挑戦状」
　わたしはリュックから黒い封筒を取り出す。
「まだ開けていないのね？」
「うん、開けたら『黒の挑戦』が始まっちゃうでしょう？　さすがにその場で開ける勇気なんてなかった」
　挑戦状の封筒にはセンサーチップらしきものがついていて、開封されるとその情報が犯人と委員会に発信される。この瞬間から計って、168時間が『黒の挑戦』のゲーム時間だ。犯人の勝利条件は、復讐すべき相手を全員殺し、探偵に告発されないこと。逆に告発された場合や、標的を全員殺せなかった場合、敗北となり、『黒の挑戦』において使用されたコスト（委員会が立て替えた金）をすべて払う義務が生じる。とうてい個人では払えない金額になるので、犯人は生命保険などで代償を払うことになる。

「このまま開封しないとどうなるんだろう？」

「開封されなかった挑戦状は別の探偵に回されるんじゃないかしら。でも今回は最初から結お姉さまを狙い撃ちしているみたいだから、それをスルーしてもまた新しい封筒が届くだけでしょうね」

　わたしは黒い封筒を蛍光灯にかざす。やはり中身は見えない。

「どうせまたどっかに閉じ込められることになるんだろうね。はあ……」ため息が自然と零れる。「今度は山荘？　それとも孤島かな。だいたいわたしは殺人事件が専門じゃないのに……」

「でも事件の難易度は結お姉さまのランクに沿ったものになるはずだから、前回よりは楽かもしれないわ」

「あ、そっか」

『黒の挑戦』では、事件で扱われる凶器やトリックなどから、召喚される探偵のランクが決定される。今回はすでにわたしを召喚することが予告されているので、おおよそ事件の難易度が予測できるというわけだ。

「霧切ちゃんも手伝ってくれるよね？　また一人でどっか行っちゃうなんていやだよ」

「ええ、もちろんよ。もう『黒の挑戦』は私にとって無意味でも無関係でもないわ。降りかかる火の粉は払わなければならない」

　霧切はいつになく真剣なまなざしで云う。彼女の瞳は、冷たく燃えていた。

「タイムリミットが計りやすいように、時間を見計らって封筒を開けよう」わたしは云う。「明日の正午はどう？」

　霧切は肯く。

「それまでに準備を済ましておこう。万全の態勢で臨まなきゃね。まず霧切ちゃんはお風呂に入っておいで。そのぼさぼさの髪もちゃんと結ってあげるから」

　その夜、霧切はわたしのベッドに入るなり、すやすやと寝息を立て始めた。彼女が今まで何処でどんなふうに孤独な戦いを続けていたかはわからないけれど、少なくとも今は安らぎに身を委ねることができているようだ。

　こんな夜が、ずっと続けばいいのに。

　それすら許されない宿命か。

　ベッドは二人で寝るには小さすぎたので、わたしは床で寝ることにした。たぶん平和な夜は、今日を最後にしばらく訪れないだろう。

　明けて、一月十日。

わたしと霧切は学校に一週間の休学願いを提出した。学長のシスターは理解ある人なので、問題なく受理された。

きっかり正午に、わたしは黒い封筒を開封した。

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　BAR『グッドバイ』　2000万
凶器　ナイフ　500万
凶器　カリブドトキシン　3000万
凶器　ロープ　300万
トリック　密室　2000万

総コスト　7800万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　中世西欧拷問器具博物館　３０００万
凶　器　アイアンメイデン　３０００万
トリック　密　室　８０００万
総コスト　１億４０００万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　武田幽霊屋敷　3000万
凶　器　どうたぬき　3000万
トリック　密　室　1億
その他　ゴムバンド　100万
総コスト　1億6100万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　黄泉水族館　5000万

凶器　氷塊　300万

トリック　密室　1億

総コスト　1億5300万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	黄泉水族館	5000万
凶器	硫酸	1000万
トリック	密室	1億
その他	ガスバーナー	500万
総コスト		1億6500万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　枯尾花学園　3000万
凶　器　ろうそく　2000万
トリック　密　室　1億5000万
総コスト　2億

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	音張島	7000万
凶器	ギター	1000万
トリック	密室	1億2000万
その他	スピーカー	2000万
	総コスト	2億2000万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　豪華客船『エキドナ号』１億

凶　器　牙　１億

トリック　密　室　１億

総コスト　３億

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　リブラ女子学院　２億

凶　器　鉄パイプ　３００万

トリック　密　室　１億５０００万

総コスト　３億５３００万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　沢目鬼自然会会館　3000万
凶器　丸太　300万
トリック　密室　1億
その他　羊皮紙　5000万
その他　宝石　2億

総コスト　3億8300万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　大望洋館　1億8000万

凶器　大バサミ　500万

トリック　密室　2億

総コスト　3億8500万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	双生児能力開発研究所	5000万
凶器	ナイフ	5000万
トリック	究極の密室	5億
その他	鎖	3000万
その他	南京錠	3000万
総コスト		5億6100万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

第二章

正体不明

GHOST IN THE MIRROR

黒い封筒を開封し、中の黒い和紙を引っ張り出したところで、それがやけに分厚い理由がわかった。

　挑戦状は全部で十二枚入っていた。

　封を開けるまで様々な事件のパターンを想定していたけれど、現実は想像をはるかに凌駕して、わたしたちを絶望に叩き落とした。

　十二枚すべて、わたしの名前が記されている。

「な、な……何これ……」

　わたしは震える手で、何度も挑戦状を見返した。同じ挑戦状がコピーされて十二枚入っているのではなく、どれも別の事件らしい。

「トリックは密室で統一されているみたいね」

　霧切は努めて冷静に云う。けれど顔色が悪いのは明らかだった。

「一週間以内に十二の事件を解決しろって云うの？　しかも全部密室殺人？　こんなのめちゃくちゃだ！」

　あらためて犯罪被害者救済委員会の恐ろしさを目の当たりにした気分だ。彼らに常識は通用しない。そんなこと最初からわかりきっていたはずなのに。

　もうゲームは始まってしまった。

「どうしたらいいの……」

　わたしは頭を抱えて、小さな部屋の中をうろうろと歩き回る。

　十二枚の挑戦状のうち、現場が同じなのは二件だけ。つまり少なくとも、十一箇所の現場へ赴かなければならないということだ。それぞれの場所が何処にあるかは調べてみなければわからないけれど、一つの町に固まっているなんて救済措置はないだろう。どう考えても一週間では時間が足りなさすぎる。

「落ち着いて、結お姉さま。対策を練りましょう」

「対策って……こんなの『どこでもドア』でもなければ解決できないよ！　仮にあったとしても、同時に十二の事件をさばくなんて無理だ！」

「最悪の場合、捨てるしかないわ」

「……捨てる？」

「たとえ事件を解決できなかったとしても探偵にペナルティは一切ない。それなら解決できそうな事件だけを選んで、あとは無視するの。試験で解けない問題を飛ばすようなものよ」

「これは試験じゃなくて事件なんだよ？　実際に殺される人がいて、殺す人がいる。人の命がかかって

いるんだ。無視していい事件なんかない」
「ええ、だから可能な限り解決しましょうって云ってるの。あちこち手を出して中途半端に終わるより、処理できるものから順番に片づけていくほうが確実でしょう」
　霧切はベッドに腰かけて、訴えるような目つきでわたしを見る。
　目的のために何を犠牲にするのか。
　また選択を迫られている。
「……確かに君の云う通りかもしれない」わたしは彼女の横に座り、ようやく落ち着きを取り戻した。「そもそもわたしの力では、一つだって解決できるかどうかわからないのに……がんばれば全部どうにかできるんじゃないかって、勘違いしてた」
「急に弱気になるのね」
「現実に打ちのめされているんだよ。どんなに背伸びしても見えない風景があるってことを、彼らはきっとこの挑戦状で教えようとしているんだ」
「でも結お姉さまは誰よりも高く跳べるわ」霧切はぎこちない笑顔をつくって云った。「お姉さまがいたから、乗り越えられたこと、いっぱいある」
「霧切ちゃん……」
　君はいつの間にか笑顔も見せてくれるようになったんだね。
「だからそんな弱気になっていてはだめよ。まだ希望はあるわ」
「希望？」
「探偵図書館には密室殺人を得意としている探偵が何人も登録されているわ。彼らの力を借りることができたら、十二件の事件も同時に攻略できるんじゃないかしら」
　そうか！
　敵が物量作戦でくるなら、こちらも探偵をたくさん雇って立ち向かえば——
「ちょっと待って、それはだめだよ」わたしはすぐに否定する。「探偵図書館は信用ならない。裏で犯罪被害者救済委員会と繋がっていると思うんだ。探偵の中には、委員会のメンバーが交じっているに違いない」
　白の封筒を受け取った者たち。
　聞くところによると、犯罪被害者救済委員会の秘密を探ろうとしてそのまま行方をくらましてしまった探偵は、二桁に上るという。単純に考えれば消されたのだろうけど、もしかしたら中には、わたしと同じように入会の誘いを受け、白い封筒を手に取った者もいたかもしれない。
「そうね……そういう人たちこそ、私たちの邪魔をするために喜んで手を挙げるでしょうね」

「でしょ？　集まった探偵が敵か味方か、いちいち判別している時間はないよ」わたしは置き時計を横目に見ながら云う。「ほら、もう三十分も経ってる！　こんな調子じゃ悩んでいるうちに一日が終わっちゃうよ！　あうう……どうしたらいい？　どうしたら……」

探偵図書館の探偵は頼りにならない。

それなら探偵図書館に登録していない探偵を探すか？　未所属でなおかつ密室に詳しい探偵をどうやって見つけてきたらいいのだろう。

「君のお祖父さんはどう？　まだしばらく来られないの？」

「ええ」霧切は考え込むようにして肯く。「あの日から連絡はないわ」

十日前、霧切家の現当主である霧切不比等（ふひと）から、『新仙帝には近づくな』と注意を促す連絡があった。彼は海外で重要な仕事に当たっているため、帰ってくるまで時間がかかるらしい。

「やっぱりわたしたちだけで戦うしかないのかな……」

「一人だけ、あてになりそうな人がいるわ」霧切が顔を上げて云う。「むしろ何十人と探偵を雇うよりも、その人だけいればいいかもしれない」

「えっ、誰？　君の探偵仲間？」

「いいえ、私も知らない人――トリプルゼロクラスの一人、御鏡霊（みかがみれい）よ」

現在『000』のナンバーを持つ探偵は三人いる。

『安楽椅子伯爵』こと龍造寺月下。

『法執行官』ことジョニィ・アープ。

そして正体不明の御鏡霊。

御鏡霊のプロフィールは一切明かされておらず、何処にいるのかもわからない。今まで扱ってきた事件の報告ファイルだけが、彼あるいは彼女の存在を示している。

御鏡霊が扱うのは、主にオカルトめいた不可思議な事件や、歴史的な未解決事件など、きわめて謎が深い事件ばかりだ。六〇年代に発生し未解決のままになっていたロサンゼルスの劇場型連続殺人事件、通称『ゾディアック事件』を解決した際には、不透明な硝子（がらす）越しに姿を隠したまま地元新聞のインタビューに応じ、御鏡霊という名前を『GHOST　IN　THE　MIRROR』と訳されたエピソードがある。そのフレーズは今では御鏡霊の代名詞にもなっている。

「龍造寺月下とジョニィ・アープが新仙帝と一緒にいるところは確認しているけど、その場に御鏡霊はいなかったわ」

「でもどうせ委員会のメンバーに違いないよ。正体を明かさないことで有名な探偵だから、表に出てこなかっただけで、彼らの仲間に決まってる」

「それを確かめる意味でも、御鏡霊にコンタクトをとってみる価値はあると思うの。もし敵なら、早いうちに正体を知っておくべきだと思うし」
「それもそうだけど……」
　トリプルゼロクラスの探偵たちを『敵』として相手にしなければならないことに、あらためて戦慄を覚える。場違いな戦場に放り込まれた気分だ。どうしてこんなことになってしまったのだろう。わたしは何処からどう見ても、ただの女子高生なのに。
「誰も正体を知らない相手と、どうやってコンタクトを取るの？」
「……まずはそれを考えるところから始めるのよ」
「そうしているうちに一週間が過ぎなければいいけど」
「皮肉を云っている暇（ひま）があったら、お姉さまも考えて」
　霧切は少し怒ったように云った。
　彼女をなだめつつ、あらためて御鏡霊について考えてみる。
　今までの経験上、ランクが高いからといってまともな探偵とは限らない。正体を隠していることからみても、よほどの変人ではないだろうか。
　敵なのか？
　味方なのか？
　もしトリプルゼロクラスの探偵が味方になってくれたら、解決時間を飛躍的に短縮できるかもしれない。
「また前みたいに探偵図書館に書き置きを残してみる？　でも探偵図書館は信用できないし……」
　対策案も尽きてきて、わたしと霧切は揃って腕組みしながら黙っていた。もはや何から手をつけるべきかもわからない状態だ。
　その時――聞き慣れない電話の呼び出し音が何処からともなく鳴り出した。
　わたしと霧切は顔を見合わせる。
「霧切ちゃんのケータイ？」
「いいえ、私は持っていないわ」
「わたしのでもないよ」
　自分のケータイを確認する。画面は待ち受けの状態だし、呼び出し音は鳴ってもいない。けれど確かに何処からか、音が聞こえてくる。
　聞き耳を立てて、音の出どころを探る。
　音はわたしのリュックの中から聞こえていた。

「あ、もしかして……」
　昨日、龍造寺の探偵事務所を去る際に、リコルヌ少年から受け取った贈り物を思い出す。わたしは急いでそれをリュックから引っ張り出した。
　音は確かに木箱の中から聞こえてくる。
　リボンを解（ほど）いて、箱を開けると、中には緩衝材にくるまれた携帯電話が入っていた。着信を知らせるように光っている。箱の中身はそれだけだった。
「それは？」
「龍造寺さんがくれたやつ」わたしは簡潔に答えて、携帯電話を取り出した。「出るよ」
　霧切が肯く。
　液晶画面には『非通知』の表示。
　わたしは通話ボタンを押した。
「——もしもし？」
『ごきげんよう、気分はどうだね』
　そのダンディな声には聞き覚えがある。
「龍造寺さん？」
『ご名答。挑戦状を開封したようだな。今までとは違う趣向に驚いている頃だろう』
「こういうのはフェアとは云えないんじゃないですか？」
　わたしは刺々（とげとげ）しく云う。ついでに霧切にも会話が聞こえるように、ケータイをスピーカーモードにした。
『フフ……あくまでフェアな「黒の挑戦」だよ。むしろ君に有利すぎるくらいだ』龍造寺の声はこの状況を楽しんでいるかのようだった。『我輩がこうして君に連絡していること自体、例外中の例外だ』
「わたしになんの用ですか」
『用件は三つ。まず一つ、今回の「黒の挑戦」においては、警察情報が重要となる。警察が手に入れた情報については、リコを通して、すべて君も共有できるようにしてある。いつでも彼を頼るといい』
　なるほど、彼の云っていたサポートというのはそういうことか。
「わかりました。彼の連絡先は？」
『その携帯電話に登録されている。自由に使ってくれたまえ。電話料金はこちら持ちだ』
　龍造寺は冗談を云ったつもりか、フフ……と笑った。
　まったく笑えない。
『二つ目。今回の「黒の挑戦」は、この龍造寺月下が監督し、プロデュースしている。つまり今回は十二人の犯人からの挑戦であると同時に、我輩からの挑戦でもあると受け取ってもらいたい』

「――はい」
『そこで我々の勝負にも、勝利条件と敗北条件を設けようと思う』
「はい……えっ？」
　我々の勝負？
　トリプルゼロクラスの探偵とわたしが勝負をするの？
『時間内にすべての事件を解決するか、あるいは未然に防ぐことができたら君の勝ちだ。だが一つでも解決できない事件があったら君の負け。いかがかね？』
「そんなの勝負になってません！　どう考えてもこちらが不利じゃないですか」
『ただし――』龍造寺はわたしの主張を無視して続ける。『我輩が負けた場合は、犯罪被害者救済委員会から降りる』
「降りるって……委員会から抜けるということですか？」
『そうだ。主要なクリエイターである我輩が抜ければ、委員会は片腕をなくすのと同じくらいの痛手になる。君にとっては願ってもない条件だろう』
「わたしが負けたら？」
『特に何もない。君は負けても、また戦場に戻るだけだ。強いて云えば、それが君にとってのペナルティかもしれないな。探偵である限り、君の戦いは続く』
　勝利条件は厳しいけれど、ノーリスクでハイリターンを勝ち取れるゲームといえる。だからこそ何か裏があるように思えるのだけれど……
　確認するように、霧切を見る。
　彼女は黙ったまま小さく肯く。
　覚悟は決まった。
「わかりました。その勝負、受けて立ちます」
『よろしい、それでこそ我輩の見込んだ探偵だ』
　もうどうせあとには引けないんだ。
　やるしかない。
「三つ目の用件は？」
『御鏡霊を知っているかね？』
　その名前にどきりとする。
「ファイルで見たことがあります」
『それなら話は早い。一年前にアラスカのフェアバンクスで消息が確認されたのを最後に、行方をくらま

していた御鏡霊が、すでに帰国していることが確認された』
「……ということは龍造寺さんたちも今まで御鏡霊の所在がわからなかったんですか？」
『残念ながら我々にとっても、御鏡霊が　正体不明（ゴースト・イン・ザ・ミラー）　であることにかわりはないのだよ。帰国しているという情報を得たのも、ある複数の組織が他国から同時に入国してきたという事実を紐解いた結果だ』
「意味がよくわからないんですが……」
『御鏡霊は世界中のあらゆる組織から追われている。警察、諜報部、特殊部隊、軍、暗殺者、探偵、マフィア、ゴロツキ……要するに、その才能を利用したい連中と、されたくない連中が、数年前から御鏡霊を巡（めぐ）って争奪戦を繰り広げているのだ。ある国では、国家をあげて専門の御鏡霊捕獲チームを結成している。そういった専門チームの動向を調べることで、御鏡霊の足取りがおぼろげに見えてくるというわけだ』
　なんだか想像できないくらい規模が大きな話になってきた。しかもその話からすると、犯罪被害者救済委員会はかなり遅れをとっているように聞こえる。
『さてここからが本題だが……本日、二つの組織と三人の殺し屋が、目由良（めゆら）駅を目指して動いていることがわかった。彼らがしばらく前から御鏡霊を追っていることは確認できている。まさかみんな揃ってピクニックというわけでもあるまい。我輩の云いたいことはわかるかね？』
「はい」
　御鏡霊が目由良駅に現れる——
　目由良駅といえば、繁華街の真ん中にあるターミナル駅だ。しかもここからそう遠くない。バーゲンの時期には、わたしもよく足を運んで、服を買ったりしている。
　わたしがいつもショートパンツの丈の長さに一喜一憂している場所で、世界のパワーバランスを左右する駆け引きが行なわれるというのか。ありふれた風景に、非日常を思い描くのは難しかった。あまりにも現実離れしている。殺し屋だって？
『君も駅へ行ってみる価値はあるだろう。もしかしたら幽霊に出会えるかもしれない。すでに委員会も動き出している』
　あれ？
　委員会は御鏡霊の正体を知らず、行方も追い切れていない。それって、もしかして……
「御鏡霊は委員会のメンバーではないんですか？」
『もしメンバーだったら、最初から君にこんな話はしていない』
　御鏡霊は敵じゃない！

まさしく朗報だ。それはつまり、敵側の戦力が想定していたよりも三割ほど低いという意味でもある。これでもし、さらに龍造寺月下を委員会から引きずり降ろすことができれば、実質相手の戦力は半分になると考えていいだろう。

「でも、どうして御鏡霊が現れることをわたしに教えてくれたんですか？」

『あくまでフェアプレイのためだ。君は今、一人でも多く仲間がほしい状況だろう？　ちなみに仲間を集めて捜査に当たるのは不正ではない。何人でも集めたまえ』

　何もかもお見通しか。

『もっとも、御鏡霊は孤高だ。仲間にできるとは限らない。あるいは逆に、我々委員会の理念に賛同し、こちらに参加してくれる可能性もある。そういう意味では、御鏡霊の争奪戦は今回の「黒の挑戦」の第一ラウンドと云えるだろう』

　彼の云う通りかもしれない。

　敵じゃないから放っておけばいいというわけにもいかない。多少の時間をロスしてでも、御鏡霊を仲間につけておきたい。そんなことが可能なのかどうかはともかく……

『我輩からの用件は以上だ。これをもって、我輩が君と直接やりとりすることは今後一切ない。次に会う時は、どちらかが勝者で、どちらかが敗者だ』

「あのっ……」切られそうになった電話を慌てて引き伸ばす。「本当にわたしたち、戦うしかないんですか？　龍造寺さんはそれを望んでいるんですか？」

『望んではいない。できることなら君とは理想を共にしたかった。だが時は巻き戻せない。君も、我輩もな』

　受話口から沈黙が伝わってくる。

　わたしは口にすべきいくつかの言葉を頭に思い浮かべたけれど、結局云うことはできなかった。

『いい勝負にしよう』

　その言葉を最後に、通話は切れた。

　わたしは重いため息を零す。

「……なんかすごい大ごとになってきちゃった」率直な感想だ。「女子高生探偵にはもういろいろと手に負えない状況だよ」

「中学生探偵の私がついているわ」霧切はわたしを元気づけるように云う。「それより龍造寺月下と結お姉さまが普通に会話をしていて驚いた。随分打ち解けていたわね」

「あれが仲良しの会話に聞こえた？　こっちは手が震えっぱなしだよ……あ、もしかして君、やきもち焼いてる？」

「全然焼いてないわ。なんにも焼いてない」
「へえ、そう」
「でも少しだけ希望が見えてきたわね。一刻も早く御鏡霊と交渉する必要があるわ」
　希望……か。
　はたして御鏡霊は希望になり得るのか？
　そもそも各国の諜報部だの殺し屋だのを出し抜いて、わたしたちが御鏡霊にコンタクトを取ることができるのだろうか。
「とりあえず目由良駅まで行ってみよう。その前に……霧切ちゃんは一度家に戻る？」
「いい」
　霧切は首を振る。
「でもその制服とブラウスしか持ってないんでしょ。着替えを取りに――」
「いいの。早く出かける準備して」
「な、何をそんなにムキになってるの」
　その時、会話を遮るように、また手元の携帯電話が鳴りだした。
　液晶画面を見ると『着信　リコルヌ』とある。わたしは通話ボタンを押した。
「もしもし？」
『五月雨結さんですね？　電話に出るのが早かったですね。すでに龍造寺から説明を受けたあとでしょうか』
「その通りだよ」
『では説明を省(はぶ)きます。龍造寺から、目由良駅へ向かえと命令されました。合流しましょう』
「監視しろって云われたの？」
『雪の下でお待ちしています』
　電話は切れた。
　少しイラっとしたけれど、最後のフレーズが素敵だったので、ケータイを投げ出さずに我慢した。

　結局わたしはいつもの制服で寮を出てきた。せっかく霧切と街へ出るのだから、おしゃれしたいところだったけれど、すでに『黒の挑戦』が始まっている以上、浮かれてばかりもいられない。命をかけたゲームの残り時間は一分一秒と減り続けているのだ。ということで動きやすくて着慣れた、わたしの戦闘服を選んだ。
　電車に乗って五駅。わたしと霧切は並んでシートに座り、向かいの窓から見える景色を眺めた。うっ

すらと雪の積もった町並みに、ちらちらと小雪が降っている。
「このまま電車に乗っていけば、海に出るんだ」
　わたしが云うと、霧切は怪訝そうにこちらを向いた。
「夏になったら、一緒に海に行こうよ」
　霧切は驚いたような顔をして、それから俯きがちに肯いた。けれどその表情は暗く、そんな日が来ることを信じていないかのようだった。わたしが笑いかけると、彼女は困ったように顔を背けた。
　電車を降りて、待ち合わせ場所へ向かう。
　平日の昼間なので、それほど混んでいない。駅前にある雪の結晶を模したような六花のモニュメントの前に、ネクタイ＆ベストの少年が真っ黒な傘をさして立っていた。
「お待たせ」
　わたしが近づくと、彼は頭を下げた。相変わらず妖精みたいな、ふわふわとした美しい少年だ。いつものようにスーツの上着は腕にかけている。寒くないのだろうか。
　霧切はわたしの背後に隠れるようにして、リコルヌ少年のことを窺っている。
「友人が一緒だけどいい？」
　わたしは霧切のことを指して云う。
「問題ないです」リコは神秘的な笑みを浮かべて云う。「歩きながら話しましょう。ショッピングでもどうですか？」
「いいね！」
「結お姉さま」霧切が背後から裾を引っ張る。「浮かれてる」
「違うよ、カムフラージュだよ」
　わたしたちはリコのあとについていく。リコは駅ビルに連なる百貨店に入っていった。暖房の効いたフロアを進み、エスカレーターで上を目指す。
「御鏡霊が具体的にいつ何処に現れるのか、君は聞いてる？」
　リコの小さな背中に声をかける。
「僕は駅に行けと命令されただけです」
　彼は前を向いたまま答えた。
「ふうん……それならわたしたちは今、何処に向かっているの？」
「三階の婦人服売り場です」
「そこに御鏡霊がいるの？」
「いいえ。結さんが行きたいだろうと思って」

「君ねえ……気が利いてるじゃないか」
「結お姉さま」霧切がわたしの背中を小突く。「ふざけるのもいい加減にして」
「ふざけてなんかない。わたしは真剣に君に似合う服を探したいんだ」
「私、帰る」
　霧切は振り返って立ち去ろうとする。しかしエスカレーターなので、その場で数段足踏みしただけだった。彼女は諦めて、ふてくされたような顔で背中を向けたまま、三階フロアまで上がってきた。
　わたしは彼女の手を掴んで連れて歩く。
「御鏡霊の正体については、噂ばかりが先行していて、もはや何が本当なのか誰もわからない状態です。その存在自体が都市伝説ではないかと考える者もいます」
　リコが婦人服売り場の通路を歩きながら、唐突に話し始める。他の客たちは売り物に目を奪われていて、わたしたちに関心を寄せることはない。カムフラージュというのもあながち間違っていないかもしれない。
「『御鏡霊複数人説』っていうのを考えたんだけど、どう？」わたしは思いつきで云う。「エラリー・クイーンみたいに実は二人の人間による共同名義とか……もしかするとマイケル・スレイドみたいに、数人のチームかも――」
「この服、響子さんに似合うと思いませんか？」
　リコはわたしの話も聞かずに、ブランドショップに入っていく。
「ねえ君、わたしの話を……あっ、いい、その服！　霧切ちゃん、試着してみて！」
　水色のワンピースを手に取る。春の空の色だ。胸元はレース地にリボン。あんまり色が明るすぎても彼女っぽくないから、落ち着いた色のカーディガンと合わせて……
「少女趣味ね」
　霧切は自分の胸元に当てられた服を見下ろしながら、呆れたように云う。
「何云ってるの、君は今ちょうど少女なんだから似合わないはずがないだろ。うーん……でも、確かにもう少し大人っぽい方がいいかな……」
「私は制服があればいいわ」
「一生制服ってわけにもいかないんだよ。リコはどう思う？　男子の意見を聞かせて」
「かわいらしいワンピースもいいですが、もう少し気品がほしいところですね」
「君、わかってるね！　わたしもそう思う」
「ネコとかクマとか、かわいい動物がプリントされたシャツも意外と似合うかもしれません」
「あー！　それだ！」

「別の店を覗いてみましょう」
　リコがさっさとショップを出ていってしまったので、わたしは霧切の腕を摑んだまま、彼を追いかけた。霧切はすでに諦め顔だ。
「今回、御鏡霊を追ってきた二つの組織というのは、中国の諜報部と、ロシア軍所属の科学研究班です」
　リコはまた唐突にシリアスな話を始める。もはやわたしたちにとって非日常は、日常の裏側ではなく、パラレルに進行しているのかもしれない。
「随分と詳しいね」
「詳しい情報を伝えるのが僕の役目ですから」リコは振り返って、無邪気な笑みを浮かべた。「どちらの組織も非戦闘員が二名ずつ。彼らは他国で活動する際には、武器を携帯することはありませんので、危険性は低いと云えます。特にロシアチームは軍人ではなく、超能力兵士の開発研究員、つまり単なるオカルト研究家のようです」
　わたしは周囲を見回す。とりあえずロシア人風の客はいない。幸せそうな顔で買い物バッグを幾つも提げて歩いている女性ばかりだ。
「問題は彼らよりも、三人の殺し屋の方でしょう」
　リコはいつもと変わらない表情で恐ろしい言葉を口にする。
　殺し屋――
　わたしたちは彼らのいる側に足を踏み入れようとしている。御鏡霊に近づくためには、彼らを無視して通り過ぎることはできないだろう。
「一人目の殺し屋は通称『コピーキャット』――国籍は不明、性別は女性。模倣犯を得意とする暗殺者です。標的の住む国や州などで、未解決のままになっている連続殺人をそっくり模倣して、標的を殺害します。つまり無関係な連続殺人の輪の中に、標的の屍体を放り込むことで、自分や依頼者への嫌疑を逸らすという手法です。このやり方で、彼女の多くの仕事が別の連続殺人犯の仕業ということになっています。ただしこの手法では派手な殺し方はできないので、行動は慎重で、それほど攻撃的な手段はとりません」
　まるでパソコンで検索しているかのように情報が次々に出てくる。リコはもともと人間離れした容姿だけど、情報処理能力も人並み外れているようだ。
　わたしたちはエスカレーターでさらにフロアを一つ上がる。次も婦人服売り場だ。
　ありふれた風景の中で、ありえない会話が続く。
「二人目の殺し屋は、通称『ナイトフライヤー』。小柄なルーマニア人と云われていますが、実際のところ

はわかりません。殺し方は、標的に近づき消音ピストルで撃つというスタンダードなものです。非常に性急で攻撃的と云えるでしょう。仕事を終えたあと、最寄りの空港から自家用飛行機で逃亡する姿が何度か目撃されており、その名がつきました」
「その殺し屋と、さっき云っていた一人目の殺し屋は仲間なの？」
「いいえ、いずれも単独行動のようです。彼らにとっては、各々が標的を同じにしている競争相手なので、互いに鉢合わせて消耗し合ってくれればいいのですが」
「――三人目は？」
「国籍は日本。特に通称などはありませんが、あの希望ヶ峰学園（きぼうがみねがくえん）に在籍していた過去を持つ元『超高校級のロッククライマー』火燈剣（ひともしつるぎ）です。学園を卒業してからは海外の様々な崖を制覇して名をあげていきましたが、ある時期からエッフェル塔やアンコールワットなど、歴史的建造物などへのパフォーマンス的なクライミングを始めるようになり、結果的に業界から追放されてしまいました。現在ではその才能を活（い）かし、指一つで何処にでも現れ、指一つで誰でも殺す殺し屋として、闇の世界の住人たちだけが彼の活躍を知っています。ちなみにライフル程度なら、片手で銃身をねじ曲げられるそうです。また防弾チョッキを着用した警察官に対し、服の上から心臓を握り潰したという報告もあります」
　エリート養成学校出身の殺し屋か。とんでもない連中が揃ったものだ。
　そんな連中に常に追われている御鏡霊が気の毒になる。名探偵というのは、その才能が度を超すと、謀略や政争の道具になってしまうのだろうか。たとえば大戦中に兵器開発を巡って、各国で科学者の誘拐や殺害が行なわれたように。
　だとしたら、霧切響子もいつか、誰かの道具にされてしまうかもしれない。いや、もしかしたらすでに……
　フロアの通路を歩きながら、まるで天気の話でもするみたいに、リコが再び口を開く。
「ところで、お二人と合流する前の話ですが、『コピーキャット』とみられる女性が、この百貨店に入っていくのを目撃しました」
「えっ」
　わたしは不意に殺気を感じて身構える。
　周りに怪しい人はいない。
　いつもと変わらず、ショップの服を着たお姉さんたちが忙しそうにしているだけだった。
「もっと早く云ってよ。どんな格好だった？」
「赤ずきんのような、赤いフードつきのコートを着ていました。髪は金髪で、キャリーバッグを所持しています」

「かなり目立つ外見だね。遠目からでもすぐわかりそう。そいつを見かけたら近づかないように気をつけよう」
「お姉さま、それでは御鏡霊のところにはたどり着けないわ」霧切が云う。「見つけ次第、尾行すべきよ。先へ進むためには危険を避けては通れない――でしょ？」
「そうだけど……」
　危険を冒（おか）してでも進むべき道なのか？
　そもそも御鏡霊がその道の先にいるかどうかもわからない。何もかも漠然としていて、本当に鏡の中の幽霊を捕まえに行くような話だ。
「結さん」
　リコがふと立ち止まった。
「な、何？　殺し屋がきた？」
「水着売り場ならこの先です」
　リコが通路の先を指す。
「ナイス、少年！」
　わたしは霧切を引きずって走りかけた。
　しかし思わず足を止める。
　その時、ショップの間をすり抜けるようにして――
　目の前を赤ずきんが横切った。
　わたしは確認を取るように、リコに目配せする。
　リコは肯いた。
　間違いない、今のが『コピーキャット』だ。
　わたしたちはさりげなく彼女のあとについていく。幸（さいわ）い通路には数人の客が歩いており、人の壁を巧く利用して尾行できた。
　赤ずきんがこちらに気づいた様子はない。右手でキャリーバッグを引いている。背は特別高くもなく、とても細身だ。バッグを持つ手が白い。白人だろうか。彼女が身にまとっているのは、コートというより、ポンチョのようなもので、フードにはネコミミ風の二つの突起がついていた。フードを被（かぶ）っているが、ブロンドの髪が広がって揺れている様子が、背後からでもわかった。
「殺し屋というわりに、かなり派手だね。それに思ったよりもずっと華奢だ」
　わたしは小声でリコに話しかける。
「人を殺すのに腕力は必要ありませんよ」

リコは天使のような顔で云う。
しばらく『コピーキャット』をつけていると、彼女は通路を曲がって、『従業員専用』と札のある扉を押し開け、中へ入っていった。
わたしたちは彼女を追いかけて扉の前まで移動する。
「従業員が使う階段だね。何処へ行くんだろう」
わたしは扉に手をかけた。
「待って」霧切がわたしの手を掴む。「嫌な予感がするわ」
「死神の足音ってやつ？　大丈夫、深追いはしないよ。それよりあいつが上か下か、どっちに行ったか確認しよう」
扉をゆっくりと押し開ける。
すると開いた扉の隙間から、細い腕が飛び出してきて、わたしの手首を掴んだ。
「ぎゃっ」
そのまま扉の向こうに引きずり込まれる。
薄暗い階段の踊り場だ。『コピーキャット』は扉のすぐ傍にいて、わたしを背後から拘束した。扉を一枚隔てたこちら側は、ひと気もなく、ひんやりとして、店内放送が幻聴のように遠くから聞こえた。
霧切の忠告に従えばよかった。
わたしの喉元に尖ったものが当てられる。
抵抗しないように両手を挙げながら、『コピーキャット』を盗み見る。彼女は北欧やアルプスの美女を思わせる色白の顔立ちで、度の高そうな分厚い眼鏡をかけていた。そばかすを隠すようにうっすら化粧している。困ったように下がった眉尻を見ると、どちらかといえば内気そうな印象だ。ネコミミがついているのは『コピーキャット』だからなのだろうか？　それとも海外にいるコスプレオタクみたいなものだろうか。
彼女は何処かの国の言葉で何か云いながら、わたしを拘束しやすいように引き寄せる。
そこへ、リコが扉を開けて駆け込んできた。
「大丈夫ですか、結さん」
「へ、へーき……」わたしは拘束されたまま強がってみせる。「この人が何を云ってるかわかる？」
「『お前たちは何者か』と尋ねています」
リコは『コピーキャット』と会話をし始めた。一体何語を話しているのかわからないけれど、次第に『コピーキャット』の声が落ち着いてきた。さすがリコ、その笑顔には人を癒す効果があるに違いない。
ふとわたしは気づく。
――霧切がいない。

「ねえ、霧切ちゃんは？」
　わたしはリコと殺し屋の会話に割り込むようにして尋ねる。しかし二人はこちらの言葉に耳を貸さない。二人の会話が盛り上がっているようだ。
　人質なのに、妙な疎外感……
「一体なんの話してるの？」
「『好きな漫画家は誰か』と尋ねています。そうですね、僕は――」
「なんで世間話してるんだ」
　リコが巧く説得してくれるだろうか。
　いや……相手は殺し屋だ。しかも、その気になればいつでもわたしを殺すことができる状況にある。ここ最近、ついてないことばかりだけど、殺し屋に捕まえられて人質にされるのは初めての経験だった。
　どうしたらいい？
　護身術なんかできないし、武器もない。
　わたしは神に祈ろうとして――
　やっぱり霧切響子に祈ることにした。
　わたしを助けて、霧切ちゃん！

　――カチャリ。

　リコと殺し屋の会話が続くなか、ふいに背後で金属音が鳴り響く。
『コピーキャット』も異変に気づいて振り返った。
　その時にはもう、すべてが終わっていた。
『コピーキャット』の片腕――わたしを拘束していない方の手首――に、いつの間にか手錠がかけられている。
　手錠のチェーンの先には、彼女のキャリーバッグ。その持ち手に、もう片方の手錠がかけられていた。
　そしてバッグの向こう側――踊り場から一段下りた場所に、いつの間にか霧切響子が立っている。彼女は今まさに、キャリーバッグを階段から引っ張り落とそうとしているところだった。
『コピーキャット』が声を上げて、キャリーバッグを掴もうとする。彼女の腕がバッグを追いかけたため、わたしの拘束が外れた。
　次の瞬間、キャリーバッグが階段を転げ落ち始める。
　そして手錠で繋がれた『コピーキャット』もバッグに引っ張られて一緒に落ちていった。思いのほかバッグ

が重かったようだ。スレンダーで身軽そうなネコミミの赤ずきんは、たちまち下の踊り場まで引きずり落とされていく。
　彼女は派手な音を立てて転がり、やがて階下の踊り場の壁に激突した。
　うめき声を上げながら、床の上に伸びている。
「結お姉さま、大丈夫？」
　霧切はわたしのところへ駆け上がってきた。
「う、うん……君、いつの間に背後にいたの？」
「売り場の方にある階段を使って下から回り込んできただけよ」
　霧切は腰に手を当てて胸を張る。
　今回も霧切の機転に救われた。彼女がいなかったら、わたしは何度命を落としてきたかわからない。
　足元に万年筆が落ちていた。どうやらわたしの喉元に突きつけられていたのはこれらしい。
　わたしたちは揃って階段を下りて、『コピーキャット』を取り囲む。彼女は意識こそ失ってはいないが、全身を打ったせいで、身動きできずに横たわっている。
　バッグの中身を確認すると、連続殺人に関する新聞記事のスクラップブックや、未解決事件についての書籍が数冊詰め込まれている他に、日本の漫画本や薄い同人誌が山ほど入っていた。どうりで重いわけだ。パスポートは数冊あり、どれが本物かわからない。どれも偽物かもしれない。
　彼女の持ち物の中に、凶器になりそうなものはなかった。万年筆が唯一の武器だったようだ。
「彼女はあくまで計画を立てたうえで標的を殺します。今日は標的を確認するだけで、殺す予定まではなかったのでしょう」
　リコが云う。
「文化系の殺し屋でよかったよ」
「とどめを刺しておきますか？」
「い、いいよ、そういうのは」
　わたしは慌てて云う。
「いいんですか？　彼女が生きていれば、また罪のない誰かが殺されます。何しろ彼女は殺し屋ですから」
「目的が違うでしょ。わたしたちは御鏡霊を追っているんだよ」
　リコは数秒の間わたしを見つめたけれど、それ以上何も云わなかった。
「持ち物の中には、御鏡霊についての資料はないわね」
　霧切がバッグの傍で立ち上がって云う。

「リコ、彼女から何か聞き出せなかった？」
「御鏡霊の素性については何も知らないようです。今日ここに来たのは、標的が午後四時に、この百貨店の屋上に現れるという情報が入ったから、だそうです」
「すごい情報じゃない！」
　御鏡霊が午後四時に現れる！
　わたしはケータイで時間を確認した。
　三時五十分――
「わあっ、もう時間がない」
「このまま階段を上がって屋上まで行きましょうか」
　リコは慌てた様子もなく云う。
　屋上は確か九階の一つ上だ。ここから駆け上がるのはかなり大変だけど、時間までにはたどりつけるだろう。
「行こう、霧切ちゃん」
「ちょっと待って」
　霧切は『コピーキャット』の傍に屈み込んで、手錠を外している。
「何してるの」
「手錠を回収しているのよ。ちょっとした思い出の品だから」
「ああ、あの時の……」
　霧切は手錠を制服のポケットにしまう。そんなところに隠し持っていたのか。
　わたしたちは『コピーキャット』をその場に置き去りにして、階段を駆け上がった。
　四階から五階、五階から六階へ……
　しかし六階にたどりついた時、突然何処からともなく警報の音が聞こえてきた。
　わたしたちは思わず足を止めて、顔を見合わせる。
「火災警報……？」
「フロアに戻ってみましょう」
　わたしたちは様子を窺うために、扉を開けて六階フロアに入った。寝具や生活雑貨が売られているフロアだ。鳴りやまない警報に、店員も客も騒然としている。けれどまだパニック状態というほど混乱してはいなかった。
　まもなく店内放送が流れる。
『ただいまレストランフロアで火災の発生を確認しました。お客様は近くの店員の指示に従い、落ち着

いて避難してください。繰り返します……』
　いよいよフロア全体の空気が張りつめてきた。悲鳴に近い声も上がり始め、慌ただしい足音も聞こえる。
「こちらの非常口をご利用ください！」
　店員が声を上げている。客たちも緊急事態であることが飲み込めてきたようだ。ぞろぞろと非常口へ向かう。
「どう思う？」
「このタイミングで火災警報なんて、御鏡霊の件と無関係だとは思えないわ」
　霧切は冷静な顔つきで云う。
「追う方と追われる方、どっちが意図（いと）してやってるのかってことが問題だね」
「とりあえず屋上へ行って確認しましょう」
　わたしたちは店員の目をかいくぐりながら、彼らの指示とは逆の方向に進み、『従業員専用』の扉を目指した。すでに人の姿はまばらで、避難は滞（とどこお）りなく行なわれているようだ。ふだん買い物客でにぎわっているフロアから、だんだんと人が消えていく様子は、この世の終わりが近づいているみたいで、独特の不気味さがあった。
　階段への扉を開ける。
　フロアを出ようとした時、背後から何者かに呼び止められた。
「君たち、そっちは避難経路ではないぞ」
　振り返ると、通路の十メートルほど向こうに、警備員が立っていた。わたしたちに気づいて追ってきたのだろうか。不審そうな目で、こちらを見ている。
「何処へ行くつもりだ？　早く避難するんだ」
「いえっ、あの、こっちの方が近道かな……なんて」
　わたしはしどろもどろで答える。
「そっちは危険だからこちらへ来なさい」
　手招きされて、わたしはしぶしぶ扉から離れる。
　しかし霧切とリコはすぐには命令に応じなかった。
「危ないと云っているのがわからないのか？」
　警備員の声が凄味を増す。
「す、すみません、今行きますから。ほら、霧切ちゃんも」
「結お姉さま、そっちに行ってはだめ」

「えっ？」

「ハイ、time up!　云うこと聞かない子供にはpenalty!!」

　警備員が背後に腕を回し、背中から何かを取り出す。

　それは懐中電灯やトランシーバーなどではなく――

　銃だった。

「die!」

　円筒型の消音装置のついた銃口がこちらに向けられる。

　ところが驚くべきことに、引き金が引かれるよりも先に、リコが動いた。

　リコは床についていた傘（かさ）を振り上げるようにして投げ放った。

　傘は遠心力に乗って黒い槍（やり）となり警備員を襲う。

　しかしその先端が狙いを定めたのは、男の身体ではなく、銃口だった。

　傘の先端が消音装置に突き刺さる。

　ど真ん中命中（ブルズアイ）。

　当然ながら、銃口から傘が飛び出している状態で引き金を引くことはできず、銃を片手で持っていることさえ難しそうだった。抜こうとしてもなかなか抜けない。男は外国語で悪態（あくたい）をつき、銃を投げ捨てた。

　その時すでに――リコの姿は男の目の前から消えている。

　リコはいつの間にか男の背後にいて、いともたやすく男の右腕をねじあげていた。そして一瞬のためらいもなく、その右腕をあり得ない方向へと折り曲げた。火災警報に混じって、明らかに骨の折れる音が響き渡る。

　警備員の男は言葉にならない掠（かす）れた悲鳴を上げながら、膝をつき、うつ伏せに倒れ込んだ。

　リコは容赦せず、男の首元を背後から踏みつけ完全に制圧した。小さな少年の下で、男はまったく抵抗できずにいる。

　それでもなお、リコの攻撃は収まらなかった。

　彼は腕にかけていたスーツの内側から、ハンマーを取り出した。それは大工が釘（くぎ）を打つような単純なものではなく、全体的にカーボンスチールのような素材でできた、おそらく武器として作られたものだった。

　彼はそれを振り上げ――

「リコ！」

　わたしはとっさに彼の腕を掴んでやめさせた。

　リコは今までと何も変わらない妖精みたいな顔で、わたしを見返す。

「どうして止めるんですか？」

「もういいでしょ！」

「そういうわけにはいきません」

「殺すつもり？」

「まさか。そんなことしませんよ」リコは手の中でハンマーをくるりと回す。「喉と目と指を潰すだけです」

「何云ってるの？」

「今後ずっと、何も喋れないように、何も見えないように、何も摑めないようにするんです」

「そんなことしなくていいからっ」

「結さん、冷静になってください。結さんにはこの男をかばう理由がないでしょう？」

「この人をかばってるんじゃない。君にそういうことしてほしくないの！」

「僕も別にやりたくてやっているわけではありません。この手合いの人間は、ここで再起不能にしておかないと、あとあと復讐に来たりして面倒です。僕がやろうとしているのは、台風の前に雨戸を閉めるのと同じことです」

「yes――いっそ殺せ」組み敷かれている男が強がった声を出す。「俺は何度でも飛んでくるぜ。夜の空からやってくる殺人鬼に毎晩悩まされるくらいなら、今のうちに杭（くい）を打っておくべきだ」

「本人もそう云ってますし……では」

　リコは微笑みを浮かべながら、再びハンマーを振り上げた。

「そこまでにして」

　霧切の声が、リコを制止させた。

　彼女はいつのまにか銃をリコに向けていた。傘のささった消音装置は、銃口から外されて、彼女の横に捨てられている。グリップを両手でしっかりと持って、肘（ひじ）を伸ばさずに胸元で畳むようにして、狙いを定めている。中学生の女の子の手には、その銃は大きくて重たそうだ。

「もう四時になるわ。早く上に行きましょう」

「わかりました」

　リコは両手を軽く挙げたあと、ハンマーをスーツの中にしまい、男を踏んでいた足をどけた。

　ようやく聞き分けてくれたようだ。

「でも一応、左腕も折っておきましょう」

　リコは宣言通り、男の左手首を摑んで、いともたやすくひねり折った。男は再び悲鳴を上げる。顔中に脂汗が浮き出ていた。

「君……どういう教育受けてきたの」

　わたしはおそるおそるリコを見る。

「両親は早くに亡くなってしまったので、ろくな教育は受けていません」リコはにっこりと笑って云う。「夢は大学に行って宇宙について学ぶことです」
「そう……」
　それ以上何も云えなかった。
　霧切はフロアのレジ横に置かれていたビニールテープで警備員の男をぐるぐる巻きにして拘束した。
　そのあと持ち物を調べ始める。財布がポケットに入っていたが、免許証の顔写真はどう見ても、目の前の男ではなかった。
「制服を一式、警備員から盗んだみたいね。変装しているけど明らかに外国人だわ。この男が『ナイトフライヤー』で間違いない？」
　霧切はリコに尋ねた。
「僕にはわかりません。本人から直接聞いてみましょう」
　リコは男に近づく。男は少し怯えたように、身体を震わせた。
「あなたが『ナイトフライヤー』ですか？」
「No!」
　リコはスーツの内側からハンマーを取り出す。
「Yes! Yes!」
「だそうです」
「脅迫して証言を得ても、嘘かほんとかわからないじゃないか」
　わたしは呆れて云う。
「結お姉さま、時間」
「あ、そうだ」ケータイで時刻を確認する。「もう一分前だよ！」
「急ぎましょう」
　わたしたちは『ナイトフライヤー』をその場に残し、すでにひと気のなくなったフロアから、エスカレーターを利用して一気に九階まで上がった。
　時計屋や眼鏡売り場の間を駆け抜け、屋上の扉を開ける。
　外ではまだ雪が降り続いていた。
　扉を開けた途端、冷たい風が暴れるようにわたしたちを翻弄する。屋上は広場になっていて、夏にはビアガーデンが設置されたり、イベントが催されたりする場所だ。けれど今は、一面白紙のように雪色に染まっていた。
　足元には乱れた複数の足跡。しかし冬の間でも客は自由に屋上に出入りできるので、あまり参考に

はならない。
　見たところ誰もいない——
「あそこに誰か倒れているわ」
　霧切が風に乱れる髪を押さえながら、広場の奥を指差した。
　花壇の煉瓦ブロックの陰に、仰向けになって横たわる人の両足が見える。ここからでは足の先しか見えず、何者かはわからない。
　わたしたちは外に出て、広場を横切る。雪雲は頭上のすぐそこにあって、手を伸ばせば届きそうな気がした。
　花壇を回り込む。
　そこに倒れているのは一人ではなく、四人だった。
　スーツを着たサラリーマン風のアジア系男性二名、そしてお世辞（せじ）にもあまりおしゃれとは云えないよれよれのコートとスラックスのロシア人風の男性二名。
　彼らはフェンスの周辺に、それぞれ踊るようにねじれた格好で倒れていた。フェンスの向こう側は虚空で、灰色の町並みを見下ろせる。
　霧切はロシア人男性の傍に屈み込み、首元に触れた。
「死んでいるわ」
「うそ……死んでるの？」わたしは倒れている男性の手首を摑んだ。「脈はないけど、まだ少し温かい」
「今の時刻は？」
「四時五分」
　すでに予定の時間を過ぎてしまっていた。
　もうすべては終わったあとなのか——
「御鏡霊がやったのかな」
「この四人は御鏡霊を追っていた組織の人間のようですね」
　リコは横たわっている男たちの服のポケットを物色（ぶっしょく）しながら云った。財布やパスポートが見つかる。けれど肝心な御鏡霊に関する情報は何もないようだった。
「外傷がないように見えるけど、死因は？」
「首にアザが残っているわ」
「じゃあ絞殺（こうさつ）……？」
「でも全員の首にアザがある。仮に御鏡霊がやったとして、四対一の状況で、そんな時間のかかる殺人手段を用（もち）いるかしら。たとえ相手が非戦闘員だとしても、一人の首を絞めている間に、他に逃げられて

しまうもの」
　霧切は屍体のうなじを確認しようと、仰向けになっている頭を持ち上げる。
「あ……」霧切は何かに気づいたように小さな声を上げた。「首の骨が折れてる」
「こっちの男もそうみたいですね」
　霧切とリコは屍体の異様な状況に興味を抱いたようだ。二人揃って、屍体の傍に屈み込み、何か云い合っている。
　四人とも首を折られて殺された？
　ここで一体何が起こったのだろう。
　わたしは検死の心得もなく、これ以上何もすることができず、離れたところから彼らを見ていた。
　だから――
　フェンスの向こう側、それより先は足場のない屋上の縁に、かすかに動く何かがあっても、霧切たちは気づくことができず――
　その小さな異変に気づいたのは、わたしだけだった。けれど最初はよく見えなくて、それがなんなのかわからなかった。
　それは次第に大きくなって、はっきりとした形をともなっていく。
　人の頭だ。
　何もないはずのフェンスの向こう側から、坊主頭の男がこちらを覗いている……
「あ、ああ……あれ」
　わたしは恐怖のあまり震えながら、そいつを指差した。
「どうしたの、結お姉さま――」
　霧切たちが気づいた時にはもう、そいつは跳び上がるようにして全身を現し、フェンスの向こう側に立っていた。上下とも七分丈のぴったりとしたウェットスーツを着ていて、まるで芸術品のような筋肉を誇示している。
　彼はわたしが悲鳴を上げるよりも早く、フェンスのひし形の金網に指をかけ、まるでのれんをかきわけるかのように造作もなく、左右にこじ開けて、そこにできた穴をくぐってきた。
　あれは――元『超高校級のロッククライマー』の火燈剣に違いない。
　ロープもハーネスもなく、装備は腰に下げたチョーク袋だけ……ということは、その指だけでビルの外壁に張りつき、わたしたちを待ち構えていたのか。
　男が近づいてくる。
　霧切が銃を構えようとしたが、男はそれに気づき、脇目も振らず突進していった。

まるで闘牛のような体当たりに、霧切はなすすべなく吹っ飛ばされる。銃は宙(ちゅう)を舞って、貯水塔の上に落ちた。簡単には取りに行けそうにない。
「霧切ちゃんっ」
　彼女は雪の上でぐったりしている。
　火燈が次に狙いを定めたのは――
　わたしだった。
　うろたえているうちに、彼はわたしの目の前に迫っていた。
　避ける――
　間に合わない！
　わたしはただ、男が迫ってくるのをこの目で見ていることしかできなかった。
　吹っ飛ばされる――そう覚悟して目を閉じると、わたしの身体には違った異変が起きていた。
　……息ができない。
　気づくと男の手がわたしの喉を摑んでいた。
　ああ、そうか。
　ロシア人たちがどのようにして殺されたのか、わたしは身をもって知った。火燈がもう少しだけ指先に力を込めたら、わたしの首の骨は粉々に砕かれてしまうだろう。
　わたしを殺そうとしている男の顔は、殺意や憎しみに満ちたものではなく、アスリートが記録をかけて真剣勝負している時の顔に近かった。業界を追放された彼が最後に見出したのは、人の命という貴(とうと)い壁を征服することだったのだろうか……
　そんなことを考えているうちに意識が遠のいていく。
　薄らいでいく視界の中、最後に見えたのは……
『関係者以外立ち入り禁止』
　霧切がそう書かれた立て看板(かんばん)を手に、火燈の背後に近づいていた。
　そして――火燈の後頭部に、看板が振り下ろされる。
　ところが火燈は何事もなかったかのように、身動き一つしない。表情にも特別の変化はない。
　しかし坊主頭の額から一筋の血が流れ落ちた。
　さすがにダメージがあったようだ。
　わたしの首を摑んでいた指が外れる。
　わたしは放り出されるようにして、その場に崩れ落ちた。火燈の屈強な右腕は、今度は霧切を獲物に選んだ。蛇のように、霧切の細い喉にくらいつく。

火燈はそのまま霧切の身体を持ち上げていく。すぐに霧切の足は地面を離れてしまった。

やめろ！

叫ぼうとしたけれど、声が出なかった。さっき喉を掴まれたせいだ。

あいつ……殺してやる……！

その覚悟をもって立ち上がろうとするが、わたしの足は動かない。

霧切の顔が青ざめていく。

ああ、霧切が壊されてしまう……

絶望に下を向きかけた時、ふわりと黒い布が空を舞い、火燈の顔に被さった。

スーツ……？

それはリコが投げたスーツだった。

火燈は空いている方の手で、顔を覆(おお)うスーツをはぎ取る。

そして雪の中に立つ少年を見た。

「おいで」少年はネクタイを緩(ゆる)めながら、挑発するように手のひらを上向きにして手招きする。「元超高校級さん」

火燈はそれを挑戦のサインと受け止めたようだ。

彼はその時――心底嬉しそうな笑みを浮かべていた。

そして霧切を興味のなくなったおもちゃのようにその場に投げ捨て、リコに向かって走り出す。

リコはネクタイを解き終えたところだった。

あんなに体格差があって、勝負になるのだろうか。リコの身体は、火燈の太ももよりも細く見える。まともに戦える相手ではない。

火燈は右手でリコの首を掴もうと、素早く突き出した。

リコは避けようとすらしなかった。

火燈が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

もう首を掴まれておしまいだ……

わたしは思わず叫び出しそうになる。

しかし火燈の腕が途中でぴたりと止まっていた。

リコに向かって伸ばされた右腕の前腕中途に、ネクタイが巻きついている。リコはネクタイの両端をそれぞれ左右の手に持って、火燈の右腕を縛りつけていた。そしてさらに左右に引き絞ろうとする。

火燈の顔が歪(ゆが)んだ。ネクタイによって縛られた箇所から、激しく流血し始めていた。

「細いワイヤーが入っている。君が自慢の筋肉に力を込めようとすればするほど、ワイヤーが食い込むだ

ろう」
　リコは警告したが、火燈は歯を食いしばり、右腕の束縛を解こうと力を込め始めた。
「うおおおお」
　咆哮（ほうこう）する。
　同時に腕から血が噴き出し、周辺の雪を真っ赤に染めた。
　しかし束縛は解けない。
　火燈は右腕を諦め、空いている方の左腕で、リコの横っ腹を殴ろうとした。
　しかしリコはあっさりとネクタイから手を放して、華麗に後方に跳び去る。
　火燈は自由を取り戻した。右腕はネクタイが絡まったままだが、まだ左腕がある。彼の利き腕がどちらかはわからないけれど、ロッククライマーである以上、どちらも握力（あくりょく）は人並み以上だろう。
　残った左腕で掴まれたらまずい。
　やはり火燈は攻撃を左腕のみに託して、振り回してきた。リコはなんとか避けているが、紙一重だ。体格差がここにきて徐々にリコを追いつめていた。
　気づけばリコはフェンスを背にしている。
「やるなあ、お前」
　火燈は初めて言葉を喋った。
　完全に相手を追いつめたと知って、余裕が出てきたのだろうか。
「殺す前に、名前、聞いとこうか」
「必要？」
「あ？」
「名前、そんなに必要かな……それなら教えてあげる。僕は御鏡霊。一部の人からそう呼ばれている」
「お前が御鏡霊──そうか、そりゃあ、好都合だ」
　火燈は全力を込めて左腕を振りかぶった。
　しかしその腕が振り下ろされることはなく……
　彼はそのまま崩れ落ちるように膝をつき、前のめりに倒れてしまった。
　何が起きた？
「おやすみ、元超高校級さん」
　リコはベストのポケットから新しいネクタイを取り出して、器用に素早く結びながら云った。
　火燈は倒れたまま動かない。
　どういう原理かはわからないけれど……勝負はついたようだ。

「き、君……」わたしは立ち上がって、掠れた声でどうにか呼びかける。「君が御鏡霊だったの？」

「黙っていてすみません」

　彼はスーツを拾い上げながら云う。

「どういうことなの？　本当に君が？」混乱したままふらふらと歩き出す。「もっと早く云ってくれれば、こんなことにはならなかったのに……」

　彼に詰め寄ろうとしたが、わたしにはそれよりも大事なことがあった。

「霧切ちゃんっ……！」

　わたしとリコは横たわったままの霧切のところへ駆けつけた。

「大丈夫？　霧切ちゃんっ」

　わたしが抱き起こすと、霧切は目を細く開けて呻いた。

「よかった、首の骨バキバキにされちゃったかと思った！　うわああん」

　わたしは彼女の柔らかい髪に頬ずりする。

「あいつは……？」

　霧切は周囲を見回し、血まみれで倒れている火燈を見つけた。

「リコがやっつけたんだよ」

「そう……」

「ワイヤーに塗ってある毒で気を失っていますが、あの人は体格がいいので、死にはしないでしょう。しばらく動くこともできないと思いますけど」

　毒が仕込んであったらしい。

　つくづく恐ろしい美少年だ。

「面倒なことになる前にここを離れよう」

　わたしはリコの力を借りて、霧切を背負った。屋上を出て、従業員用のエレベーターを使って下まで移動する。裏口から抜け、駅前に出ると、周辺の道路は消防車とパトカーの赤色灯で真っ赤だった。

　わたしたちは通りに停まっているタクシーに飛び乗った。

「リコ、君も乗って」

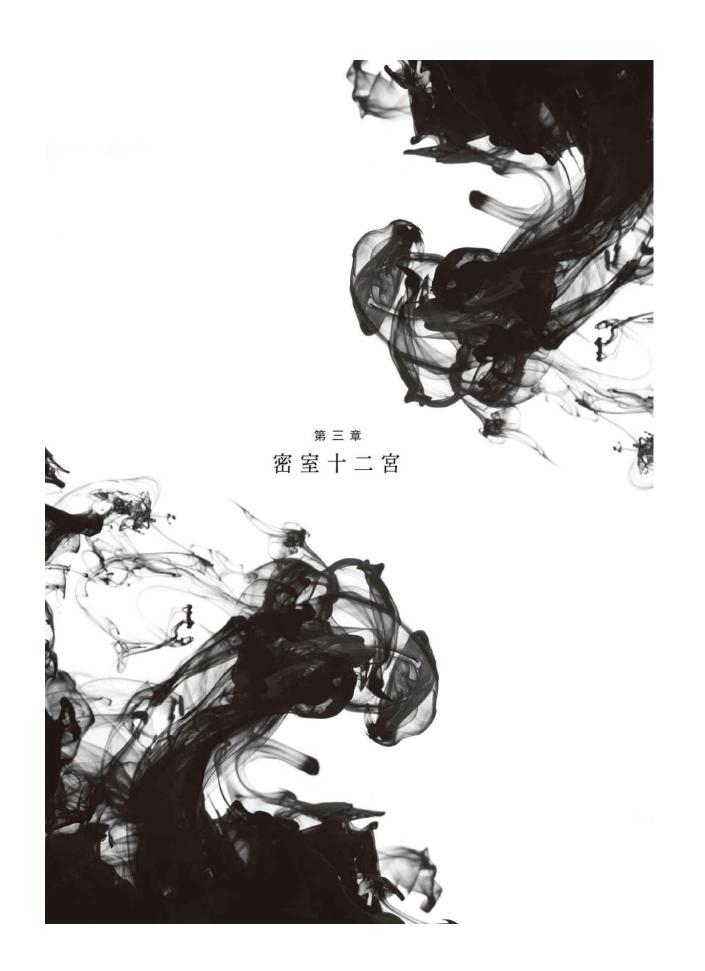
「僕のこと、怒るのでしょう？」

「怒らないから！」

　リコは困ったような顔をしながら助手席に乗り込んだ。

　そうしてわたしたちは修羅場となった駅をあとにした。

第三章

密室十二宮

寮に帰り着いた時には、もう午後六時を回っていて、すっかり日も落ちていた。
　自分の部屋に着く前に、別の部屋の子とすれ違った。彼女はわたしの背中で眠る霧切と、ベストの少年を見て、目を丸くしていた。
「結……あんた最近、趣味の幅が広がったわね」
「見なかったことにして」
　わたしは部屋に入ると、背中の霧切をベッドに下ろして寝かせた。彼女の白い首に無残な痕が残されている。本当に殺される寸前だったのかもしれない。かわいそうに……
　リコはわたしの部屋を物珍しそうに眺め回していた。
「へえ……これが女子寮ですか」
「見るなっ」
　わたしはそのへんに散らばっている服や下着をベッドの下に蹴り込む。
「リコ、ちょっとそこに座って」
「はい」
　リコはにこにこしながら床の上に正座する。
「霧切ちゃんが目覚めたら、君からいろいろ訊くつもりだけど……まず一つ教えて。本当に君は御鏡霊なの？」
「そういう風に呼ぶ人もいる、という意味なら、イエスです。本当の名前は覚えていません。前にも云いましたが、両親は早くに死んで、気づいたら孤児院にいたので」
「じゃあ探偵図書館に登録されている御鏡霊は？」
「僕です」
「でも君……トリプルゼロクラスだよ？　それってすごいんだよ？　自覚ある？」
「自覚はありますよ。おかげでいろんな人たちから追われることになっているんですから」
「今、何歳？」
「たぶん十二歳です」
「え？　ちょっと待って、なんか計算が合わない気がするんだけど……探偵図書館に登録したのは何歳の時？」
「たぶん七歳の時です。ある事件を解決するのに、探偵図書館のカードが必要になったので登録しました」

「つまり七歳の子が、十二歳になるまでのたった五年間で、トリプルゼロクラスになったの？」
「厳密に云うと、たぶん九歳の時には、もうゼロが三つになっていました」
　これが天才というやつか……
　三年かけてやっとランクが一つ上がる人間もいれば、自作自演で事件を解決しまくってようやくランクを六つ上げる人間もいて……
　御鏡霊は登録して瞬く間にトリプルゼロクラスに昇格したから、犯罪被害者救済委員会も素性を把握できなかったのかもしれない。もっともそれ以上に、彼が足取りを掴ませない技法に長けているという理由もあるのだろうけれど。
「御鏡霊の名前を使って解決した事件については、探偵図書館が必ずファイルします。一体、誰が何処で見ているんでしょうね」
「どうせ委員会の連中が、『クローズド・サーキット』とかいうお披露目会で見てるんでしょ」
「委員会は関係ありませんよ」
「え？　だって探偵図書館と犯罪被害者救済委員会は裏で繋がってるでしょ？」
「いいえ。繋がっていません」
「嘘、それは嘘だよ、だってどう考えたって……」
「探偵図書館はその理念にある通り、『データベースであり思想を持たない』ことを厳密に遵守しています。いかなる組織にも関与しないことで、そこにファイルされている探偵たちの中立性を保証しているのです」
「だから、その理念とやらが口だけだったってことじゃないか」
「……どうでしょうね」
　リコは微笑んで首を傾げる。
「あ、君、今どうでもいいと思ったでしょ。軽く流そうとしたな？」
「ふふ、すみません。だって探偵図書館がどうとか、あまり興味がないので」リコは子供っぽく笑って云う。「少なくとも委員会と図書館は互恵関係にはありませんよ。強いて云えば、委員会が図書館を一方的に利用しているだけです」
「……そうなの？」
「そもそも委員会と図書館が一緒の組織なら、そのリーダーである新仙帝のファイルがすべて抹消されているのはおかしくありませんか？　他の人たちは残されているのに」
「それはだって……犯罪組織のリーダーのファイルがいつでも見られる状態にして置いてあったら、自分たちにとって都合が悪いじゃない」

「そうでしょうか。もし自分たちの都合のいいようにランクやファイルを改竄捏造できるなら、『唯一ファイルを抹消された男』として目立つ必要はないでしょう？」
「あ、そっか……」
「つまりランクやファイル内容に関して、委員会は関与できない状態にあると考えられます。むしろ委員会は最初から図書館を支配下に置くつもりはないと思いますよ。『黒の挑戦』にはギャンブル的な見世物としての側面がありますから、ゲーム中に召喚される探偵が、中立的な組織によってランク付けされていることを保証する必要があります。そういう意味では、委員会にとっても探偵図書館は中立でなければならないのですよ。八百長ほど観客を冷めさせるものはありませんからね」
『黒の挑戦』の観客たちは、おそらくリアルな犯罪を楽しんでいる。もちろんショーとしての演出はところどころに用意されているだろうけれど。
「でも今回の『黒の挑戦』は意図的にわたしを探偵として選んでいるでしょ？　それでも中立って云えるの？」
「コストの制限を超えない範囲で、任意に探偵を選び出すことくらいは、別にアンフェアとは云えないでしょう」
「それでも納得いかないな、こんなの」
　わたしは十二枚の挑戦状を床に叩きつける。
「龍造寺の去就をかけたゲームだとすれば、安いものですよ。彼の探偵としての価値は、たった十二枚の紙切れに左右されるほど軽くはありません」
「……龍造寺さんの肩を持つんだね」
「ええ、彼のことを尊敬しています」
「君は一体どっちの味方なの？　委員会？　それともわたし？」
「まるで恋人みたいなことを訊きますね」
　リコは恋人ごっこを楽しむように、照れたような笑みを浮かべる。その微笑には毒が隠されていることを、わたしは知っている。うっかり見とれてしまいそうになるから怖い。
「君は少なくとも敵じゃないって信じてる」
「信じてもらえるのなら嬉しいです」
　リコは本当に嬉しそうに微笑む。
　トリプルゼロクラスの探偵でありながら、その業績を誇ることなく気ままな謎解きに明けくれる少年……そうかと思いきや、何故か龍造寺の世話係として、委員会にもっとも近い場所で働いていたりする。彼にはあまりにも謎が多い。訊き出さなければならないことはたくさんある。

何から尋ねようかと思案していると、ベッドの上の霧切が呻きながら身体を起こした。
苦しそうに咳をする。
「大丈夫？　霧切ちゃん。はい、水飲んで。病院に行かなくても平気？」
「ええ……問題ないわ」
掠れた声で答えてから、ペットボトルの水を一口飲む。喉だけではなく、あちこち負傷していることだろう。それでも彼女は気丈に振る舞おうとしている。
これ以上心配することは、かえって彼女のプライドを傷つけてしまうかもしれない。
わたしは話を続けることにした。
「今、この子を尋問していたところだよ」正座してかしこまっているリコを指差す。「実はね……この子が御鏡霊だったんだ」
「そうでしょうね」
霧切は喉をさすりながら云う。
「知ってたの？」
「怪しいと思っていただけ。結お姉さまは私のことを友人としか紹介しなかったのに、彼は何故か私の名前を知っていたわ」
「龍造寺のところで、顔と名前を把握していたのかもしれませんよ？」
リコは笑顔のまま反論する。
「それならあなたは私を見て少なからず驚くべきだったわね。龍造寺側にとって私は、目下捜索中の天敵で、その場にいること自体あり得ないことだったのだから……いずれにしても、あなたが普通じゃないって確信したのは、殺し屋に対する動きを見てからだけど」
「状況が状況ですから、手の内を隠してもいられませんでした。云い訳に聞こえるかもしれませんが、百貨店に集まった殺し屋たちを排除したら告白するつもりだったのですよ。本当です」
「どうだか」わたしはリコを横目に見る。「そもそもなんで君は龍造寺さんのところにいたの？」
「僕は常に『不思議』に身を浸（ひた）していないと、灰になって死んでしまうのです」
リコは穏やかに笑う。
その笑顔には、冗談として笑い飛ばせない切実さがあった。
「だから世界で一番『謎』の集まる龍造寺の城に潜入していたのです。もっとも、数は申し分ないですが、質が悪くて息がつまりそうでした」
「贅沢（ぜいたく）な頭してるね、君は」
「やはり一つのところにいるよりも、旅をしている方が僕には合っているみたいです。きっとこの世界の何

処かに、僕を待っている『something mysterious』があるはずです」
　リコは夏休みの少年のように笑って云う。
　ただ純粋に謎を追い求める探偵——それもまた探偵としての生き様だろう。何かを守るとか、誰かを救うとか、そういうことに縛られている探偵と比べたら、彼は限りなく自由で清らかだ。
「龍造寺さんは、君が御鏡霊だってこと知ってるの？」
「僕を雇い入れた時点では知らなかったと思います。そして昨日までは、もしかしたら御鏡霊かもしれない、という程度には疑っていたと思います。その疑いは今日、確信に変わるでしょう」
「どうして？　龍造寺さんがどっかで見張っていたの？」
「いいえ。殺し屋の何人かは龍造寺が雇ったのではないかと思います」
　リコは平然とした顔で云う。
「ええっ、な、なんで？」
「もちろん僕を殺すため——というより、僕が御鏡霊であることを確認するため、でしょうか。結果的に殺し屋を全員無事に生きたまま残してきてしまったので、いずれ龍造寺に報告が行くはずです」
「おそらく『目由良駅に御鏡霊が現れる』という情報を流したのも龍造寺月下ね」
　霧切がベッドの縁に座り直して云った。
「ちょ、ちょっと待って。なんなの一体。なんのために龍造寺さんがそんなことを？」
　わたしが慌てふためく様子を、霧切は冷めたような顔をして眺めながら、説明を始めた。
「全部仕組まれていたのよ。まず龍造寺は、嘘の情報を流して、自分の雇った殺し屋を目的地に向かわせる。もちろん殺し屋にも本当のことは黙ったまま。それとは別に、結お姉さまに理不尽な『黒の挑戦』を叩きつけて、その攻略のためには目由良駅に行かないといけないという状況を作る。そうすることによって、結お姉さまのサポートという名目でごく自然にリコを目由良駅に向かわせる理由ができる。当然、殺し屋とリコは鉢合わせすることになる」
「わけがわからなくなってきた。それじゃあ、最初からこの十二枚の挑戦状は、御鏡霊の正体を暴くためのトラップだったって云うの？」
　そう考えると、龍造寺による白と黒の封筒を選択するゲームにも意味があったように思える。
　あれは試験だったのだ。わたしが手を汚すことのできない人間だと確かめるための……つまり御鏡霊が殺し屋の口を封じようとした時に、それをやめさせる人間がその場に必要だったのではないか。
「雇われて半年の人間を、世話係としてあんな身近に置いていた理由も、これでわかりましたね。彼は僕の正体を見破るために、傍に置いておいたのでしょう」
　リコは他人事のように云う。

「まったく……君のせいでさんざん振り回されたじゃないか。まさか全部、御鏡霊をあぶり出すための計画だったなんて……まあでも、挑戦状がただのダミーだっていうのなら、ほっとした気分だよ」
　わたしは安堵の息をつく。
「ところがそうではないのが龍造寺の恐ろしいところなんです」リコは肩を竦めて云う。「挑戦状はダミーなんかではありませんよ。本物です。龍造寺がパラレル・シンキング＆マルチ・タスクの天才と称されるゆえんはそこにあります。彼は一つの物事に、同時に、並列的に、重複して意味をもたせることを得意としています」
「えっ……じゃあ、『黒の挑戦』は本当に始まっているの？」
「そういうことです」
　……頭がついていかない。
　龍造寺はいったいどれだけあちこちに導火線を引いているというのか。しかも本人はその場から動かず、手元のスイッチ一つですべてを吹き飛ばすことができる。安楽椅子探偵を敵に回すと、こんなにも恐ろしいのか。
「まだ『黒の挑戦』は始まったばかりです。時間はたくさんありますよ」
　リコはのんきな笑顔で云う。
　タイムリミットは残り１６１時間程度。まだ余裕があるようにも思えるし、全然足りないようにも思える。
「ところで、リコ。あなたは今回の『黒の挑戦』の内容を知っているの？」
　霧切が鋭い目つきでリコに尋ねる。
　リコは左右に首を振った。
「龍造寺が仕事中の時は、基本的に部屋に入れてもらえませんでした。仮に彼の仕事を横で見ていたとしても、同時進行している案件のうち、どれが『黒の挑戦』に関わるものなのか、僕に見わけがついたかどうか——」
「ついたでしょう？」
「え？」
「見わけ、ついたでしょう。あなたなら」
「……どうでしょうね」
　リコは微笑みながらとぼけたように首を傾げる。
「正直に答えてよ、リコ」わたしは彼に詰め寄った。「君はどっちの味方なの？」
「よくわかりませんね」
　リコは両手を広げて云う。

「何がわかんないの？　君にわからないことなんてあるの？」
「右か左か、ＡかＢか、敵か味方か――そんなふうに線を引きたがる理由と、どちらかに自分を定めようとする理由が、僕にはよくわかりません。別にどっちだっていいのではありませんか？　むしろ線を引くことで、この世にどれだけの戦争が起きたことか……」
「残念ながら哲学してる時間はもうないんだ。リコ、わたしには君の力が必要なの。それはわかるでしょ？」
「僕が必要ですか？」
「必要だよ。ぜひ力を貸して」
「それなら条件があります」
「条件――？　いいよ、云って」
「キスしてください」
「――は？」
「奇跡を起こす魔法です」
「ふ、ふざけないで」
「ほっぺでいいですから」
「ほ、ほっぺ？　ほっぺでいいの？」
「結お姉さま、そんな条件認めるつもり？」
「み、認めるわけないだろ」
「残念ですね、それでは僕は帰ります」
「ま、待って！」わたしはリコが立ち上がろうとするのを押し留めた。「わかった、わかったから。座って、リコ」
「結お姉さま、本気？」
「仕方ないでしょ。ほっぺにチュウくらいただの挨拶だよ」
「それならもっと楽しそうな顔してください」
　リコはわたしを見上げながら云う。
「いい？　一つだけ云っておくけど、そもそも魔法のキスっていうのは、王子がお姫さまにするものであって……今からわたしがするのはただの……」
「わかっていますよ、ただの冗談じゃないですか」リコは両手を挙げて降参するようなポーズを見せる。「僕に魔法なんて必要ありません。僕は最初から結さんの味方のつもりです」
「君ねえ……」

わたしは目の前の少年を本気で殴ろうかとおもったけれど思い留まった。イライラしたら負けだ。
「まず僕が『黒の挑戦』の内容を知っているかどうかについてですが、答えはノーです。僕は内容も答えも知りません。考えてもみてください。龍造寺は僕のことを御鏡霊ではないかと疑っていました。そんな相手に秘密を見せたりはしないでしょう？」
「だったら最初からそう説明して」
「ついでですから打ち明けると、僕が龍造寺のところに潜入していたのは、ただ謎を求めていたからというだけではありません。実は、犯罪被害者救済委員会について調べていたんです」
「――そういうことを何故黙ってる？」
　ああ、イライラする。
「云わなくてもわかってくれることを期待しているからでしょうか……それはともかく、ここ一年くらい、僕に接近してくる人が急に増えました。いずれも委員会から派遣された探偵たちです。どうやら新仙帝という人物が、僕を仲間にしようとしているらしいということがわかりました。そして仲間にならなければ殺すつもりだということも」
　やはり委員会も御鏡霊の力を利用しようとしていたようだ。普通に考えて、戦力を増強しようと思ったら、ランクの高い人間を選んだ方がいいに決まっている。
「そこで龍造寺の城に潜入して、しばらくの間、委員会の動向を探っていました。正直に云えば、興味をひかれれば委員会に入るつもりでした」
「節操(せっそう)ないな……君」
「僕は探偵であることにポリシーなんか持っていませんから」
　リコは悪戯(いたずら)っぽく笑う。
　自分で云うか、そういうこと。
「ただ委員会はあくまで謎を作り出す側です。僕は謎を愛していますが、別に試験問題を作りたいわけではありません。だから委員会に興味をなくしました。むしろ『黒の挑戦』に召喚されて、謎を解く探偵役になりたかったのですが、ゼロが三つもあるとなかなか呼ばれないらしくて……」
　召喚される探偵は、『黒の挑戦』における使用コストが高ければ高いほど、ランクも高くなる。だがトリプルゼロクラスを召喚するほどのコストは相当莫大なものになるだろうし、そもそも心理的な面で、犯人がそこまでコストを積み上げることはほぼないだろう。
「結論から云うと――僕は結さんたちの『黒の挑戦』を手伝いたいです。僕は謎解きがしたいのです。ぜひ協力させてください」
「ああ、もう、最初からそう云ってくれれば早いのに！」わたしは頭をかき回しながら云う。「素直なんだか

ひねくれてるんだかよくわからないなあ、君は」
「結さんは単純ですね」
　無邪気に云う彼の頭を殴る——ところまでイメージしたけれど、実際には我慢した。
「ともかくよろしく、君が手伝ってくれるなら助かるよ」
　わたしが握手を求めるように手を差し出すと、リコはにやりと笑うだけで、手を出さなかった。
「……何？」
「いいんですか？　そんな簡単に僕を認めてしまって」
「また何を云い出すの？」
「響子さんは、そこまで僕のことを信用していないようですよ」
　今度はこっちか。
　霧切は相変わらず鋭い目つきでリコのことを見ている。ほとんど睨(にら)んでいると云っていいくらいだ。
「どうしたの霧切ちゃん。リコのことを信用できないの？」
「新仙帝……」彼女は呟くように云う。「あの男は誰にでも化けるわ」
　云われて、はっとする。
　偽装と変装を得意とする変奏探偵(ヴァリエーショニスト)——新仙帝。
「なるほど、僕が新仙帝じゃないかと疑っているわけですね？」
「さすがにそれはないと思うよ」わたしはすかさず云う。「だってどう見てもリコの方が小さいし。霧切ちゃんより小さいんだよ？　ノーマンズ・ホテルで見た新仙は、少なくともわたしより身長高かったし。いくら変装の名人でも、こんなに小さくなることはできないでしょ」
「逆に大きく見せることならできるわ」
　霧切は反論する。
「そうかもしれないけど……でも実際リコの方が小さいんだから、疑っても意味がないんじゃない」
「いいえ、今のリコの姿が正体で、ホテルで見た新仙の方が変装だったら？　事実、ホテルに来ていた新仙はなんらかの変装をしていたわ」
「理論上は可能ですね」
　リコは否定しない。
「そ、そんなこと云い出したら、わたしだって新仙かもしれないってことになるよ」
「結お姉さまは本物に違いないわ」
「どうしてそう云える？」
「……や、柔らかかったもの」

霧切は顔を逸らして云う。
　昨日、彼女が抱きついてきたのは、わたしを調べるためだったのだろうか……
「リコ、何か反論してよ」
「難しいですね、それは。悪魔の証明というものです。どう話し合っても『リコは新仙かもしれないし、新仙ではないかもしれない』という答えしか出せません」
「またややこしいこと云って。君が一言、違うって云えばいいだけだろ」
「違います。僕は新仙帝ではありません」
　しかし霧切はまだ鋭い目もとを緩めない。
「霧切ちゃん、信用できない？」
「実を云うと、六割くらいは信用している」
「微妙な数字ですね」リコは肩を竦めながら諦めたように笑う。「根拠は？」
「声よ。あなたは声変わりしていない。けれど新仙帝は、明らかに大人の男性の声だった」
「確かにそうだよ！　いくら変装が得意といっても、さすがに変声期前とあとの声を使い分けることはできないでしょ」
　──いや、新仙帝ならできるのか？
　そんな考えが脳裏をよぎるが、無視する。
「僕のこと信じてもらえました？」
「云っているでしょう、最初から六割は信じているわ」
「じゃあ、二人とも仲直りの握手して。六割の強さでいいから」
　霧切がしぶしぶといった様子で手を差し出すと、リコはうやうやしくその手を取って微笑んだ。
「はい、もう仲良し。ついでにわたしとも握手。さっきできなかったから」
　わたしはリコに手を差し出す。リコは素直に応じた。彼の手は女の子のように小さかった。さすがにこの手が、新仙帝の手とは思えない。
「さて、やっと話を進められるね」
　わたしは床に十二枚の挑戦状を並べる。
　これらの挑戦状はすべて実際にこれから起きる予定の事件だ。もしかしたらもうすでに起きてしまった事件もあるかもしれない。
　そしてわたしたちは十二件すべての事件を解決しなければならない。
　わたしは指示棒を伸ばし、大人しく正座しているリコと、ベッドの縁に座る霧切を相手に、司令官のように話を進める。

「今回の『黒の挑戦』を攻略するためには、三人一緒に行動していては絶対に間に合わない。手分けして捜査を進める必要がある。ここまでは異論ない？」
　リコと霧切は肯く。
「幸い、十二割る三で、一人四件ずつ、公平に割り振れるようになっているので——」
　自分で云いながらめまいを覚える。四件だって？　今まで一件解決するのにも命がけだったのに、それをたった一人で同時に四件も？
「まず事件の舞台に選ばれている場所を調べて、それぞれ地理的に近いところを四件ずつグループ分けしよう」
「はい、先生」
「なんですか、リコ君」
「いちいち現場に行かなくても、実際に事件が起こったあとなら、警察情報として基本的なことを全部把握することができます。これを利用して、いわゆる安楽椅子探偵方式をとった方がいいのではないでしょうか」
「それは予告された犯罪をみすみす見逃すということでしょ？　そんなことはあってはならない！」
　挑戦状は犯行予告状でもある。探偵が知恵を働かせれば、事件を未然に防ぐことも可能なのだ。
「でもやっぱり全部は無理だと思うわ」霧切はゆっくりと首を左右に振る。「下手したら、残り時間全部、一箇所に拘束されてしまう可能性もあると思うの。たとえば前回のホテルみたいに……今回でいえば豪華客船なんて、一度海に出てしまったら自力で戻ることは不可能になってしまうかもしれないわ」
「う、うん……そうだね」
「そのことを鑑みると、事件のグループ分けは場所よりもコスト順でやった方がいいのではないかしら。安い方から順に振り分けて、あとはそれぞれ高い方からでも低い方からでも、好きにやればいい」
「それじゃあいったん、コストごとに並べて……」
「ねえ、早くしましょうよ」リコがもう飽きたような顔で両手を広げる。「僕に任せてもらえば、時間内に全部解決しますけど」
「いくら君でも、そんなことは」
「できます」
　リコの表情は明るく朗らかなままだった。
　彼なら本当にできてしまうのかもしれない。
　……というより、今回の『黒の挑戦』は最初から、霧切家を含めた実質トリプルゼロクラス同士の戦いではないだろうか。リコ＝御鏡霊が探偵側として参戦することも、龍造寺は見込んでいたはずだ。龍造

寺の仮想敵は、わたしではなく御鏡霊だったのではないか。いや、それとも霧切響子か。彼女は新人だからランクの数字こそ低いけれど、彼らはそうは思っていないようだ。

　考えてみれば、わたしがこんな戦いに巻き込まれていること自体、もう場違いとしか云いようがなくなってきている。

　いっそ全部任せてしまった方が……

「どれが一番不思議な事件になるのでしょうね」リコはおもちゃを与えられた犬みたいに、しっぽを振らんばかりに目を輝かせて挑戦状を選んでいる。「やっぱり、二、三人死なないと、謎は深まりません。コストの高い方が連続殺人の可能性が高いのでしょうか。この凶器なんて、どう使うのか見ものですね。ハァハァ……」

　興奮し始めてる。

　……やっぱりだめだ。

　彼は探偵として何ものからも自由であると同時に、倫理観も正義感も欠如している。彼の興味は、謎や不思議を解き明かすことにあって、事件の結果などどうでもいいのだろう。

　彼にすべてを任せてはいられない。

　けれどわたしには事件を解決する才能がない。

　彼の才能が少しでもわたしにあれば、世界中の人だって救いに行くのに……

「……なんか自信なくなってきちゃった」

　わたしは指示棒を畳んで、その場にぺたんと座りこんだ。

「結お姉さま、まだ事件は始まってもいないわ」

「わかってるけど……」

　役に立てないのが悔（くや）しい。

　でも今、下を向いていたら、本当にわたしはだめになってしまいそうだ。

　せめて前を向いて胸を張っていなきゃ。

「霧切ちゃん、やっぱりわたしはなんと云われようと、現場へ行って人を助けるべきだと思うよ。これは探偵の誇りをかけた戦いなんだ」

「結お姉さま……」

　霧切は不安そうな顔でわたしを見つめる。

　彼女から見れば、出来の悪い生徒が試験前にはりきっているみたいで、痛々しいだろう。

　それでもわたしは進むんだ。

　その先にある希望を信じて。

「ねえ、結お姉さま、こうしてはどうかしら」霧切は三つ編みの先に触れながら云う。「手分けして解決に当たるのは賛成だけど、一人ずつ分かれるのではなくて、私と結お姉さまは、二人で一組というのはどう？　一緒の方が……心強いし」

　最後の方は云いづらそうだった。

　霧切ちゃんと組んでもわたしが足手まといになるだけ――そう云おうとして、思いとどまる。

　ふと気づいた。『黒の挑戦』ではゲームの性質上、探偵役が排除されることはない。今回の探偵役はわたしだから、犯人はわたしを傷つけることすら許されないのだ。

　そうだ、わたしにも唯一できることがあった。

　君を守る盾になる。

「そうしよう、霧切ちゃん。君は推理に専念して。証拠集めとか犯人を蹴っ飛ばすとか、そういうことは全部わたしがするから」

「僕は一人ぼっちですか？」

　リコが口を挟む。

「担当する事件を、君と、わたしたちとで、半分ずつにしよう。つまり六件ずつ。それなら三分割するより、君は二つも多く謎解きできるよ？　どう？」

「それならいいですよ」

　リコは満面の笑みで云った。

　意外と彼も単純かもしれない。

「じゃあ話を次に進めるね」わたしは十二枚の挑戦状を手に取る。「それぞれ、どの挑戦状を担当するかについてだけど……」

「どれも面白そうで、迷ってしまいます」

「リコ、面白いとか云わないの。人が死ぬかもしれないんだよ」

「すみません」リコは素直に謝る。「でも選んでいたら時間ばかりかかってしまうので、いっそランダムに決めてしまいませんか？」

「うーん、それもそうだね」

　結局のところ挑戦状を見ただけでは、どんな事件になるのかわからない。今の段階で選り好みしていても意味はないかもしれない。

「ではシャッフルします」

　リコは十二枚の挑戦状をわしづかみにすると、まとめて頭上に放り投げた。

　そして――

「えいっ」
　彼は畳んで床に置いていたスーツの中から、いつの間にか六本のダーツの矢を指に挟んで抜き取っていた。それらをひと振りでいっぺんに投げつける。
　そのうちの一本が目の前を掠めて、わたしは思わずのけぞった。
　タン、タン、と軽快な音を立てて、ダーツの矢は部屋中の壁や天井に刺さった。しかもそれぞれ一枚ずつ挑戦状を射止めている。人間離れした腕前だ。よく見ると、その中の一本は、ハンガーにかけていたわたしのコートに刺さっていた。
「ぎゃー何すんの！」
「刺さった挑戦状を僕が担当します」
　リコはわたしの言葉など耳にも入らない様子で、心躍（こころおど）らせながら矢を抜いて回る。
　わたしは床に散らばった挑戦状を拾い集めた。
　霧切の隣に腰掛けて、わたしたちが担当する六枚の挑戦状を一緒に眺める。

一枚目

場所　BAR『グッドバイ』　2000万

凶器　ナイフ　500万

凶器　カリブドトキシン　3000万

凶器　ロープ　100万
トリック　密室　2000万

総コスト　7600万

二枚目

場所　中世西欧拷問器具博物館　3000万

凶器　アイアンメイデン　3000万

トリック　密室　8000万

総コスト　1億4000万

三枚目

場所　武田（たけだ）幽霊屋敷　3000万

凶器　どうたぬき　2000万

トリック　密室　1億

その他　ゴムバンド　100万

総コスト　1億5100万

四枚目

場所　枯尾花(かれおばな)学園　3000万

凶器　ろうそく　2000万

トリック　密室　1億5000万

総コスト　2億

五枚目

場所　リブラ女子学院　2億

凶器　鉄パイプ　300万

トリック　密室　1億5000万

総コスト　3億5300万

六枚目

場所　双生児能力開発研究所　5000万

凶器　ナイフ　500万

トリック　究極の密室　５億
その他　鎖　３００万
その他　南京錠　３００万

総コスト　５億６１００万

（以上コスト順）

「ねえねえ、リコ、君の好きそうなやつがこっちにあるけどトレードしない？」
　一番コストの高いやつだ。コストが高いということは、ややこしい事件になるということでもある。できることなら避けたい。
　けれどリコは首を横に振った。
「そんな面白そうなもの、僕に見せないでください。うぐぐ……」リコは身悶(みもだ)えしながら拒否する。「どれと交換するか考え始めたら、いくら時間があっても足りません。もうこれで決まりにしましょう。そうしないと僕はもう、これ以上欲望を抑えることができなくなってしまいます」
　もしかして彼はストーンヘンジとかピラミッドとかの写真を見せたら興奮するのだろうか。試してみたいところだが、遊んでいる場合ではない。
「この五億の挑戦状だけ、トリックが『究極の密室』と書かれているわね」霧切は相変わらず冷静に物事を見ている。「コスト五億の密室ってどんなものかしら」
「というかこのコストでもわたしのランクの範囲内なの？」
　十三億でダブルゼロクラスが呼ばれるのは知っているけれど、ゼロが一つもないわたしでも、五億の犯罪を相手にしなければならないのか。
　それこそ五億円もあったら、なんだってできそうだ。
　金さえかければ、人殺しでさえ選択の幅が広がる。それが犯人自身の金ならともかく、犯罪被害者救済委員会が仏の顔をして差し出す金であるというところに、『黒の挑戦』の恐ろしさがあるのかもしれない。

「では役割分担も決まったので、僕はそろそろ帰ります」
　リコが挑戦状を手に立ち上がる。
「もう帰っちゃうの？」
「はい、密室のドアを開けるのが楽しみで仕方ありません」
「というか、帰る場所あるの？」
「今日は龍造寺のところに帰ります」
「え？　君と龍造寺さんはもう敵同士みたいなものでしょ。入れてもらえないんじゃないの」
「龍造寺はそんなに狭量（きょうりょう）な人ではありませんよ。寝首を掻（か）くなんて卑怯（ひきょう）なこともしません。それに僕にはまだ、あちら側での仕事がありますから」
「仕事？」
「警察情報を受け取って、結さんたちに渡す役割です。これが本来の仕事だったのですけどね。必要があれば、いつでも僕に連絡してください。情報を渡します」
「まるでスパイだね。龍造寺さんは、こんな状況でもちゃんと情報をくれるのかな」
「その点は心配ないでしょう。彼はフェアな人間ですから」
　確かに疑う余地はない。彼がただわたしたちを排除したいだけなら、いくらだって方法があったはずだ。それにもかかわらず正々堂々と勝負を挑んできた。その愚直（ぐちょく）さは、きっと彼を救世主へと駆り立てた原因の一つでもあるのだろう。
「それではお互いにがんばりましょう」
「うん、頼んだよ、リコ」
　わたしたちは寮の玄関で別れた。

第四章

扉の向こうの亡霊

午後九時。

未成年にとっては、そろそろ家に帰らないと怒られる時刻だけれど、わたしと霧切にとってはまだ夜も始まったばかりだ。

わたしたちは駅に向かい、電車に飛び乗った。今度は海の方ではなく、山の方へ向かう。

六枚の挑戦状のうち、現場がもっとも近いのは武田幽霊屋敷というところだった。総コスト１億５１００万。わたしが最初に経験した『黒の挑戦』の時は１億２０００万だから、それよりも高額だ。

寮の子からパソコンを無理やり借りて、インターネットで調べたところ、例によって武田幽霊屋敷はオカルト好きの間で噂の心霊スポットとして紹介されていた。

かつてその土地で有力な地主として知られた武田家は、甲斐武田の末裔ともいわれ、およそ二百年前から戦前頃まで、周辺に強大な影響力を誇っていた。一揆や小競り合いなどは容赦なく武力で制圧し、首斬り武田と恐れられた時期もあったという。

しかし明治以降、戦争で土地が荒れてからは、次第に栄光に陰りが見え始め、田舎の単なる一農家に落ち着いた。現在では村の過疎化とともに、家の持ち主も退去し、無人の古ぼけた和風屋敷が闇の中に眠っている状態だという。こうして歴史ある屋敷は、ありふれた心霊スポットの一つと化した。いわく、落ち武者の幽霊が屋敷を徘徊しているとか、宙に浮かぶ生首が笑いながら追いかけてくるとか。

犯罪被害者救済委員会が『黒の挑戦』の舞台として武田屋敷に目をつけたのも、必然といえるかもしれない。

急行列車で一時間。

わたしと霧切は真っ暗な無人駅で電車を降りた。

「ひゃあ……」

ホームに降りた途端、あまりの寒さにわたしは悲鳴に近い声を上げた。声はそのまま凍りつくように白く残った。山間の盆地特有の冷え冷えとした空気が、身体の芯から体温を奪っていく。

わたしと霧切はマフラーに顔をうずめながら、寄り添うようにして改札を出る。

駅舎を一歩出ると、そこには何があるのかさえよくわからない闇が広がっていた。目の前の小道から、ぽつんぽつんと灯る街灯が、闇の世界への道しるべのように真っ直ぐ続いている。その明かりの中にだけ、かろうじて小雪の降る様子が見てとれた。

「やっぱりこんな時間に来ても、何もできないかな……」

わたしは後悔し始めていた。

闇の深さに圧倒される。よりによってこれから行く場所は幽霊屋敷と名づけられた場所だ。
　霧切はさっきからわたしの傍を離れない。
「おばけなんか出ないから大丈夫だよ」
「寒いから傍にいるだけ」
　霧切は短く答えたが、緊張した様子で周囲を見回している。
　予約しておいたタクシーが暗闇の中から現れ、わたしたちの目の前で止まった。陰気な顔をした運転手だ。彼はわたしたちの方をちらりと見ることもなかった。車に乗り込むのに躊躇したが、他に移動手段もないので仕方なく乗る。
「どちらまで？」
　暗い静かな声。
「武田家の屋敷があるところ、わかりますか？」
　尋ねると、運転手は何かに気づいたように「ああ」と一言漏らして、車を発進させた。今の反応が少し気になったが、わたしはあえて追及しなかった。
　霧切は何かを考え込むように、無言のまま外を眺めている。景色はまったく代わり映えのしない闇だ。タクシーはまるで潜水艦のように闇の中へと深く深く潜っていく。
　車で三十分ほど走った頃、坂道の先に黒々とした屋敷の影が見えてきた。周りを竹林で囲われた行き止まりのさらに奥に、それは闇の淀みのように、夜の中でもひと際濃いシルエットを象っていた。
　不吉に揺れる竹林の間に、ベンツと赤い軽自動車が並んで停まっている。
「霧切ちゃん、もしかしてあれ――」
　武田幽霊屋敷は文字通り、無人の幽霊屋敷のはずだ。今は人の住まない場所になっている。けれど停められている車は、どう見ても廃車などではない。誰かが屋敷を訪れているのだ。
　嫌な予感がする……
　どちらの車も、車体に一センチから二センチ程度の雪が積もっている。今日の雪降りの具合からみて、数時間はそこに停められていると考えていいだろう。少なくともタイヤ痕はすでに積雪で判別がつかない状態だ。
「お客さん……着きましたよ」
　タクシー運転手が陰気な声で云う。わたしはお金を払って降りようとした。
「お客さん……つかぬことを伺いますが……今夜ここで何かあるんですか？」
「わたしにもわからないんですけど……運転手さん何か心当たりでも？」
「昼間にも一人、若い男の人を乗せましたよ……この寒い中、アロハシャツなんか着てるもんだから、

不思議なお客さんだな……なんて……」
　後半の方はぼそぼそと何を云っているのかよくわからなかった。
　とにかく今日、この屋敷に数人の客が集まっているようだ。ここが『黒の挑戦』の舞台になることは予告されているので、これから起きる予定の事件と無関係とは思えない。ますます不安が募っていく。
「霧切ちゃん、急ごう」
　わたしたちはタクシーを降りて、屋敷へ急いだ。
　竹林の間に古ぼけた門がある。門戸は開きっ放しになっていた。わたしたちは門をくぐり、飛び石の敷かれた玄関前の道を走る。
　その先にようやく、瓦屋根の屋敷が実体を伴って見えてきた。玄関の曇り硝子から、ぼんやりと明かりが零れている。幽霊屋敷どころではない。誰かがいるのは間違いなさそうだ。
　呼び鈴を探すが、そんな気の利いたものは見当たらない。戸に手をかけると、あっさりと開いた。鍵はかけられていなかった。
「どうする？　霧切ちゃん」
「ここまで来たら、強引にでも介入すべきね」
　わたしは肯き、玄関から奥の廊下へ向かって声を上げた。
「すみませーん！　どなたかいますか？」
　返事はない。
　広いタタキには複数の靴が並べられていた。革靴にピンヒールに草履にサンダルにテニスシューズ。少なくとも五人はいるようだ。それにしても統一感のない靴の並びだ。
「上がっちゃおう」
　わたしたちは靴を脱ぎ捨てて、玄関に上がった。玄関から続く廊下の壁には、水墨画や油絵など、統一感のないコレクションが飾られている。心霊スポットとして有名になっていたわりに、内装はきれいで朽ちているところなど何処にもない。それは『黒の挑戦』で使われる建物に共通して見られる特徴の一つだ。おそらく犯罪被害者救済委員会によって、ゲームの舞台用に修繕されているのだろう。
　人の姿を探して、廊下をうろうろと歩き回っていると、やがて奥の方から、声が聞こえてきた。
「おーい、開けてください」
　男性だ。
　閉じ込められているのか？
　声のする方へ向かう。板張りの廊下を何度か曲がると、広々とした応接間らしき部屋が見えてきた。廊下に面したふすまが全開になっているため、中が窺える。硝子テーブルには文庫本や飲みかけのペッ

トボトルなどが置かれ、ついさっきまでそこに誰かがいたような気配だけが残されていた。昔、ホラー映画で見た幽霊船と状況が似ていて、わたしは急に寒気を覚えた。
　さらに廊下を奥へ進む。突き当たりの扉が半開きになっており、そこから冷気が零れ出している。
　ここか……
「開けてください！」
　まさに、声はこの先から聞こえた。
　わたしはドアノブを摑み——扉はあっさり開いた。
「大丈夫ですかっ？」
　真っ直ぐ正面に延びる短い廊下。右手に窓が連なっている。足元はコンクリートの打ちっ放しに、すのこが渡されているだけ。冷気は足元から漂(ただよ)ってきていた。
　廊下の先、突き当たりに扉があり、その前で複数の男女が立ちつくしていた。
「うおっ？　誰だっ、お前ら！」
　アロハシャツを着た大柄な男がこちらを指差して云う。タクシー運転手の云っていた男だろうか。頭はだらしないリーゼントで、金のネックレスやブレスレットをじゃらじゃらと身につけている。見るからにチンピラ風だけど、ここまで典型的だとわざとやっているようにしか見えない。
「一体なんなんだよこの状況……全然ロックじゃねえ……」
　アロハシャツの男は混乱しているようだ。
「もしかして新しいお客さんではないかしら？」
　おかっぱに眼鏡をかけた着物姿の女性が云う。とても小柄で、体型だけ見れば子供のようだが、おそらく二十代後半くらいの知的美人といった顔立ち。座敷わらしが大人になればきっとこんな姿だろう。
「そ、そうなんです。遅れてすみません」わたしはなんとなく話を合わせる。「みなさんはここで何を？　誰かが閉じ込められているんですか？」
「閉じ込められてるっつうか、閉じこもってるっつうカンジ？　あのねー、このドアの向こうにおじさんがいるはずなんだけど、いくら呼んでも反応ナッシングなの。キャハハ」
　きらきらとしたラメ入りの派手なセーターに、これでもかというほどに厚化粧をした女性。鮮やかな茶髪と、わざとらしく大きく開いた胸元、そしてミニスカート。夜の大人の店が似合いそうだ。
「あなたたちが六人目と七人目になりますね。ここに迷い込んできた客は」
　高級スーツにサングラスをかけたモデル体型の男が話す。身長は一九〇センチ以上あるのではないだろうか。少しイントネーションに外国語なまりが感じられるのは、やはり見た目通りハーフだったりするせいだろうか。

さっき廊下でわたしが聞いた声は、この人の声のようだ。おそらく部屋に閉じこもっている人に呼び掛けていたのだろう。
「それより早く、あのおっさんを問い質そうぜ。あいつが事情を知ってんのは間違いねーだろ。しかし鍵がかかってるわけでもないのになんで開かねーんだよ？　ふざけんじゃねーぞ」
　男は扉を前後に揺さぶっている。確かに鍵穴らしきものはないのに、開く様子もない。不思議なことに、扉は力を込めて引くとかすかに動くが、内側から引っ張られるように閉じてしまう。
　状況をまとめると――
　彼らはこの屋敷に呼び出されて集まった客である。
　そして男性が一名、扉の向こうで籠城（ろうじょう）している。
「中の男性は、何か悪いことでもしたんですか？」
　尋ねると、おかっぱ眼鏡の女性が答える。
「いいえ、そうではなくて、彼がすべてを知っているかもしれないの。わたくしたちがここに呼ばれた理由を」
　――なるほど。だんだんとわかってきた。
　おそらく彼らは『黒の挑戦』による犯人から、なんらかの招待状を受け取ってこの場所に来た。しかし招待した主は現れず、自分たちがなんの目的で呼ばれたのか、そして今後どうしたものかと途方に暮れていたところだった。そんな折、一人の男性が部屋にこもって出てこない。もしかしてその男が、何か事情を知っているんじゃないか……
　といったところか。
「なんで開かねーんだろうなあ？　なんか向こう側から誰かが引っ張ってるみてーな感じなんだが。おい、こら、開けろ！」
「結お姉さま」霧切が耳打ちする。「挑戦状に『ゴムバンド』ってあったわ。もしかしたら……」
「ん？　どういうこと？」
　その時、部屋の中から妙な物音が聞こえてきた。
　廊下に集まっていたわたしたちは一瞬、物音を聞き逃さないように沈黙する。
　何かが何かにぶつかるような音。
　そして男性のくぐもった声。
　何か大きなものが倒れるような音に伴って、かすかな振動。
　静寂――
「お、おいっ？　何があった？」
　アロハの男が扉を激しく揺さぶる。

「小刻みに揺さぶるのではなく、一度力いっぱい、扉を引いてみて」

　霧切が助言する。

「お、おう、やってみるぜ」

　男はリーゼントを整えてから、ドアノブを掴んで、全力で扉を引いた。

　すると扉はこちら側に向かって少しだけ動いた。

　一瞬だが、扉に隙間が生まれ、かすかに部屋の中が窺える程度に――

「今、見えましたか？」

「いや、中は真っ暗だ。なんも見えねえ」

「いいえ、確かに扉のすぐ近くに何か見えました。もう一度、扉を引いてください」

　サングラスの男が注文する。

　アロハの男はそれに応じ、扉を全力で引く――

「これは……なるほど、どうやら扉は内側から、紐かゴム状のもので封鎖されているようです。誰か、ハサミかカッター持っていませんか？　その封印を切断すれば、扉は開くようになるかもしれません」

「あ、普通のカッターなら」

　わたしは背中のリュックを下ろして、筆入れの中から文房具のカッターを取り出した。

「これなら使えそうです。では八鬼さん、扉を開ける担当を」

「仕方ねえな、咲かせて見せるぜ、一世一代の男の仕事」男は腕まくりしてなかなかたくましい筋肉を見せつけてから、ドアノブを掴んだ。「行くぜ、ロックンロール！」

　扉を全力で引く。

「そのままで」

　サングラスの男の合図で、アロハの男が固まる。

　扉にできた隙間に、サングラスの男がカッターを差し込み、上下に動かし始めた。

「切れた！」

　次の瞬間、アロハの男は扉に弾かれるようにして、廊下の上にひっくり返った。

　しかし彼に注目する者はほとんどいない。

　サングラスの男がその部屋の電気をつけると、たちまち全員の目が、室内の異様な状況に釘づけになった。

　思わず息を呑む。

　真っ先に目についたもの。

　それは部屋の中央に無惨にも横たわる――

屍体。

作務衣(さむえ)を着た初老の男性がうつ伏せに倒れている。

彼が死んでいるのは一目でわかった。

何故なら、背中に日本刀が深々と突き刺さっているからだ。

一歩遅かった——

もう少し早く来ることができていたら、こんなことにはならなかったはずなのに！

わたしは唇を噛む。

けれどそんな悔しい気持ちは、事件現場の異常な光景の前に、長くは続かない。

圧倒的に不気味な事件現場。

そこには——まるで屍体を見下ろすように、二体の鎧(よろい)武者が立っていた。

「ぎゃあっ、な、なにあれー？」

茶髪の女性が鎧武者を指差して悲鳴を上げる。

落ち武者の亡霊——

いや、それは幽霊でも幻でもなく、確かにそこにいた。現実に存在する甲冑(かっちゅう)一式だ。

並んで立つ二体の鎧武者のうち、左の方は右手に日本刀を持っている。

右の鎧武者もまた、刀を構えるように肘を曲げて立っていたが、しかしその手の中には何もなく、腰に下げた鞘(さや)も空っぽだった。

まさかあの鎧武者の刀が、男性の背中に？

「どちらも甲冑の中身は空のようです」

サングラスの男が部屋に踏み込み、鎧に近づく。事実、中身は空っぽで、マネキンのような鎧立てに甲冑一式が着用されているだけのようだった。それだけでは自立できないのか、板状の台座が設置され、支柱によって支えられている。

わたしたちは呆然自失(ぼうぜんじしつ)しながらも、それぞれ納得のいく答えを求めるように、部屋に一人ずつ踏み入った。

霧切は真っ先に倒れている男の傍に近寄り、生命反応を確認する。彼女は黙ったまま首を左右に振った。

おかっぱ眼鏡の女性が着物の袖から携帯電話を取り出して警察を呼び出した。ケータイは問題なく繋がるようだ。

「一応、救急車も呼んで。たぶんもう……だめだと思うけれど」

霧切が云う。

わたしは屍体よりもまず、鎧の中身を確認しに行った。

　鎧は上下一式、袖に袴、籠手とすね当て、手甲にわらじ、そして立派な前立てのついた兜から、顔を覆う面頬まで、すべて備わっている。恐る恐る兜の内側を覗いてみたけれど、やはりただの闇があるだけだった。

　間違いなく、二体とも空の甲冑だ。

「この甲冑はもともとここにあったんですか？」

　わたしは誰にともなく尋ねる。

「ええ、そうです」近くにいたサングラスの男が答えた。「ただし、二体とも壁際にオブジェのように並べられていただけで、こんなふうに部屋の真ん中に置かれてはいませんでした。刀も鞘に納めた状態でした」

「ということは、誰かがここまで運んで、こんなふうに並べたということですか」

「あるいは自分で動き出したのかもしんねーぞ」

　アロハシャツの男が深刻な顔つきで云う。

　確かにこの状況だけを見たら、あの鎧武者たちが被害者を襲ったようにしか見えない。

　それにしても……この部屋はなんなんだろう。

　部屋そのものはシンプルだ。奥行き、幅ともに十メートルほどの広めの部屋で、家具や調度品の類はほとんどなく、汚れた額に入れられた古い絵や色紙が壁に数枚飾られているだけ。部屋に入ってすぐ横の壁には、縦に複数のフックのついた柱が並列に二本、取り付けられている。おそらく刀や木刀をかけておくためのものではないだろうか。

　床は板張りで、部屋の中央ほど古く黒ずんでいる。想像するに、この部屋は剣道場として使われていたのだろう。壁には額装された色紙が二枚飾られており、それぞれ『真剣勝負』と『絶望千里』と書かれていた。

　そんな場所で、真剣で刺されて息絶えた男。

　鎧武者は部屋の中央からやや奥側、屍体のすぐ横に、ちょうど一対の仁王像のように、左右に立ち並んでいる。二体とも、部屋の中心を向いているが、あるいはそこにある屍体を見ているのかもしれない。片方の鎧武者が器用に刀を保持しているが、手甲の内側に柄を握り込める手のようなものが作られていた。

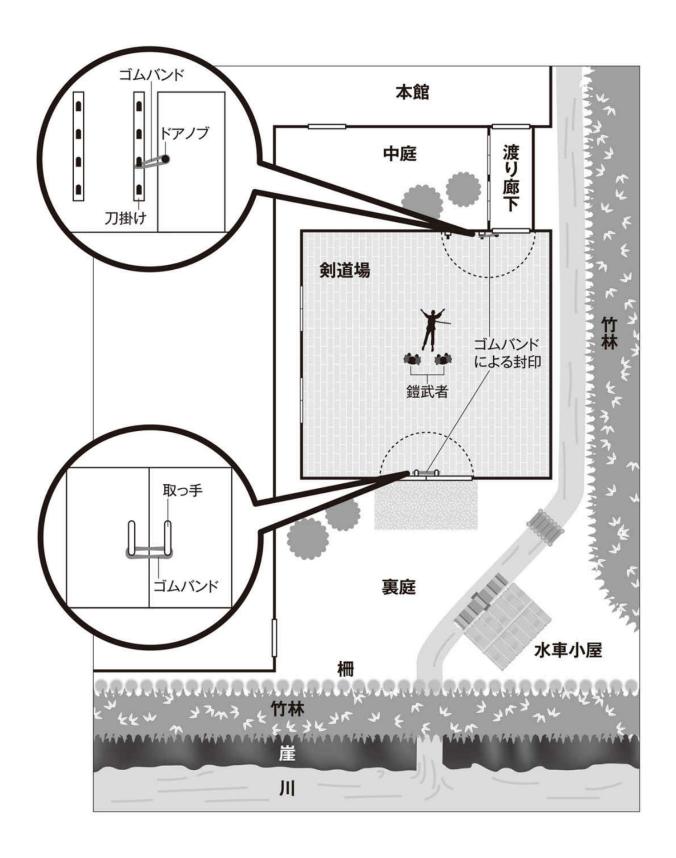
　霧切は鎧に近づき観察する。

「鎧の胴体部分にも血が付着しているわ。返り血ね。まだ生々しい。たった今飛び散ったものが付着したとみて間違いないわ。周辺の床にも血痕が見られるわね」

「ねえ、霧切ちゃん、凶器はこの日本刀で間違いないの？」

「ええ、他に外傷はなさそう」
「それじゃあ挑戦状にあった『どうたぬき』は何処に行ったの？　たぬきっぽいものは見当たらないけど……」
「この日本刀の名前だと思う」
「あ、ああ……なるほど」
　あとで調べたところによると、正しくは同田貫(どうたぬき)と書くらしい。
「おい、やっぱりおかしいぜ、この状況。本当に鎧武者がおっさんを刺したとしか考えられねーよ」アロハシャツの男が引きつった顔をしながら云う。「誰かがおっさんを刺したっつうなら、そいつは何処に行った？　何処にもいねーぞ」
「どっかに逃げたんじゃなーい？」
　茶髪の女性が間延びした口調で云う。
「はあ？　よく見ろよ、二つある窓はどっちも鍵がかけられてるだろ。つーか、どっちにしろ窓の外に木の格子(こうし)がはめられているから人は出入りできねえ」
「もう一つの扉も、内側からゴムバンドで厳重に封印されていますね」サングラスの男が部屋の奥にある観音(かんのん)開きの扉に近づく。「サムターン錠はかけられていないようですが、左右の取っ手にゴムを巻きつけて、開かないように細工されています」
「うちらが入ってきた方のドアは、ドアノブと壁のフックにゴムを引っかけてぐるぐる巻きにしていたみたいだね」
　茶髪の女性が云う。切断されたゴムは扉のすぐ下で丸まっていた。
「密室――というものでしょうか」おかっぱ眼鏡の女性が落ち着き払った様子で云う。「あるいはまだ、犯人はこの部屋の何処かに隠れているのかもしれませんわ」
　けれど部屋を一通り見回しても、人が隠れられそうな場所など何処にもない。
「霧切ちゃん」わたしは周囲に聞こえないように、霧切に小声で話しかける。「もしこれが『黒の挑戦』の密室なら、犯罪被害者救済委員会が関わっているってことだよね？　それなら床の一部がパカッて開いたり、壁がくるって回ったり、そういう仕掛けが何処かにあって、そこから犯人は逃げ出したんじゃない？」
「前も同じような推理をしていたわね、結お姉さま。あながち間違ってもいなかったけれど」
　ノーマンズ・ホテルの事件のことだろう。一応、どんな可能性も想定してみるに越したことはない。
「ちなみに――」霧切が来客者たちに尋ねる。「殺された人を含めて、今日この屋敷に集まった人はこれで全部ね？」

「ええ、そうですわ」
　おかっぱ眼鏡の女性が答える。
　元々扉の前にいたのは、アロハシャツ、サングラス、おかっぱ眼鏡、茶髪ギャルの四人で、彼らは被害者が部屋から出てこないのを案じていた。そこにわたしと霧切が加わって六人。被害者を足して七人。
　これで全部——？
「わかったわ」霧切はそっけなく応じて、手近な床から調べ始めた。「警察が来るまでの間に、調べられることは全部調べておきましょう」
「おい、お前ら何者なんだ？　ただの客じゃねーだろ……？」
「だよねー、怪しくない？　この子たち」
「怪しいだなんて！　わたしたちは実は——」
　云おうとしたところを、霧切に裾を引っ張られて黙る。
「説明はあとでもできるわ。今は目の前の捜査に集中しましょう」
「そ、そうだね」
　わたしと霧切は床も壁も天井も、可能な限り調べた。しかし人の出入りできるような場所や仕掛けは存在しなかった。
　警察官たちが乗り込んでくる前に、わたしと霧切は事件現場の外の状況も調べることにした。もしかしたら雪の上になんらかの痕跡があるかもしれない。
　渡り廊下の窓から外を眺める。外は中庭だった。真っ暗だが、窓から零れる明かりで、かろうじて雪で白く染まった中庭が窺える。少なくともそこから見える範囲には、何者の足跡も存在せず、まっさらな状態だった。
　それからさらにわたしたちは、現場の外側全体を見渡せる位置まで移動した。屋敷本館の奥まった場所から、窓越しに剣道場の外観を確認できる。そこは裏庭とでも呼べそうな場所で、建物と竹林に囲まれた空間だった。ここから見える観音扉が、殺害現場に通じているのだろう。あの扉も、内側の取っ手がゴムバンドで封鎖されている。しかしいずれにしてもあの扉を出入りした者はいないとみていいだろう。裏庭にも足跡は一つもなかった。
　つまり現場は雪密室でもあった。

ゴムバンド
ドアノブ
刀掛け
本館
中庭
渡り廊下
剣道場
ゴムバンドによる封印
鎧武者
取っ手
ゴムバンド
裏庭
竹林
水車小屋
柵
竹林
崖
川

ちょうど０時を回った頃、サイレンと赤色灯が幽霊屋敷を取り囲んだ。制服警官とスーツの刑事たち、作業着の鑑識官たちがぞろぞろと乗り込んできた。

『黒の挑戦』に警察が介入するケースは、わたしにとって初めての経験だ。

挑戦状に書かれている項目はすでにクリアされているので、犯人のターンはすでに終わり、今度はわたしたちのターンということになるのだろう。

けれど警察が場を取り仕切る状況で、自由に行動することなど許されるはずもなく……わたしと霧切を含め、関係者は全員、応接間に集められた。

いかつい顔をしたスーツの刑事たちによって、事情聴取が始められる。

「だから何度も云っているように、オレたちは黒い手紙でここに呼び出されて、武田ナントカが来るのを待っていたんだっつうの」

ソファに座っているアロハシャツの男が云う。

「黒い手紙？」

わたしがいつもの癖(くせ)で思わず訊き返すと、刑事たちが睨むようにこちらを向いた。

「あ、すみません。続けてください」

「ほんとなんだって。オレは家に手紙を置いてきちまったから確認できねえんだけど……」

「わたくしが持っています」

おかっぱ眼鏡の女性が、おずおずと袖から黒い封筒を取り出す。見覚えのある封筒だ。ただし犯罪被害者救済委員会の封蠟はない。

彼女は封筒の中から黒い便せんを取り出して、硝子テーブルの上に広げて置いた。

刑事たちが興味深そうに手に取る。

わたしも刑事たちに交じって、彼らの肩越しに文面を覗いた。

『誕生日会のおしらせ

前略

来(きた)る一月十日、武田家当主こと武田歳雲(さいうん)が百寿(ひゃくじゅ)を迎えることになりました。

この日を迎えることができましたのも、日頃からご親交いただいている皆さまのおかげです。心よりの御礼を申し上げます。

つきましては、百寿を記念しまして、ささやかながら当武田家において小宴(しょうえん)を催したく存じます。料亭の料理人による夕食をご用意いたしますので、ぜひ拙宅(せったく)までお越しください。

なお、お帰りの際には、武田家ゆかりの品々をお土産(みやげ)にご用意させていただいております。

草々

武田家一同』

　このうさんくさい印象の招待状にもなんとなく見覚えがある。これが『黒の挑戦』の定石なのだろうか。

「みなさん、この武田歳雲という人とは知り合いですか？」

　刑事の一人が尋ねる。

「それが……」

　その場にいる全員が首を横に振った。

「知り合いでもないのに、誕生日会に誘われてこんなところまで出てきたというんですか？　不審に思いませんでしたか？」

「そりゃ思ったけどよ」

　アロハシャツの男が大げさに肩を竦めて答える。

「そもそも武田歳雲という人は、もう十年以上前に亡くなっているんですよ」若い刑事が云う。「生きていればちょうど百歳みたいですけどね」

「そんなこったろうと思ったぜ」

「では我々は百歳になった幽霊に呼ばれたということですか。悪い冗談ですね」

　サングラスの男が云った。彼は足を組んで悠然とソファに座っている。現在の状況をまったく知らない人が見たら、たぶん彼がこの場で一番偉い人物だと考えるだろう。

　ちなみにおかっぱ眼鏡の女性はソファの上に正座している。対照的に、茶髪の派手な女性は、ミニスカートでも気にすることなく、両足をテーブルの上に投げ出していた。

「どうも要領を得ませんな」刑事の一人が云う。「あなたたちは一体、なんの目的でこんなところに集まったのですか？」

「だーかーらっ、変な手紙で呼び出されまくりみたいな？」茶髪の女性が云う。「てか、いい加減、帰りたいんだけど？」

「まだお帰しするわけにはいきませんな」

「うえーっ。このおっさん嫌いー」

「これは殺人事件なんですよ。人が一人亡くなっているんです。どうか真面目（まじめ）に受け応えしてもらいたいものですね」

　刑事の忠告に、女性は口を尖らせて黙り込んだ。

「それで君たちは？」
　とうとうわたしたちに視線が向けられる。
「あの……えっと……」
「そういやそうだ、このガキどもはなんなんだ？」
　アロハシャツの男が云う。
「実はわたしたちのところにも、黒い手紙が届いて……」
「おかしいですな。さっきはまるで黒い手紙のことを初めて知ったような反応でしたが……二人だけ他の方々よりかなり遅れて到着したそうですね。何か理由でも？」
「午後もずっと別の予定があって、なかなか出て来られなかっただけなんです」
「お前ら、ただのガキじゃねえだろ」八鬼が口を挟む。「平然と屍体を調べたり、隠し扉がないか現場を探し回ったり……」
「わかりました、白状します」半ばやけになって口走る。「わたしたちは事件を解決するためにやってきた探偵です。情報源については話せませんが、ここで事件が起きることを事前に知っていました。それで急いで足を運んだのですが、間に合わず……」
　わたしは首を振る。
　様々な種類の視線がわたしに集まった。その中でも刑事たちの視線は実に冷ややかなものだった。
「……へえ、探偵さん、ね。では君は？」
「名乗る必要はないわ」
　霧切は人形のように無表情のまま云った。刑事に対してもこの態度なのだから、よく訓練されているというか、愛想がなさすぎるというか。
「ねえお嬢さん、これは事件の捜査なんですよ？　素人(しろうと)の探偵ごっことは違うんですよ。聞いていますか？」
　眼光だけで数々の犯罪者を泣かせてきたと思われる刑事が、霧切に詰め寄る。けれど彼女は知らんぷりしたまま何処か遠くを見つめていた。
「警部、ちょっと」
　そこへ若い刑事がやってきて、声をかける。
「なんだ、あとにしろ」
「警部」
　若い刑事は食い下がる。
「何かあったのか？」

「つい先ほど、署から連絡がありまして……」

　二人の刑事はひそひそと何か話し合っている。

　やがて会話が終わり、刑事たちは振り返りざま、遠心力をそのまま利用するかのように、わたしと霧切に深々と頭を下げた。

「すみませんでした、龍造寺先生のところの助手さんとは知らずに――そうならそうと早く云っていただければ……」

「え、あ……はい」

　わたしはなんだかよくわからないまま肯く。

「龍造寺さんはなんて云っていたんですか？」

「二人の探偵を寄越すからよろしく、とだけ……随分早い到着だったようですね。さすが素人の探偵ごっことは違いますな。一応確認ですが、探偵図書館の登録カードを見せていただいても……」

　わたしは云われるまま、カードを提示する。

　すると刑事たちは敬礼した。

「確認できました。ありがとうございます。お二人はここにいる間、この腕章をおつけください。帰る際にはお返しいただけると助かります」

　わたしと霧切は『捜査官』と記された腕章を受け取った。

　試しに、見よう見真似で敬礼してみると、その場にいた捜査関係者全員が敬礼で応じてくれた。

　……快感。

　しかし霧切はわずかに眉根を寄せて、不服そうにそれを見つめている。

「どうしたの？　霧切ちゃんもそれ、腕につけなよ」

「すべて龍造寺月下の手の上という感じが気に入らないわ」

「わたしも龍造寺さんがここまで警察に影響力を持ってるとは思わなかったよ」

　真の名探偵は警察からも尊敬され、信頼されるものだ。国民のヒーローとして迎えられる者こそ、名探偵の資格を持つ。そういう意味でも、龍造寺月下は探偵界最高のカリスマだ。

　一方で……この屋敷での事件が彼のコンサルティングによるものだと説明しても、警察の人間は誰一人として信じないだろう。

「では引き続き、皆さんからお話を伺いたいと思いますが、お一人ずつ別室にお呼びして行ないますので、ご協力ください」

「えーっ、まだやるの？　もう肌が荒れ荒れなんだけど、誰が責任取ってくれるの」

「では最初は、そちらの着物の方から」

刑事たちは肌荒れの件を完全に無視して、おかっぱ眼鏡の女性を連れ立って隣室へ向かう。同時に、残された刑事たちもぞろぞろと応接間を出ていき、見張りらしき制服警官が一名だけ、その場に残された。
「やれやれ、大変なことになりましたね」
　スーツにサングラスの男が云う。彼は言葉のわりに落ち着いていて、取り乱した様子がない。物腰が丁寧なので嫌みがないが、たぶんとてもマイペースな人間だろう。
「それにしても……まさかあなたたちも探偵だったとは」
「あなたたちも？」
「ええ。どうやら今夜集まった客全員、探偵のようです」
「ぜ、全員？　あなたもですか？」
「ええ」
「何故警察にすぐに打ち明けなかったんですか？」
　まるで探偵であることを隠そうとしているみたいだ。
「警察と探偵は昔から相性が悪いものです。我々は経験上、それを知っているから、無駄なアピールを避けようとする。それ以上の意図はありませんよ」
「龍造寺組の構成員にはわかんねー話だろうな。オレみてーな背景を持たねえ探偵のロックなシノギってもんがよ」
　アロハシャツの男が口を挟む。
　探偵の世界も色々と大変なんだ……と他人事のように思ってしまうのは、やはりまだ私が経験不足の半人前だからだろうか。
「まあ、どうせ尋問の際には警察にも打ち明けることになるでしょうし、あなたたちには早いところ打ち明けておきましょう。龍造寺さんに疑われるのは本望ではありませんし」
　サングラスの男はスーツの内側から探偵図書館登録カードを取り出した。

サルバドール・宿木(やどりぎ)・(ふくろう)　DSCナンバー『752』

「私は贋作詐欺(がんさくさぎ)事件などを専門に扱っています」
　カードに印刷されている写真もサングラスをかけている。パスポートや免許証とは違うから、それでもいいのか。

「ランク2ってすごくない？　うち、まだ8だよ」
　硝子テーブルに足を投げ出していた茶髪の女性が、身を乗り出してきた。彼女も探偵なのか。胸の谷間から自分のカードを取り出す。きらきらとしたデコレーションシールがいっぱい貼られていた。

杜若（かきつばた）こりす　DSCナンバー『４８８』

「専門は動物系、ってか動物愛護とか、そっち系？」
　彼女のカードはシールのせいで通常より倍くらい厚い。探偵カードをデコっている人なんて初めて見た。あれでは探偵図書館の端末に通せない気がする……
「オレはこういうモンだ」
　アロハ男がぞんざいにカードを見せつける。

八鬼（やき）弾（はじき）　DSCナンバー『６６６』

「専門はギャンブル。オレがギャンブルすんじゃねーぞ？　違法に儲（もう）けようとする連中を泣かすのがオレの仕事だ」
「皆さん探偵であることは、お互いにご存じだったんですか」
「ええ、実はお二人が来る前の話ですが、ちょっとした話の流れから、探偵であることを告白しました。探偵同士は隠すより明かした方が何かと便利ですから」
　宿木がサングラスを押し上げながら云う。
「どうやら最初から仕組まれていたみたいだぜ」八鬼が窓硝子を鏡に見立ててシャツの襟（えり）を直しながら云う。「オレたちが受け取った『お誕生日会』の文面は全員同じだったようだ。だが同封されていた『依頼状』がそれぞれ違ったみてーだな。たとえばオレんところにきたのは、この屋敷が違法賭博（とばく）の会場になってるから調査しろって依頼だった。オレの専門がそっちだから、食いつくネタを出してきたってこったろーな」
「私の場合は、屋敷にある絵が偽物か判断してほしいという依頼状でした」宿木は大げさな手ぶりで話す。「しかしそれさえ嘘だったとなると、犯人は探偵のことをよく知る者と云わざるを得ません。どう見ても『お誕生日会』は怪しいですが、それがあからさますぎるせいで、より危険な嘘──すなわち『依頼状』の方が本物らしく見えてくるという手口のようです」

「うちんとこには、条約で禁止されてる動物をここで売買してるって話がきた。めんどくさいなーと思ったんだけど、事実だったらヤバイじゃん？　かわいそーじゃん？」
「つまり皆さん、罠にはまってここに集められたということですね」
「はまってねーし」
　八鬼が反抗的に云う。
「いや、事実ですよ。認めましょう」宿木が諭すように云う。「我々は犯人の罠にはまり、晴れて殺人事件の容疑者です」
　このパターンは、わたしが先月経験したシリウス天文台の事件に似ている。探偵のもとに嘘の依頼状が届き、事件の舞台に集められるのだ。あの事件では探偵が次々殺されてしまった。
　今回の被害者は一人。すでに警察が介入しているので、これ以上犯行が続くことはないと考えていいだろう。もちろん百パーセント安心することはできないけれど。
「でー？　あんたたちは？　本当に探偵なの？」
　杜若に問われ、わたしは探偵図書館のカードを見せる。
「随分若いみたいだけどさ、いくつ？　高校生？　ほんとにー？　おっぱいでかくなーい？　てか、あんた殺人事件専門でもないのに、捜査官になれんの？　ずるいー、うちもそういうのやってみたい」
「これにはいろいろ理由があるんですけど……」さすがに説明するわけにもいかないので、話を逸らす。
「こっちの霧切ちゃんは、わたしよりも若い中学生探偵なんですよ。かわいいでしょう？」
「専門は？」
　宿木が興味深そうに尋ねる。
「今そんなことを話している場合かしら」霧切は愛想の欠片もなく応じる。「あなたたちは犯人の罠にはめられて、殺人の容疑をかけられているのよ」
「む……」宿木は足を組み直して、長い両手を大きく広げる。「その通りですね。この事件を解決しなければ、不名誉どころか、濡れ衣を着せられてしまうかもしれません」
「つーかオレ、殺人事件なんか専門ですらねーし。おめー、解けよ」
「はー？　うちも殺人とか、震えちゃうし」
　二人が云い合いをしているところに、おかっぱ眼鏡の女性が戻ってきた。
　彼女は楚々としたしぐさで、ソファの上に正座する。
「刑事さんから、杜若さんを呼ぶように云われました」
「えーっ、次うちの番？　ちょー眠いんですけどー。肌荒れしたら警察は責任もってくれんの？　つーかこれ、ガッコで悪さして職員室呼ばれる時みたいじゃん？　そう考えたらなんかわくわくしてきた」

杜若は一人でわめきながら、隣の部屋へ移動した。
「ちょうど今、若い探偵さんたちに自己紹介していたところですよ」
　宿木が穏やかに云う。
「あら、ではわたくしも」彼女は口元を隠しながら笑顔を見せた。「わたくし、水井山（みずいやま）　幸（さち）と申します。ここに来ることになった理由については――皆さんもうお話しになられました？」

水井山 幸　DSCナンバー『５２７』

「わたくしも皆さんと同様です。わたくしのところに届いた依頼状は、改築のアドバイスが欲しいというものでした。わたくしの専門は主に建築関係です」
「ちなみに殺された男性について、皆さんは何か知りませんか？」
「白州寸鉄（しらすすんてつ）、五十二歳」宿木が答える。「彼の荷物の中に、探偵図書館の登録カードがありました。特に怪しい持ち物はありませんでしたが。DSCナンバーは『１２６』――宗教分野でも、主に東洋のカルト宗教などを専門にしているナンバーですね」
「事件と宗教が関係あるのかしら」
　水井山は首を傾げながら云う。
「どうでしょうね。殺される理由は、そのあたりの事情が関係しているかもしれません」
　宿木が応じる。
「わたしたちが到着するまでの間に、白州という人に何があったんですか？　あの部屋に籠城していたみたいですけど……」
「違う違う、籠城なんかしてねーよ」八鬼がソファにふんぞりかえって、腕を左右に振る。「あいつ、気づいたら何処にもいなくってよ……いきなり姿をくらますから、あいつがオレたちをここに誘い出した張本人じゃねえかって思ったんだ。確かそん時だよな、あいつの荷物を調べたら、探偵カードが出てきたのって。そんであいつを捜し回ってたら、あの開かないドアを見つけたっつーわけ」
「昼間は、あの剣道場にも普通に入れたのですよ」宿木が説明する。「ところがいつの間にか開かないようになって……鍵穴のない扉ですから、中で誰かが開かないようにしているんじゃないかと推測しました。では一体誰が……と考えているうちに、白州さんを除く全員があの場に集まっていました」
　それで必然的に、扉の向こうに白州がいるのではないかと予想できたようだ。そして扉の前で手をこまねいているところに、わたしたちが現れた。
　その直後、事件は起こってしまった。

扉の向こうで被害者が刺された時、宿木、杜若、八鬼、水井山の全員が、扉のこちら側にいた。ということは、犯人は四人以外の誰かということになるのではないだろうか。それが当然の論理というものだ。

あと密室の問題もある。

犯人はいかにして密室に出入りしたのか……

「私たちがここに来るまでの間に何があったのか、詳しく教えてくれないかしら」

霧切が誰にともなく問いかける。

「いいでしょう。これから警察にさんざん話すことになると思いますが、その予行も兼(か)ねて……」

宿木はオーバーなしぐさで、話し始める。

彼らが武田幽霊屋敷に集まったのは今日の（正確には昨日の）一月十日午後一時頃。

ちなみにわたしが挑戦状を開封したのはその一時間前、正午ジャストだから、つまり『黒の挑戦』の幕が開けてから、たった一時間しか経過していない段階で、舞台に役者が揃っていたということになる。

たった一時間で招待状を配って役者を集めることは不可能だ。では犯人はわたしが一月十日正午に挑戦状を開けることを予測して、事前に行動していたのか？

いや、おそらくそうではなく、犯人はあらかじめ屋敷に人を集めておいて、挑戦状が開封され次第、犯行に移る予定だったのだろう。幸か不幸か、開封当日と集合日が重なり、速攻で犯行に至ったと考えられる。

宿木たちは屋敷に着いてまず、それぞれ自己紹介をしたという。この段階ではまだ腹の探り合いの状態だっただろう。探偵であることも、誰も打ち明けなかった。

午後三時。集合から二時間経過するが、依頼主は現れない。そろそろみんな不信感を抱き始める頃だ。この時間以降は、各々好き勝手に屋敷をうろついていたため、誰が何処で何をしていたのかは個別に聞き出すしかない。

午後九時、いよいよ依頼そのものが嘘だったのではないかと考え始める。そろそろ帰るべきではないかという提案もあったらしい。そんな中、まず杜若が探偵であることを告白。それにつられるように、白州を除く全員が本来の来訪理由を告白した。

この時点ですでに、白州は行方不明。

白州が依頼主を騙(かた)った張本人ではないかという疑いが濃くなり、全員で白州を捜し回った。しかし見つからない。

午後十時、宿木が渡り廊下の先にある剣道場の扉に異変があることに気づく。扉を開けようとするが、少し動くだけで開かない。

それから三十分の間に、杜若、八鬼、水井山が順に渡り廊下に現れる。それぞれに事情を説明しているうちに、三十分が過ぎてしまった。

そこにわたしと霧切が現れ――

以降はわたしが体験した通りだ。扉を開けようとしているうちに、中から物音が聞こえてきた。密室を破って中に入り、電気をつけると、部屋の中央に背中を日本刀で刺された男が倒れていた。

「あの時室内から聞こえたのは、白州さんが刺されて崩れ落ちる音で間違いないのかな」

わたしは誰にともなく尋ねる。

「そうね。私が被害者のところに駆けつけた時、背中の傷口からは、今まさに刺されたかのようにじわじわと血が流れ出していたわ」

「ってことは、やっぱり刺したやつがあの場所にいなきゃおかしーよな？」

八鬼が腕組みしながら云う。

「部屋に踏み込んだ時、室内は電気がついていませんでしたわね」水井山が考え考え言葉を紡ぐ。

「あの時、犯人は暗闇に乗じて、開いたばかりの扉から逃げたのでは……」

「いーや、最後に部屋に入ったのはオレだが、オレが渡り廊下で尻もちついている間に、部屋から出てきたやつなんかいなかったぜ。それにあの扉は外開きだから、扉の裏に隠れるっつう古臭い方法もできねーし」

「部屋の電気を手探りで私がつけましたが、点灯まで一分も経っていなかったと思います。犯人がもし闇に乗じて逃げたとすれば、たった一分の間に何処かへ行かなければなりません」

宿木が説明する。

「だから何処にも逃げ場がねーっつうの」

「あのあとわたしと霧切ちゃんとで、現場の外周りを調べてみましたが、雪の上に足跡やその他の痕跡はありませんでした」

「では白州さんを刺した犯人は何処に消えたのでしょう」

水井山は人差し指を口元に当てながら首を傾げる。

「やっぱりよー、あの甲冑がやったんじゃねえのか？」

八鬼が眉間に皺をつくって云う。

「甲冑の中身は空でしたよ。間違いありません」

宿木が答える。わたしも確認したけれど、人が入っていなかったのはもちろんのこと、なんらかの怪しい道具や装置なども見つからなかった。

「そーじゃなくって、ほら、その……」

「なんですか？」
「ゆーれーってやつだよ！　大の大人にそんなこと云わせんじゃねーよ」
「つまり幽霊が鎧にとりついて、刀を振り回したということですか」
　宿木は真剣に尋ねているが、どう考えても荒唐無稽だし、非科学的だ。幽霊が鎧武者となって人を殺すなんて……
　それにメタ推理になるけれど、これは『黒の挑戦』なのだから、オカルト落ちで終わるはずがないのだ。犯人は復讐を動機に、なんらかのトリックを用いて被害者を殺害したに違いない。
　しかしどうやって？
　現場は密室。なおかつ被害者が襲われた時、容疑者たちは全員揃って扉の外にいた。建物の周囲に足跡はなく、第三者の存在もありえない。
　何処からどう見ても不可能犯罪だ。
「午後三時以降、それぞれ何処で何をしていたのか教えてもらえるかしら」
　霧切は腕章をつけている方の腕を腰に当てながら云う。さすが殺人事件専門の『９』ナンバーだ。いかにも捜査官らしくなってきた。
「アリバイ調査ですか？」水井山が少し顔を曇らせて云う。「別に話すのは構いませんけれど、何故そんな前のアリバイを訊くのですか？　白州さんが殺害されたのは十一時頃ですし……」
「被害者の所在がわからなくなったのは、おそらく午後三時頃から。すでにその時刻から、犯人は被害者と接触していた可能性があるわ」
「なるほど。でもアリバイといっても……わたくしはその時刻、この応接間で本を読んでいました。ここは集合場所のようになっていましたから、皆さん出たり入ったりしていましたけれど、わたくしはだいたいずっとここにおりました」
「失礼な云い方になりますけど、随分のんきじゃないですか？」わたしはなるべく刺々しくならないように尋ねる。「謎の人物から幽霊屋敷に呼び出されている状況ですよ」
「わたくしはそこまで異状を感じてはいませんでした。幽霊屋敷というのも、あとから聞いた話ですし……大人しく待っていれば、いずれ依頼主が現れるのではないかと考えていましたもので。その時刻はまだ、守秘義務を優先すべき状況でした」
　確かに云う通りかもしれない。その時点では事件らしい事件は起こっておらず、秘密めかした依頼状だけが手元にある状態だ。わたしもきっと、彼女と同じ行動をとっていただろう。
「被害者の男性とは、何処かで会いませんでしたか？」
「確か三時頃までは、そこのソファでケータイをいじっていました。それ以降は知りません」

「ケータイで誰かと話をしていたんですか？」
　わたしは尋ねる。
「いいえ、株をやっているんだと云っていました。聞いてもいないのに教えてくれました」
「私は三時頃からずっと、屋敷内にある絵や掛け軸を調べていましたね」宿木が答える。「私は真贋鑑定のためにここを訪れていますので、依頼主が現れるまでに、下調べをしておこうと思いまして。特に玄関に並んでいる絵をしばらく観察していました。ちなみに白州さんとは、何度か廊下ですれ違いましたね。特におかしなところはなかったと思いますが……時間ははっきりとは覚えていません」
　続いて、八鬼が口を開いた。
「云うまでもないが、オレはただ屋敷の中をぶらぶらと歩いていた。おっさんとは一度も会ってないな。だがしょっちゅうあの尻の軽そうな女と鉢合わせてイヤミ云われたぜ。電話してんだからあっち行けってな」
　結局のところ、全員が別行動をとっていたため、アリバイを保証できる相手はいなかったということになる。そもそも午後三時から十一時までという長い時間、確固としたアリバイがあったら逆に怪しい。
「あー、だりー」
　そこへようやく、杜若が刑事から解放されて応接間に戻ってきた。彼女は髪をかき回しながら、ソファに身体を投げ出し、手すりを枕（まくら）にして寝ころぶ。
「次、そこのいい歳こいたヤンキー崩れ。怖いおじさんたちが呼んでるよー」
「誰がヤンキー崩れだよ。全然崩れてねえだろうが」
　八鬼がリーゼントを整えながら、隣の部屋に消えていく。
「みなさんにお尋ねしているので、杜若さんにも訊きますが……」わたしは霧切に代わって声をかける。「午後三時以降、杜若さんは何処で何をしていましたか？」
「おおーっ、ほんとに捜査官みたいじゃん」彼女は手を叩いて喜んでいる。「三時だって？　そんな細かいこと覚えてるわけなーいじゃーん」
「だいたいでいいので……」
「うーん……いろんな部屋を覗きながら、ケータイで友だちと話してた……かな……？」
「わかりました」
　訊くだけ無駄だったような気がする。
「結お姉さま」霧切が背を伸ばしてわたしに耳打ちする。「ここでの用事は済んだわ。今のうちに調べておきたい場所があるの。行きましょう」
「行きましょうって……何処へ？」
　霧切が唐突にわたしの手首を掴んで、応接間から廊下へ連れ出そうとする。

「あ、職務放棄だ！」
　杜若の声が背中に刺さる。
「すみません、すぐ戻りますから！」
　霧切に腕を引かれるまま、わたしは振り返って云い置きながら廊下へ出た。
「どうしたの、霧切ちゃん。いつになく積極的だね」
　依頼がなければ事件を解決する意味がないとか、ランク上げだけが目的とか、今まで『黒の挑戦』に関わることを避けようとしていた彼女とは思えない態度だ。
「……余裕がないの」
「時間が足りないってこと？　確かに刻一刻と残り時間は減っているけど、単純計算で一件あたり二十八時間かけられるんだから、まだ余裕はあるよ」
「そうではなくて……」
　霧切は顔を伏せて、重たそうな口を隠す一方、わたしの腕を引く力を弱めることはなかった。
　彼女のすぐ後ろを歩きながら、彼女の小さな肩や背中を見つめる。十三歳の少女相応（そうおう）の身体に、一体どれだけのものを背負っているのだろう。そしてそれらのうち、本人の意思によるものがどれだけあるというのだろう。
　彼女が一人で抱えているものを、少しでも取り除いてあげられないだろうか。
「わたしにまだ云えないことがあるんだね」
　彼女は肯きもせず、振り返りもしなかった。
「『黒の挑戦』のごたごたで訊きそびれちゃったんだけど、君は今、家に帰れない事情でもあるの？」
「その話はあとにして」
　霧切はわたしの差し伸べた手を払うように、短く云って、拒絶した。
　でもわたしはくじけない。
「もしかして君の家で何かあったの？」
「結お姉さま」霧切は突き刺すような視線だけをこちらに向ける。「余計なことを考えている暇はないはずよ」
　余計なことなんかじゃないよ。
　そう云おうと思ったけれど、思い留まった。
　彼女とわたしの間にある透明な壁――もうそこにはないと思っていた壁が、まだ厳然（げんぜん）と存在していることを、わたしは哀しい気持ちで再認識した。
　渡り廊下に出る。

屋敷本館と、事件現場となった別館の剣道場を繋ぐ廊下だ。数名の鑑識官が剣道場の入り口で、指紋や足跡の採取などをしていた。
彼らに頭を下げながら、腕章をこれ見よがしに掲げつつ現場に入る。
室内ではさらに数名の鑑識官が忙しそうに動き回っていた。屍体はすでに搬出されたらしく、中央の床板に黒々とした血だまりだけが残されている。
二体の鎧武者もそのままだった。
事件が起きた時の異様な雰囲気も、鑑識官たちが黙々と作業することで少しずつ清められているようだ。そのせいか、あれだけ存在感を放っていた鎧武者たちも、今では場違いな異物のように見えた。
霧切は刀を持っている方の鎧武者に近づく。
「ああ、気をつけてね。それ、真剣だから」
鑑識の一人が注意する。
霧切は首だけ伸ばして、遠くから日本刀を観察する。これは被害者の背中に刺さっていたものと同種類だろうか。細かい技術や製法については知らないけれど、一般的に日本刀と聞いて思い浮かべるものと考えていいだろう。
霧切は耳元の髪をかき上げると、いったん鎧武者から離れて、黒い手袋をはめた。
「君ら、龍造寺先生んとこの子？　最近はまた随分と本格的になったもんだな」
鑑識官は感心したように云う。どうやら龍造寺は普段から、自分のところで雇っている子供たちを、情報収集のために事件現場に派遣しているようだ。龍造寺の実績があるから許される行為だ。
しかし龍造寺が犯罪組織の幹部であることを知る者は少ない。
これまで龍造寺が事件解決に貢献した数と、彼が携わった『黒の挑戦』の回数、どちらが多いだろうか。
――いや、彼にとっては、どちらも『救済』なのだ。おそらく区別などない。
「被害者の死亡推定時刻は？」
霧切が鑑識のおじさんに尋ねる。
「捜査が入った段階で、被害者はまだ死亡して間もない状況だった。せいぜい死後一時間程度。つまり死亡推定時刻は夜十一時くらいってところだな」
わたしたちが密室の前で物音を聞いたのもだいたい同じ時刻だ。やはりあの時、被害者は扉を挟んだ向こう側で何者かに刺されて死亡したのだ。
霧切はしばらく床の血だまりを見つめていたが、次に目の前の鎧武者に視線を移した。
「もともと二体とも壁際に寄せて飾られていたらしいね」わたしは霧切の背中に話しかける。「なんで事

件が起きた時は、部屋の中央に移動させられていたんだろう」

　霧切は振り返らずに、両腕で自分の身体を抱くようにして首を傾げた。

　しばらくして彼女は何かに気づいたように、刀を持っていない方の鎧武者に近づき、屈み込んだ。足元を調べているようだ。鎧武者は白い足袋(たび)の上に、藁(わら)で編んだわらじを履(は)いている。

「どうしたの？」

「見て、わらじが汚れているわ」

　わたしが覗き込むと、横から鑑識のおじさんも覗き込んできた。

「本当だ、泥がついているみたいだな」鑑識のおじさんはボールペンの先で、わらじの縁を持ち上げ、その裏を覗こうとする。「少し濡れているぞ。まるで雪の中を歩いてきたみたいだな」

「えっ、そんなまさか……」

　雪の中をうろつく鎧武者を想像して、鳥肌が立った。

　まさかこの鎧武者は本当に動くのでは？

　落ち武者の霊が目撃されるという噂も、この鎧武者のことだったのではないだろうか……

「結お姉さま、確かメジャーを持っていたはずよね」

「うん」わたしはリュックの中から巻き取り式のメジャーを取り出す。「使う？」

　霧切は肯くと、それを受け取って、早速わらじのサイズを測り始めた。

「26……26・５センチくらいかしら」

「鎧武者の足のサイズを測ってどうするの？」

「ちょっとした確認よ」

　霧切は立ち上がると、メジャーをわたしに返した。

「甲冑は一応全部こちらで預かることになるだろうな」鑑識のおじさんが云う。「胴には血痕も見受けられるし、詳しく調べる必要がある」

「その血は被害者のものでしたか？」

　わたしは尋ねる。

「DNA鑑定してみないとわからんが、血液型はABで被害者と一致した」

「そうですか……」

　やはりこの鎧武者が動き出して、被害者を襲ったとしか考えられない。わたしには今やありありと想像できる。冴(さ)え冴(ざ)えと光る刀を鞘から抜いた鎧武者が、被害者の背中に突き刺す様子が——

「警察は今のところどのような見解で捜査を進めていますか？」

「このままだと自殺ってことになるだろうな」

「じ、自殺？」
「状況からみて、誰か他の人間がこの部屋にいたとは思えない」
「でも背中を刺されて死んでいるんですよ？　短い包丁やナイフならともかく、日本刀で自分の背中を刺すことは不可能でしょう？」
「いいや、日本刀を何処かに固定すればいい。他人から襲われたように見せかけるため、刃物を固定して自分から刺さりにいくという手法は、偽装の常套手段だよ」
「何処かに固定……」
　あっ、ここにはおあつらえ向きのものがある。
　鎧武者だ。
　たとえば刀を持った鎧武者に、背中からぶつかりに行けば、日本刀で自殺することも可能ではないだろうか。
　けれどわたしはすぐにその考えを捨てる。
　これは『黒の挑戦』なのだ。
　自殺などあり得ない。
　あり得ない……？
　たとえばこの集まり自体が、そもそも『黒の挑戦』とは無関係ということはないだろうか。
「ねえ霧切ちゃん、もしかして――」
　話しかけようとしたが、すでに彼女は鎧武者に興味をなくしたのか、部屋の奥にある扉に向かっていた。
　扉を封鎖しているゴムバンドはそのままの状態だ。取っ手の下にサムターン錠があり、それを回せば内側から鍵をかけることも可能なようだが、犯人は何故かそれを回さず、ゴムだけで扉を封鎖した。このことが何か密室トリックと関係あるのだろうか。
　霧切は無言のまま、両開きの扉のうち、片方に両手を当てて、己のささやかな体重をかけて押す。
　扉を封印しているゴムが少しだけ伸びて、風が吹き込む程度に隙間ができた。
　扉の先は裏庭だ。真っ暗で何も見えない。
「手伝おうか」
　わたしは霧切の隣で、扉に背を預け、足のバネを利用して背中で押し開けようとした。すると意外とゴムが伸び、腕を差し入れることくらいはできそうなほど隙間が生じた。
「あれっ？　けっこう緩くない？」
「扉を封印するのに何故ゴムを使っているのか考える必要がありそうね」霧切は一度、扉から離れる。

「おそらくこうして力をかけて、押し開けた時にできる隙間にヒントがあると思うの。結お姉さま、今度は片方の扉だけではなくて、両方の扉を同時に押し開けてみましょう」
　観音開きの両扉を、同時に体重をかけて押す。
　すると扉の中心にできた隙間は、細身の人なら通り抜けられそうなほどの幅になった。もっとも、腰くらいの高さの位置にゴムバンドが張り渡されている状態なので、それをくぐってなおかつ細い隙間を抜ける必要があり、ちょっとしたこつがいりそうだけど……
「でもこれで一つはっきりしたね。密室には隙間があったんだ」
　開いた隙間にストッパーでも噛ませておけば、やすやすと出入りできそうだ。ゴムバンドによる厳重な密室に見せかけて、実は隙間のできるゆるゆるの密室だったのだ。
「でも外に足跡はなかったのよ」
「あ……そっか……」
　こちらの扉は裏庭に面しており、ここを出入りする際には必ず外を歩くことになる。しかし屍体発見時、中庭と裏庭、ともに人が歩いた痕跡は見受けられなかった。わたしたちがこの目で確認している。
「あ、でも！」わたしはふと思い当たって云う。「渡り廊下の方は？　あっちの扉のゴムが緩かったら……」
「扉を開ける際に、思いきり引いてやっとカッターを入れられる程度だったらしいから、人が出入りできるほど隙間ができたとは思えないわ」
「えー……じゃあ、やっぱり密室ってこと？　これは不可能犯罪なの？」
「どうかしら。不可能犯罪というのは結局のところ『不可能だと思わせる犯罪』のことよ。私たちがそう思ってしまうというだけのこと。けれど誰か一人でも『不可能ではない』と信じ続けることができれば、不可能犯罪という幻想は泡（あわ）のように消える。探偵である私たちは、たとえ最後の一人になっても、その役目を負わなければならないわ」
　霧切はさらりと云ってのけたが、彼女ほどの覚悟を持つことは、並大抵の探偵ではありえない。やはり生まれながらの探偵にして、人生のすべてが探偵であるという彼女にしか、到達できない境地だろう。
　あるいはそれこそが、わたしと彼女を隔（へだ）てる壁の正体なのかもしれない。
「ねえ、結お姉さま。ついでに外に出て調べてみましょう」
「……うん、そうだね」
　目の前の扉から外に出れば早いが、靴がないので一度玄関まで戻る必要がある。わたしたちは殺人現場をあとにして、渡り廊下から本館へ移動した。
　玄関のタタキには警察関係者のものと思われる革靴が大量に並んでいた。自分の靴を見つけ出す

のも一苦労だ。
　霧切が自分の靴を拾う前に、もともとあった来客者の五足の靴を拾い上げて、中を確認し始めた。
「何してるの？」
「靴のサイズを調べているのよ」

　宿木　28.5
　八鬼　27.5
　白州　26.5
　杜若　24.5
　水井山　22.0

「さっきから履物のサイズを気にしているけど、それって何かのヒントになるの？」
「そうね、犯人を追いつめるための数少ない取っ掛かりになるかもしれないわ」
　霧切はそう云ったけれど、わたしには何故そんなものがヒントになるのかまるでわからなかった。
　わたしたちは自分の靴を拾ったあと、現場には戻らずに、廊下を真っ直ぐ進んで、中庭に出る扉を開けた。すると肌を刺すような冷気とともに、粉雪が舞い込んできた。雪はずっと小降りのままだが、気温が低いので溶けずに着実に少しずつ積もっているようだ。
　わたしはリュックから懐中電灯を取り出してスイッチを押した。青白い光が雪の中に円を描く。
「寒い……霧切ちゃんもっとこっち」
　わたしは彼女の右腕を抱くようにしてくっつきながら、なんとか寒さをしのぎつつ雪の中を進んだ。
　中庭から、本館と剣道場の間にある細い隙間を通り抜ける。すでに複数の捜査関係者が行き来しているようだ。足跡がたくさん残されている。
　窓にはめられている格子の間から中を覗くと、剣道場の様子が窺えた。ただし電気が消えていたら、外からでは中の様子は見えなかっただろう。確か被害者が殺害された時、部屋の電気は消えていた。犯行を窓から目撃させないためだろうか。しかしそれでは犯人自身も、視界を奪われた状態で犯行に及ばなければならないけど……
　細い隙間を通り抜けると、今度は裏庭に出る。そこもやはり、捜査関係者のものと思しき足跡が複数入り乱れていた。だがこちらも、屍体発見直後はまっさらな状態だったことを確認している。
　一段と寒さが増す。風の音だけではなく、何処からか水の流れる音が聞こえてきた。裏庭の奥は鬱蒼とした竹林になっていて、水の音はそちらから聞こえる。

腰くらいの高さの柵（さく）を乗り越え、音に誘われるように竹林の中を進むと、目の前が急な崖になっていた。突然の奈落に、思わず足が竦んだ。

「危ない、うっかり落ちるところだった」

　谷底までは五、六メートルくらいの高さがあるだろうか。真下に光を投げかけると、底を流れる黒々とした川が見えた。かなり流れが速いようだ。落ちたらひとたまりもない。

　わたしたちは竹林を引き返し、再び柵を越える。

「結お姉さま……これ」

　霧切が何かに気づいたようだ。彼女は柵の横板の一部を指差している。わたしは明かりを向けた。

　板の上端に真新しい擦り傷があった。その周辺だけ、雪が削り落とされたようになっている。何かワイヤー状のものを引っかけたような痕跡だ。

「何かしら」

　霧切は顔を上げて、建物の方を見る。

　正面にちょうど、事件現場となった剣道場の入り口があった。

　裏庭に面したその扉は、さっきわたしたちが必死に内側から隙間を作っていた観音扉だ。今は閉じられている。なお扉は外開きだが、屋根と、地面より一段高いポーチが設置されているため、たとえ扉を開閉したとしても雪に痕跡を残すことはなかっただろう。けれどそこから一歩出て、本館と行き来すれば確実に足跡を残すことになる。

　わたしたちはいったん、剣道場入り口の屋根の下に移動する。そこから見て、右手側に本館。わたしたちが歩いてきた中庭はその奥にある。

　そして左手側に光を向けると、細い水路と水車小屋が見えた。

「わっ、すごい、水車だ」

　わたしは光の中に浮かび上がったレトロな風景に思わず声を上げた。今まで暗くてその存在に気づかなかった。

　水路を伝う水は竹林を抜けて谷底に落ちるようになっているようだ。けれど真冬のこの寒さの中、水は底の方で氷になっている。また水車は完全に沈黙し、分厚いつららを生やしていた。そのつららの太さから見て、水車は冬の間ずっと凍りついているのだろう。

「小屋の中を一応、調べてみるわ」

　霧切が風に目を細めながら云う。

「えっ……なんかあるの？　あそこに」

「わからないから、調べてみるの」

わたしたちはひと塊（かたまり）になって、水車小屋へ向かう。入り口は水路の向こうなので、小さな橋を渡る必要があった。といっても、水路はせいぜい幅が一メートルくらいなので、跳び越えられなくもないけれど。

ただでさえ深夜の暗闇の中、竹林のたもとに建つ茅葺（かやぶ）き屋根（やね）の水車小屋――いかにも何か出てきそうだ。

「小屋の中からいきなり殺し屋が飛び出してきたりしないよね……？」

「嫌なことを思い出させないで」

霧切は表情を変えずに云う。

水車小屋の古い木戸を開けた。

わたしは光を武器のように振るって、小屋の中を照らし出す。

水車の動力を利用した石臼が中央にある他は、スコップやほうきなど、庭を整備する道具が片隅にまとめられているだけで、特に危険性を感じるようなものは何もない。

ただしその中に気になるものが一つあった。

巨大なバネみたいなそれは、自動車のタイヤ交換の際などに、車を持ち上げるために使うジャッキだった。

霧切がそれを隅から引っ張り出す。彼女の力でも充分に持ち運べる重さだ。通常それは、車のトランクなどに積んで備えておくものだが、たとえ小屋に置いてあったとしても不審とは云えない。

「何か閃（ひらめ）いたの？　霧切ちゃん」

「ええ、これなら使えそうね」

彼女は片手にそれを提げたまま、小屋の外に出た。

次に水車を調べ始める。

「やっぱ気になるよね」わたしは冷えた指先に息を吐いて温めながら、霧切に寄り添う。「雪と水車と日本刀といえば、物理トリックの三大要素だものね」

「……そう」霧切は興味なさそうに云う。「それより見て、大きなつらら」

「取ってほしい？　じゃあ一番大きなやつ取ってあげようか」

「いらない」

「どうして？　わたしは二番目に大きなやつでいいから、それでチャンバラしようよ」

「だめ」霧切は首を振る。「そのつららは重要な証拠になるわ」

「えっ……つららが？」

「そうよ」

霧切はいつもの得意顔をする。きっと自分では感情を押し殺しているつもりだろうけど、しっかり表に

出ているよ。
「霧切ちゃん、もしかして密室の謎が解けたの？」
「ええ。答えは歴然としているわ」
　彼女は涼しい顔で答える。
　彼女と同じものを見てきたはずなのに、わたしには何が何やらさっぱりわからない。探偵役はわたしなのに……
「つららをよく見て。横一直線にヒビみたいな白い線が氷の中まで走っているのがわかるでしょう？」
「あ、本当だ」
「これがトリックの動かぬ証拠よ」
「……そ、そうなの？」
　それはたとえば、つららを一度真横に切断し、あとから切断面同士をくっつけて元に戻したら、ちょうどこの状態になるのではないか。
　しかしそれが何を意味するのか、わたしにはわからない。この状態ではどうせ水車は動かないだろうし、水路に水が流れた様子もない。
　わたしたちはとりあえず寒さから逃れるために、裏庭から中庭に抜けて、屋敷の中に戻った。幽霊屋敷も暖かい場所とはいえないが、外にいるよりはずっとましだ。わたしたちは靴を両手に提げて、廊下を移動する。
「密室トリック自体は片づいたけれど、犯人を正確に絞り込むには、かなり時間がかかりそう」
「どれくらい？」
「一人一人から証言を聞いて回って……情報を精査するのに三日、あるいはもっと……」
「それじゃ時間が足りないよ！」
「もちろん、そんなに時間をかけてはいられないわ。できることならロジックだけで戦いたいところだけど、制限時間がある以上、なりふり構っていられないわね」
　霧切は凜々しい目もとを細めて云った。

　宿木、八鬼、杜若、水井山の四人の他に、刑事数名が殺人現場の剣道場に集められた。
　時刻はすでに午前二時。集まっている人たちの顔にはかなり疲労の色が出ているが、その中で唯一、霧切はいつもと変わらない冷静な表情を保っていた。
「それで……龍造寺先生はなんと云っていたのですか？」
　刑事が早速下手（したて）に出て説明を乞（こ）う。

あくまでわたしと霧切は龍造寺のメッセンジャーとしてこの場に立っている。
　霧切が口を開いた。
「この事件は複雑そうに見えて、実際はごく単純な密室殺人だったわ」
「それは龍造寺先生の意見ですか？　それとも君の？」
　刑事の疑問を無視して、霧切は説明を続ける。
「二つの扉はゴムバンドで内側から封印が施され、ほとんど開かないようになっていた。大人の男が全力で引いて少し隙間ができるくらいだったわね」
「ええ、その隙間からカッターでゴムバンドを切断してやっと中に入れたのです」
　宿木が云った。
「問題は、何故犯人はゴムバンドを使ったのかということ。頑丈なチェーンやワイヤーなどを使わず、ゴムバンドを用いた理由は？　それを考えれば、密室の謎は簡単に解けるわ」
「ふむ……では早速実演してみてください」
　刑事たちが霧切に場を預けるように、扉の傍から離れていく。霧切の手には、一度切断されたゴムバンドが繋ぎ直された状態で握られていた。
「この密室は、目撃者たちに扉が堅く封鎖されていると思い込ませることで、より完璧な密室となるの。でも実際には、ゴムという素材を生かした、とても緩い密室だった」
「緩い密室――ですか」
　刑事たちは肯きながら、手帳に鉛筆を走らせている。
　一方、容疑者である四人の客たちは、一言も喋らないまま、霧切の行動を見守っていた。
「まず犯人は午後三時以降、いずれかの時刻に、この剣道場に白州寸鉄を呼び出した。どんな誘い文句を使ったかはわからないけれど、犯人は白州さんと二人きりになったあと、睡眠薬か、麻酔の効果があるものを白州さんに与えた。方法は想像するしかないわ。食べ物や飲み物に混ぜて渡したのかもしれないし、麻薬や笑気ガスのようなものを嗅がせたのかもしれない。とにかく白州さんの意識をしばらく奪っておくことが必要だった」
「そう都合よくいくのか？」八鬼が腕組みしながら云う。「だいたい、剣道場で二人きりになった時点で、殺しちまえばいいじゃねーか」
「それでは自分も疑われる可能性が出てくる。あくまで自分が疑われないようにするために、トリックを使うのよ」
「ロックだかトリックだか知らねーけど、なんなんだよそれ」
「つまりこうよ」霧切は身体の後ろで腕を組んで、部屋の奥にある扉の方に顔を向ける。「まず準備とし

て、裏庭に通じる扉をゴムバンドで封鎖しておく。封鎖するだけなら鍵をかければいいけれど、あえてゴムバンドを使ったのは、もう一つの扉にゴムバンドを使っても違和感がないようにするため。つまり密室に統一感を持たせるため、と云えるかしら」
「重要なのは、渡り廊下側のゴムバンドなんだね？」
　わたしが尋ねると、霧切は目線だけをこちらに向けて肯いた。
「そして次に、二体の鎧武者を部屋の中央に配置しておく。これはダミーね。被害者が鎧武者を使って自殺したのではないか、と警察に疑わせるためのものよ。実際、警察は自殺説に傾きつつあったわ」
「状況からみて、そう推察せざるを得なかった」
　刑事の一人が苦々しい顔で云う。
「それこそ犯人の思惑通りだわ。密室が密室である以上、容疑者の四人は誰も犯行を実行できない。そして第三者の存在もあり得ない。そうなったら、自殺を疑うしかなくなる。そして自殺なら、なんとか可能だったと思えるような状況だった」
「自殺では生命保険が下りないから、他殺を装(よそお)うというケースは確かにあるが……死ぬ当人が自ら偽装を行なうのは珍しい。だが、今回の事件の本質はそういうことではないんだろう？」
「ええ。そもそも被害者本人が、『他殺に見せかけた自殺』をするなら、密室である必要はなかったと思うわ。むしろ密室ではない方が、他殺の疑いを強めてくれるでしょう。残念ながら今回の事件は『他殺に見せかけた自殺』ではない」
「それならやっぱり密室殺人なんだね？」わたしは尋ねる。「そうすると犯行は誰にも不可能だったように思えるけど……」
「いいえ。この中で唯一、犯行が可能だった人物がいるわ」
　霧切の言葉に反応し、刑事たちは四人の容疑者たちの顔色を窺う。
　宿木、八鬼、杜若、水井山の四人はそれぞれ狼狽(ろうばい)した様子でお互いに顔を見合わせた。
「何も難しいことはないわ。ただ緩い密室を利用すればいいだけなの。まず犯人は、午後十時から十一時の間に、この剣道場で気絶させておいた被害者の背中を刀で突き刺す。その際に、わざと血痕を鎧に付着させた。これは自殺説へ導くための嘘のヒント。そして次に、渡り廊下に通じる扉に、このジャッキを噛ませたうえで、ドアノブと壁のフックにゴムを引っかけて、何重にもぐるぐる巻きにする」
　霧切は水車小屋で見つけてきたジャッキを横倒しにして、薄く開いた扉の隙間に差し込んだ。扉の隙間は、こぶし一つ分くらいだろうか。
「この段階で、ゴムはできる限りきつくしておく。それができたら、次にジャッキを使って扉の隙間を広げていくのよ」

ジャッキのハンドルを操作すると、扉の隙間がゆっくりと開いていった。ゴムは細く引き伸ばされていくが、かろうじて千切（ちぎ）れずに残っている。
　扉がかなり開いたところで、霧切はハンドルを止めた。
「これくらいが限界かしら」
「しかしこの隙間では、通り抜けられるのはせいぜい子供くらいですな……」
　霧切なら通り抜けられるだろう。
　わたしはちょっと無理な気がする。
　四人の容疑者たちの中で、通り抜けられそうなのは……
　たった一人。
「水井山さん、この隙間を通り抜けてみてください」
　刑事が促すように彼女の肘を掴むと、彼女は悲鳴に近い声を上げて、首を振った。
「ち、違います、わたくしではありません！」
「なあに、ただの実験ですよ。試しに通り抜けてみてくださいよ」
「こんなのでたらめです」水井山は取り乱した様子で、霧切に詰め寄った。「わたくしをはめようというのですか？　たとえジャッキで密室の外へ出られるのがわたくし一人だったとしても、事件が起きた時には、わたくしは皆さんと一緒に廊下にいたのですよ？　わたくしが犯人というのなら、事件があった時に室内から聞こえてきた物音はなんだったのです？」
「物音なんてどうにでもなるわ」
　霧切はわたしに合図する。わたしは事前に云われていた通り、自分のケータイである番号にかけた。
　すると鎧武者の足元辺りから、誰かのケータイが震える音が聞こえてきた。
「たとえばこのように、携帯電話を使って、室内にある別の携帯電話にかければ、着信音を鳴らすことができるわ。着信音に例の物音を設定しておけば、いかにも扉越しにリアルタイムで殺人が起きているように装うこともできたはずよ。携帯電話は屍体発見の混乱に乗じて回収しておけばいい」
「そ、そんな……わたくしはやっていません！」
「続きは警察署で伺いましょう」
　二人の刑事が水井山の両腕を捕らえた。
　そのまま部屋の外へ連れ出す。
　宿木と八鬼と杜若の三人は、まだ状況が飲み込めていない様子で、扉の向こうに消えていく水井山の背中を呆然と見つめていた。
「まさかあの女が犯人だったとは……」八鬼がうろたえた様子で云う。「まったくそんなそぶり見せなかった

じゃねーかよ。これだからこえーな、女は」
　こうして武田幽霊屋敷の密室殺人事件は、とりあえず終結した。

　まもなく、屋敷から全員退去せよとの警察命令が下り、わたしたちはぞろぞろと現場をあとにした。門に見張りの警察官を二人残し、あとは刑事たちも全員退去するらしい。
　帰りの交通手段のない者は警察車両を利用することになり、結果的にわたしと霧切の他に、八鬼がパトカーにそれぞれ分乗した。けっして警察署への任意同行ではないと説明があったが、八鬼は動揺したせいか口数が多くなっていた。
「ねえ、霧切ちゃん」わたしたちはパトカーの後部座席に並んで腰掛けていた。「本当に水井山さんが犯人なの？　なんかいろいろ説明が欠けていたような気がするんだけど……」
「彼女は今頃、警察から説明を受けて解放されていると思うわ」
「えっ？」
「警察の人たちに一芝居（ひとしばい）打つように云っておいたのよ。彼女は犯人ではないわ。ジャッキを使った密室の抜け道は、犯人によってあらかじめ用意されていた罠だと思う。探偵役を安易な解答に飛びつかせるためのね」
　わたしだったら間違いなく、その答えに飛びついていただろう。というか、本来の探偵役であるわたしが、その罠に到達する前に解決編を迎えてしまった。今後こんな調子で大丈夫だろうか……
「あまり主義ではないけれど、こちらも罠を用意させてもらったわ。充分な論理と証拠を用意している時間がない以上、多少は強引な手もやむを得ないものね」
　まもなくしてパトカーは道を引き返し始めた。

　午前三時――
　無人となった武田幽霊屋敷は、いよいよ闇に溶け込み、幽霊たちの集う場所になりつつあった。生きた者の気配を失ったことで、冷気の淀みが部屋から廊下へと溢（あふ）れ出し、屋敷全体を包み込もうとしている。
　そして今、何者かが一人、闇をかき分けるようにして屋敷へと近づこうとしていた。しかし闇はけっして、その人物を拒絶しなかった。何故ならその人物もまた闇の住人だったからだ。
　闇をまとうその人物は、屋敷には入らずに、崖にほど近い柵を乗り越え、竹林を進み始めた。そこなら足跡がつきにくいと考えたのだろうか。あるいは見張りの警官がいることを警戒したのかもしれない。
　その人物はようやく、屋敷の裏庭にたどりついた。

目的のものはそこにある。
その人物はゆっくりと水車に近づいた。
そして何処からともなく取りだしたバールのようなものを振り上げる――

「そこまでよ」

少女の声とともに、竹林に隠されていた投光機が一斉に光を投げかける。
その人物がまとっていた闇はあっさりと振り払われた。
光の中にさらけ出された人物は――杜若こりす。
彼女はまぶしそうに投光器を睨みつける。そして額に手をかざして、ようやく光の中にいる少女の姿を捉えた。
両手を腰に当てて立つ霧切響子。
「なんなの……これは？」
「警察に協力してもらったのよ」霧切は竹林にひそんでいる刑事たちを片手で示す。「きっと来ると思ったわ。現場に残るたった一つの痕跡を消すために――」
「何を云っているのかしら、この子は」
杜若は首を傾げて云う。
「ではあなたはこの時間に、何をしにこの場所に戻ってきたのか説明できるのかしら」
「ピアスを片方なくしたの。高価なものだから捜しに来たの。それがなんの問題なのかしら」
杜若はすらすらと受け答えする。用意していた答えなのか、それともとっさに思いついたのか。どちらにしても、あの間延びした喋り方をする軽薄そうな女子の雰囲気は消え去り、むしろ利発さを感じさせる女性になっている。
「その手に持っているものは？」
「ピアスが手の届かないところに落ちてしまうことだってあるでしょ。その時のために、一応持ってきただけよ」
「それは何かを壊す道具のように見えるけど」霧切は腰に手を当てたまま続ける。「幾らごまかしても無駄よ。あなたがやったことは全部わかっているわ」
「なんのことかしら」
「白州寸鉄さんを殺害した犯人はあなたね」
「何を云い出すのかと思ったら……」杜若は呆れたように首を左右に振る。「警察の皆さんも、こんな

子供の云うことを真に受けて、揃いも揃って気難しい顔を並べているわけ？　犯人はあの水井山って人だったじゃない。ゴムバンドで封印された扉を出入りできたのは彼女だけなんでしょう？」
「ええ、犯人の思惑では、そういうことになっているわ。おそらく犯人は、客として集める人物のデータを探偵図書館のファイルで調べて、ゴムバンドの密室から脱出できる小柄な探偵を一人だけ、意図的に紛れ込ませておいたのね。目的は罪をなすりつけるため。でも水井山さんを選んだのは失敗だったのではないかしら。確かに体格的に彼女は、あの細い隙間を通り抜けられそうだったけれど、実際には不可能だったと思うわ」
「不可能？」
　わたしはついつい尋ねていた。
　ちなみにわたしは刑事たちと一緒に投光機の陰に隠れて、タイミングを見計らっていた。
「服装の問題よ。彼女は着物を着ていたわね。あの服装では動きが制限されるので、ぎりぎりの隙間を抜けるのは無理だと思うわ。それにまず、帯が引っかかってしまうでしょう。ファイル上のデータでは彼女は適合していたけれど、まさか和服で来るとは考えてもいなかったのね」
「そ、そんなのゴムの伸ばし方次第でしょ！」杜若は反論する。「着物でもなんでも、通れるだけジャッキで扉を開けばいいじゃん」
「それを云ったら誰でもいいことになるわ。自分が通れるだけジャッキを動かせばいい」
「だから、それじゃゴムが切れちゃうでしょ！」
「切れるかどうかはやってみなければわからない。結局のところ答えは出せないわ。容疑者全員、通れるかもしれないし、通れないかもしれない」
「だったら私だって通れないかもしれないわけじゃん？　それなのに私が犯人だって指差すわけ？」
「あなたが犯人であることを示す証拠は、別なところにあるわ」
「何よ、そんなのあるわけがない」
「それなら訊くけれど、昨日の午後三時以降、あなたは裏庭で何をしていたのかしら？」
「う、裏庭……？　なんで私がそんなところにいたと思うの？　でたらめ云ってるんじゃないわよ」
「いいえ、でたらめではないわ。私は知っているのよ。あなたが鎧武者のわらじを履いて、裏庭をうろついていたのを……」
　霧切の発言に、杜若は言葉を失っていた。
「わらじが汚れていたのは……杜若さんが履いて外に出たからなの？」
　わたしは尋ねる。
「なんのことかしら。わらじがどうしたって？」

「あなたは密室殺人を可能にするため、ある仕掛けを施す必要があった。その仕掛けを施すために裏庭に出なければならなかったけれど、外に出る靴がなかった。けれどあなたには一刻も早く準備を済ませておかなければならない理由があったため、やむをえずわらじを履いて外に出た」

「そんなに急ぐ理由って？」

「雪よ。雪が降っている間なら、裏庭に足跡を残しても、いずれ積雪によって覆い隠される。あなたが作った密室トリックはそれが前提になっていたから、できる限り早く準備しておく必要があったのよ。雪がやまないうちに」

　事件の発生はおよそ午後十一時。その時点で足跡らしきものはいっさいなかった。もし霧切の云うように、トリックの準備が裏庭で行なわれたのだとしたら、事件発生の数時間前には終わっていただろう。昨日はずっと小雪が降り続いていたから、多少の痕跡なら、数時間で雪が覆い隠してくれる。

「あなたは白州さんを呼び出して気絶させたあとに、手元に靴がないことに気づいた。普通に考えれば、玄関まで靴を取りに行って戻るか、あるいは玄関で靴を履いてそのまま外に出て裏庭を目指すか、どちらかを選択すればいい。けれど運が悪いことに、そのどちらもできなかった。何故なら、玄関付近に常に宿木さんがいたからよ」

　確か宿木は、玄関から廊下にかけて壁にかけられている水墨画などを鑑定するため、下見をしていたと云っていた。

「何もやましいことがなければ、彼の横を通り過ぎて靴を拾えばいい話だけれど、実際はそういうわけにもいかなかった。『靴を持って何処へ行くのか』と宿木に疑われたら、殺人計画すべてが台無しになってしまうかもしれない。宿木さんがいなくなるまでしばらく待つという選択もできなかった。雪がやんでしまうかもしれないという危惧（きぐ）があなたを急がせたのね」

　霧切は淡々と説明を進める。

　杜若は反論の言葉を差し挟むタイミングを狙っているようだったが、今のところ沈黙していた。

「靴がない、でも外に出なければならない。こういう場合、どうすべきかしら」

「裸足（はだし）で出る」

　わたしは云った。

「もちろんそうするしかないわ。けれどこの真冬のさなか、雪の上に裸足で出ていくのはつらいでしょうね」

「でも我慢できないこともないんじゃない？　何時間もそのままってわけじゃないんでしょ？　さっさと用事を済ませてしまえば」

「我慢するのはいいけれど、それよりもっと心理的な理由から、裸足で行動するのは避けたかったと思うわ」

「心理的な理由？」
「もし雪が足跡を完全に覆い隠してくれなかったら？　雪上に残されているのは、他の誰でもない、自分の足形よ。これでは絶対に云い逃れできないわ。そうならないように、せめて何か履物を履いた方がいいと考えるでしょう。ここまでの論理の筋道に異論はないかしら？」
　誰からも声は上がらなかった。
「そして結論はすでに云ったけど——あなたは鎧武者が身に着けていたわらじに気づいて、それを履くことにしたのよ」
「待ってよ、どうしてそれが私ってことになるの？」杜若が狙い澄ましたかのように反論の声を上げた。
「今まであんたが積み上げてきた論理の中に、わらじを履いたのが私だと特定する根拠はなかったようだけど？」
「靴のサイズを調べたわ。わらじは26.5センチ。ただし基本的にわらじにはサイズなんてあってないようなもので、むしろ自分の足のサイズより小さめのわらじを、指がはみ出した状態で履くのが普通らしいわね」
「よくそんなこと知ってるね、霧切ちゃん。わたしも知らなかったよ」
「日本の文化や風習には以前から興味があるのよ」彼女は遠くを見るような目をして云う。「その観点から見ると、条件に適合するのは、わらじのサイズより足のサイズが大きな八鬼さんと宿木さんだけ」
「じゃ、じゃあ、そいつらのどっちかがわらじを履いたってことじゃないの！」
　杜若が声を上げる。
「いいえ、違うわ。もし彼らのどちらかが犯人だったら、そのわらじを履くのは避けていたはずよ。さっきも云ったように、わらじからはみ出した自分の足が、はっきりと雪の上に残るようなことは、心理的に避けたかったはず。つまりそれを履いたのは、わらじから足がはみ出さない人」
「やっぱり水井山って女じゃない！」
「彼女の足のサイズは22センチ。逆に小さすぎてあのわらじは履けないわ」
「それじゃあ、残されたのは……」
　杜若と白州。
　けれど白州は被害者であり、ここでは除外してもいいだろう。
　わたしたちの目は、青ざめた杜若に集まる。
　彼女は鎧武者のわらじを履いて外に出たあと、トリックの準備を終えてから剣道場に戻り、わらじをきれいにして元に戻しただろう。けれど汚れは充分には落ち切らず、証拠を残す結果になった。
「でもそのあとは……？」わたしは尋ねる。「渡り廊下に出る扉はもうゴムバンドで封印したあとでしょ

う？　靴がないから、裏庭を通って本館に戻ることもできないし……」
「トリックの準備をするついでに、わらじを履いたまま竹林を抜けて一度駐車場まで戻ったのではないかしら。あの軽自動車は杜若さんのものでしょう？　ハイヒールでは運転しづらいから、運転用の靴を用意してあったと思うわ。帰りはその靴を使えばいい」
　……普通なら見過ごしてしまいそうなことまで彼女はよく覚えている。さすがだ。
「な、な、何がわらじよ！　そんなわけのわからないもので犯人扱いなんてひどすぎない？　それに『心理的に避けた』とか『小さすぎて履けない』とか、本当にそう云えるの？　絶対？」
「絶対ではないわ。だからこうして、わざわざ警察の力を借りて、あなたを罠にかけたのよ。もしここに誰も現れなかったら、私は敗北宣言をするしかなかった」
「だから私はなくしたピアスを捜しに……」
「それは嘘よ。あなたはトリックの痕跡を壊しに来た」霧切はまっすぐに杜若を指差す。「あなたはあの時、密室の外にいながら、室内にいる白州さんを殺害した。この裏庭に張り巡らしたトリックを使ってね。その痕跡が、水車のつららに残されている」
　杜若は言葉を失って、奥歯を噛んでいる。
「一体、どういうトリックなの？」わたしは尋ねる。「杜若さんはわたしたちと一緒に廊下にいたんだよ？　まさかリモコンで鎧武者を操るとか？」
「残念！」杜若が急に元気を取り戻したように云う。「私たちが部屋に入った時点で、鎧の中は空っぽだったわ。そんな怪しい装置がなかったことは確認済みでしょ？」
「リモートコントロールなんてたいそうなものはいらないわ」霧切が云う。「必要なのは、昔ながらの糸と水車と日本刀よ」
　水車？
　動かない水車がなんの役に立つというのだろう。
「順番に説明するわ。まず糸を用意する。糸といっても、丈夫なワイヤーがいいわ。それを凶器となる日本刀の鍔（つば）に通す。鍔には通常、刀身（とうしん）を入れる中心の穴の他に、左右に一つずつ櫃（ひつ）と呼ばれる穴が開いているわ。穴の利用目的は左右でも違って色々あるのだけれど、ちょうどワイヤーを通すのに便利だということだけ知っておけばいいわ」
　実際に警察が確認したところ、凶器に用いられた刀の鍔にも、二つの櫃孔（ひつあな）が存在した。
「で？　あなたの説明のおかげで、ここにいる人たちは全員、刀に糸を通すやり方を勉強できたけど、それがなんになるの？」
「刀に通したワイヤーの両端のうち、片方には重しとなるようなものを結びつける。重ければ重いほどい

いし、それが水に浮くならなおさらいい。そう考えると、薪（まき）とか丸太みたいな木材が考えられるわ」

　そのへんを探せばちょうどよさそうな木材はいくらでも見つかりそうだ。あるいは竹を切断して使ってもいいかもしれない。

「ワイヤーのもう一方は輪にしておくだけ。これで準備はできたわ」

　その奇妙な凶器をどうするのか……

　わたしにはまだ想像もつかない。

「まずワイヤーの端に作った輪を、水車から垂（た）れ下がっているつららに通すのよ。このつららはつい最近できたような貧弱なものではなくて、冬を通して少しずつ太くなっていったような頑丈なもので、ちょっと叩いた程度では折れないくらいでなければならないわ」

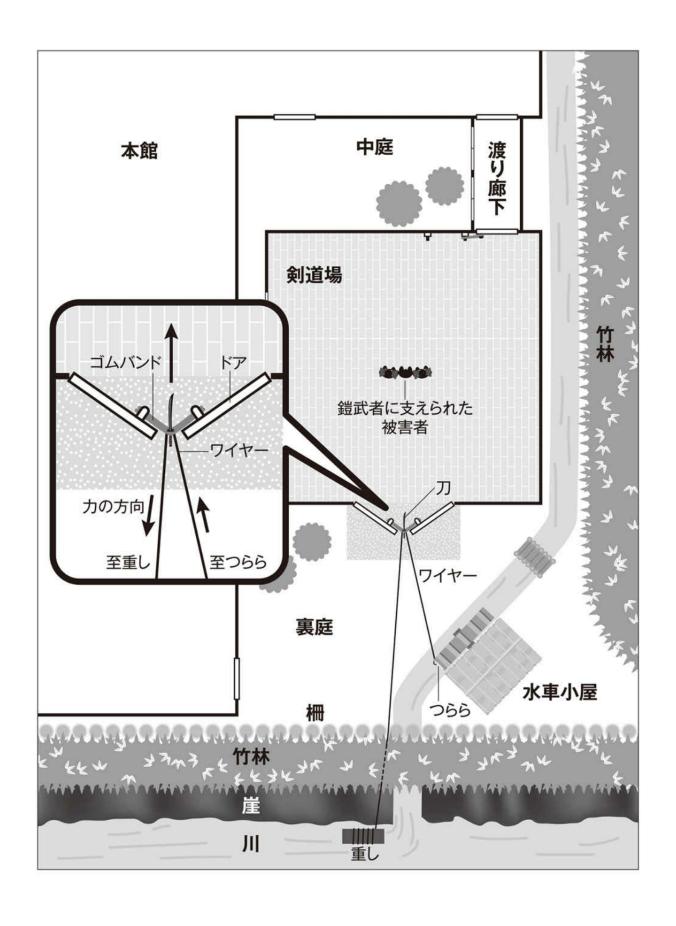
「そのあとは？」

「次はちょっとこつが必要かもしれないわね。まず裏庭に面した観音扉を開ける。この扉の内側にはすでにゴムバンドが設置されているわ。大きく開いたところで、扉が閉まらないようにストッパーを噛ませておく。もしかしたらその時にジャッキを使ったかもしれないわ。そして凶器となる日本刀を、ゴムバンドにあてがう。鍔がゴムバンドを受け止めるのにちょうどいいわね。イメージとしては、スリングショットに近いかしら。あるいは刀を矢に見立てた弓ね」

　だんだんと霧切の説明の結末がわたしにも見えてきた。

「最後に、ワイヤーのもう片端だけど、これは裏庭を通って柵を越えて、竹林よりさらに奥、谷底の目の前まで延長しておく。さっき云った重しは、そこでつければいいわ。無事ワイヤーに重しをつけ終わったら、それを谷底に蹴り落とす。すると重しは川に落ちて急流にもまれ、ワイヤーに対し引っ張る力を生み出し続ける。その力はそのまま、刀の矢を引き続ける力になっているわ。けれどすぐに矢が放たれることはない。何故ならワイヤーの先で、つららがストッパーになっているから」

　ようやく全体図が頭に思い描けるようになった。

本館
中庭
渡り廊下
剣道場
竹林
ゴムバンド
ドア
ワイヤー
力の方向
至重し
至つらら
鎧武者に支えられた
被害者
刀
ワイヤー
裏庭
水車小屋
柵
つらら
竹林
崖
川
重し

扉とゴムバンドはたとえるなら弓で、そこには刀の矢が番(つが)えられている。その矢を引くのが、ワイヤーの先の重し。つららは矢がすぐに発射されないようにセットされた時限装置といえるだろうか。

「この時点で、扉に嚙ませていたジャッキは外しても大丈夫だと思うわ。刀を引く力が、そのまま扉を引く力になっているから」

こうして水車から剣道場、そして裏庭から崖下にかけて、ワイヤーを張り巡らせた装置が出来上がった。

「つららに結わえられている輪には、終始引かれる力が働いて、少しずつ氷を溶かしていく。氷には圧力で溶けるという性質があるわ。けれどワイヤーがつららをすぐに真っ二つに切断することはない。ワイヤーが切断した箇所はすぐに凍って癒着し、ワイヤーはほとんど氷の中に囚われるようにして、少しずつ端へと移動していく。やがてワイヤーがつららから解放された時——ついに刀を留めておく力が失われ、ゴムバンドの反発力が凶器を飛ばす」

わたしたちが扉の外で、室内の様子を窺っている頃、刀は発射される時をずっと待っていたのだ。

「でも……どうやって狙いをつけるの？」わたしはふと思いついて尋ねる。「そう都合よく被害者に刀が刺さるのかな」

「そこで鎧武者が使われたのよ。あの二体の甲冑は、ただ幽霊屋敷の殺人を演出するためだけの道具だったのではないわ」

「……どういうこと？」

「鎧武者は部屋の中央近くに、左右に並んで立っていたでしょう？　そして被害者はその目の前に倒れていた。では少し時間を巻き戻して、被害者がまだ生きている時に、現場がどういう状況だったのか想像してみて。ねえ、結お姉さま。ここまで云えばわかるでしょう？」

「あっ……もしかして」

鎧武者は二体とも、両肘を曲げるような格好をしていた。被害者が意識を失った状態であれば、この二体に被害者の両脇を抱えさせて、強制的に立たせておくことができたのではないだろうか。

「鎧武者は的を固定しておく支えだったんだね」

「その通りよ。甲冑に血痕が飛び散っていたのも、鎧武者が被害者を支えていたからでしょうね」

おそらく被害者は刀が刺さった時に、衝撃で前のめりに倒れただろう。

その結果、わたしたちが目撃した殺人現場が完成する。

刀を発射する弓になっていた観音扉は、ゴムの作用によって自動的に閉じられる。

その扉は、密室の構成要素の一つでありながら、殺人のための仕掛けの一つでもあったのだ。

「ちなみに裏庭に張り巡らされていたワイヤーは、崖下の重しと一緒に流されてしまったでしょうね。下流

を捜索しても、永遠に見つからないかもしれない。それから雪上にワイヤーを引きずったような跡が残されていた可能性もあるけれど、すでに雪で覆い隠されてしまった。柵に残された痕跡は、雪で覆われてしまえば他の無数の傷と区別なんかつかない。唯一、処理しなければならない痕跡は、つららを横断したワイヤーの跡だけ」

　霧切は両腕で自分の身体を抱くようにしながら、ゆっくりと杜若へと近づく。

「犯人はきっと、その証拠を壊しに来るだろうと思ったわ。だから犯人の思惑通り、水井山さんを犯人として指摘しておいた。そうすれば安心して、ここに姿を現すはずだから」

　杜若は肩を落として項垂（うなだ）れている。

　もはや完全に勝負はついたようだ。

「あんた一体なんなの？　探偵役はあっちの五月雨結って子でしょ？　あの子に雇われた探偵？　それとも本当に龍造寺月下の部下なの？」

　杜若は俯いたまま云う。

「私が何者であれ……あなたはもう終わりよ」

「終わり？」

　杜若はそう呟いたあと、ゆっくりと顔を上げて、亡霊のごとく落ちくぼんだ目で霧切を見つめた。

　そしてゆっくりと、右手に持っていたバールのようなものを振り上げ……

「だめ！」

　わたしは雪の中を駆け出し、杜若と霧切の間に立ち塞がった。

　杜若の腕は頭上で止まっている。

「探偵役を傷つけるのはルール違反です！」

　わたしは両手を広げて忠告する。

「……ばっかじゃないの？」杜若は笑い飛ばすように云った。「どうせゲームに負けるんだから、今さらルール違反を恐れると思う？」

「う……云われてみれば……」

「まあでも、あんたを殴ったところで、やつあたりにしかなんないわね」杜若はため息交じりに云って、バールのようなものをその場に投げ捨てた。「ぶっちゃけ、最初からゲームの勝敗なんてどうでもよかったし。負け惜しみじゃないよ？　復讐さえ果たせればそれでよかったんだ」

「本当に復讐しかなかったんですか？　他に選ぶべき道は──」

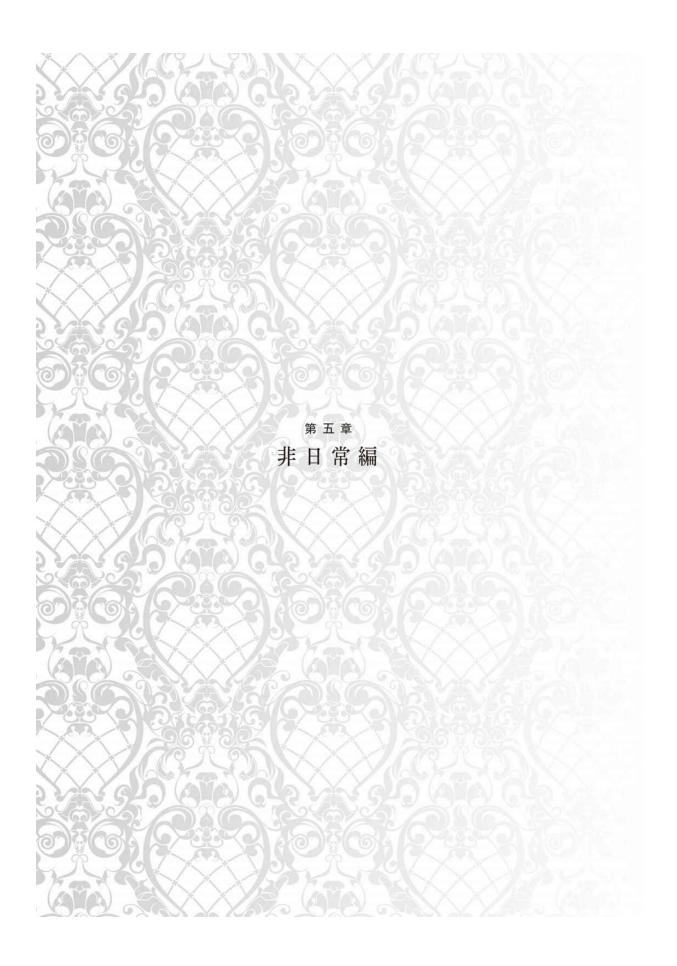
「聞こえるのよ」杜若はわたしの言葉を遮って、ほとんど叫ぶように云う。「扉の向こうから聞こえるの。どんな扉でも、閉じた瞬間に、その向こうから必ず聞こえてくるの。熱い、助けてって……私に助けを求め

る声が……」
「熱い？　助けて……？」
「八年前の山岳登山鉄道のトンネル火災事故、覚えているかしら。それなりにニュースになったと思うけど。事故そのものは電機系のショートが原因だった。でも避難の際に、ある男が火災から逃れるために連絡扉を閉じてしまった。逃げ遅れた犠牲者二十八名。その中に私の家族がいたわ。私は家族より早く外に出られたから助かった。でもあの男が、私のすぐうしろで連絡扉を閉じるのを見たの。助かるためにはそうするしかないって云って……扉の向こうにはまだたくさんの人がいたのに……」
　そのニュースはおぼろげに記憶に残っている。
　乗客の一人が避難通路の連絡扉を閉じたことで、逃げ遅れた人たちが火に呑まれて亡くなったという。
　一方で、連絡扉を閉じたことで煙が遮断され、二百数十名の乗客が無事に逃げることができたとされる証言もある。
　扉を閉じた乗客が誰だったのか、当時のマスコミや警察は最後まで絞り込むことができなかった。むしろ世間は、犯人探しを避けようとする論調に落ち着いていた。扉を閉じた人間を罪に問えるのか？　その答えを出せる者が、まして外野にいるはずもなかった。
「それで……その人を殺して、あなたは救われたんですか？」
「わからないわ」杜若は自嘲気味に笑って、自分の手を見つめた。「正直なところ、殺した実感がないの。指示通りに物を置いたり、糸を張ったりしただけで、本当にこの手で殺したとは思えないのよ。あの男の屍体を見た時、喜びや達成感よりも、戸惑いの方が大きかった。本当は私以外の人間が殺してくれたんじゃないかと思ったくらい。今もまだ、悪い夢の中にいるみたい……」
「それじゃあ一体なんのための殺人だったんですか」
「それでも救いになったと信じるしかないわ。これで扉の向こうの人たちも救われたはずよ」杜若は穏やかな笑みを浮かべた。「きっと扉を閉じても、もう助けを求める声は聞こえない……彼らは私の救済によって鎮められたのよ」
　彼女もまた、悲惨な運命と戦ってきた人間の一人なのだろう。犯罪被害者救済委員会は、彼女のように過去に囚われ続けている者に目をつける。
「１億５１００万、払うあてはあるの？」
　霧切が尋ねる。
「あるわけないでしょ。あったらこんな馬鹿げたこと最初からやらないって」
「それなら忠告するわ」霧切は杜若の耳元に口を寄せる。「大人しく警察に捕まって。ここにいる警察

官なら無事にあなたを警察署まで連れていってくれるはずよ」
「何を云っているの？」
「あなたはすでに犯罪被害者救済委員会から狙われる立場になっているわ。彼らはどんな手を使ってでも１億５１００万を回収しようとする。もちろんあなたを殺してでも」
「そんな……」杜若は唇を震わせる。「どうにかならない？　あんたたち、あいつらのことに詳しいんでしょう？　私を助けてよ！」
「勘違いしないで、あなたはもう一線を越えてしまった。私から見れば、あなたもあちら側の人間よ」
　霧切は風で顔にかかる髪をそのままに、真っ暗な夜の方を向いた。
「そんな……」
「できることなら犯罪者になる前に助けを求めてほしかった」
「ちょっと、ねえ！　私を救ってよ！」
　いつの間にか周囲を刑事たちが取り囲んでいた。杜若は彼らに連れられ、パトカーに乗り込む。たぶんパトカーは本物だし、刑事たちも本物だ。彼らが初動捜査に来ていたのをわたしは見ている。
　杜若を乗せたパトカーのドアが閉じられる。
　その時、杜若の表情が凍りついた。
　彼女は耳を塞ぎ、恐慌をきたしたように目を見開いて、首を左右に振り始めた。
　怯えた子供みたいにイヤイヤをしている。
　彼女に救いは訪れたのか――？
　そもそも彼女にとって救いとはなんだったのだろうか。
　やがて赤色灯は竹林の向こうへ消えていった。

　午前四時――
　わたしたちはパトカーで最寄りの繁華街にあるビジネスホテルまで送ってもらった。宿泊代も警察が出してくれるらしい。彼らはまだわたしたちのことを龍造寺の仲間だと思っているようだった。
　わたしと霧切は夜が明けるまで、ベッドの上で並んで壁を背にして座り、テレビを消音にしてつけっ放しにしながら、とりとめもなく話をした。今日あった出来事を振り返ると、まるですべてが数日前のことのように思えた。けれど霧切の細く白い首に残されたアザはまだ生々しくて、何もかも残酷な現実だということを思い知らされる。
「痛くない……？」
　指先でそのアザに触れると、彼女は嫌がるように顔を背けた。

「ご、ごめん」
「次はこの程度では済まないかもしれない」まるで他人事のように云う。「結お姉さまが守ってくれることに期待してるわ」
　彼女はそう云って、膝を抱えて座り、胸元まで毛布を引き上げると、わたしに寄りかかるようにして目を閉じた。
　彼女がその突出した才能を持ち続ける限り、これからも様々な危機に直面するだろう。そのたびに傷を負うことになるかもしれない。いっそ探偵であることを捨ててしまえば楽になれるだろうけれど、彼女にそんな選択ができるとは思えない。何より、彼女にはこれからもずっと探偵でいてほしい。この世界には、闇を照らす光が必要だ。
　ぼんやりと通販番組を眺めているうちに、わたしは座ったまま眠っていた。その時すでに、カーテンの向こうはうっすらと白んで、夜明けの兆（きざ）しに窓枠の雪も輝いていた。

第五章
非日常編

朝陽が斜めに差し込む電車は、がらがらに空いていて、わたしと霧切の貸し切りみたいだった。地元の駅まで二人並んで揺られ、ほんのひと時の穏やかな時間を過ごす。雪はすでにやんで、窓から見える歩道に、わずかに積雪が残っているくらいだった。このまま電車に乗り続けていれば、永遠にそんな風景が続くように思えた。けれど現実は非情で、次第に込み合う人たちによって、窓も風景も覆い隠されていった。

地元の駅で降りる。

自分の部屋に着いた頃には、午前十時を回っていた。

部屋に帰ってきて、ほっと一息――

つくどころか、わたしはすぐに異変に気づいた。

壁の一番目立つ場所に、黒い紙が横並びに五枚、ダーツの矢で留められていた。

そして五枚の紙すべてに、蛍光ピンクのペンで、でかでかと『済』の字が書かれている。さらにダーツの矢にはそれぞれ、黒い紙と一緒に、人物を写したポラロイド写真が刺さっていた。

「まさか……嘘でしょ？」

わたしは呆然と呟く。

それはリコが担当することになった六枚の挑戦状のうちの五枚だった。

「『済』って……解決済みってこと？」

「そうみたいね」

霧切もさすがに目を丸くしている。

「信じられない！　たった一晩で五件も解決しちゃったってこと？」

わたしはダーツの矢を一つ抜いて、挑戦状を確認した。

場所　音張島（おとはりじま）　7000万

凶器　ギター　1000万

トリック　密室　1億2000万

その他　スピーカー　2000万

総コスト　２億２０００万

　一緒に留められている写真には、若い男性が写っている。男は椅子に座り、後ろ手に拘束されているようだ。恨みがましい顔でこちらを見ている。男の周囲には、ピースサインをこちらに向けてにこやかに笑っている少年たちが写っていた。
「ちょっとリコに電話してみる」
　龍造寺から受け取った携帯電話で、リコを呼び出す。三回のコールのあと、リコが出た。
「もしもし？　リコ？」
『おはようございます、結さん。夜にそちらを訪ねたのに、不在でしたね。会いたかったのに残念です』
「勝手に部屋に入ったでしょ。それはいいけど、壁のダーツは何？」
『また壁に穴を空けてすみません。つい癖で』
「いや、そういうことじゃなく――というか、それも問題だけど――これってどういう意味？」
『解決済みの挑戦状です』
「さらっと云ったけど、本当に五つも解決したの？　どうやって？　無理でしょ？　そんなこと」
『無理どころか、簡単すぎて拍子抜けです。やはり今回の勝負は、あくまで結さんを対象にしたものだったようですね』
「嘘云わないで、本当のことを云ってね。いくら君でも、一晩で五つも事件を解決するなんて不可能だよ。それとも君はやっぱり、『黒の挑戦』の内容を知っていたんじゃないの？」
『僕は嘘を云っていませんし、「黒の挑戦」の内容も知りません。答えを知っていて謎を解くなんて、この世でもっともつまらないことだと思います』
　確かに彼の『謎』に対する執着と偏愛を考えたら、答えを知っている問題にわざわざつき合うとは思えない。
　おそらく彼は本当に……二億や三億といった高コストの事件を、あっさりと解決してしまったのだ。
　あらためて、トリプルゼロクラスが想像をはるかに超えて別格だということを思い知らされる。見た目の印象や、年下の男の子というカテゴリで彼を判断してはいけない。彼はあの龍造寺月下に並ぶ探偵なのだ。
『一つだけネタばらしをしますと、そこに張ってある五つの事件は、事件になる前に犯人を確保しました。一度走り出した犯人(ランナー)を捕まえるためには相手以上の速度で走って追いかける必要がありますけど、相手がスタートラインに立っている状態なら、その肩に手を置くだけで事が済みます。一晩で五件解決できたのは、そういうカラクリです』

「ど、どういうカラクリ？　説明になってないよ」
『事件が起きる前に解決してしまえば、密室も不可能犯罪もすべて省けるということです』
　それができるなら苦労してないんだけど……
　一体、どんな論理的手順を踏んだら、起きてもいない事件の犯人を捕まえられるのだろう？
　名探偵なら事件を解決できるのは当然かもしれない。けれどリコの手際は、ほとんど未来予知のレベルではないだろうか。
『でも実は、ちょっと後悔しているんです。どんなトリックが使われるのか、この目で見る前に解決してしまったので、全然気持ちよくありませんでした』
「なんかいやらしい意味に聞こえるなあ」
『いやらしい意味ですけど』
「イメージ壊れるからやめて」わたしは少しがっかりして云う。「疑うわけじゃないけど、本当に全員、犯人で間違いないの？」
『はい、全員から自白を引き出しています。写真に写っているのが犯人です。裏に簡単なプロフィールも書いておきましたので、もし委員会が答え合わせに来ても、それを覚えておけば大丈夫だと思います』
「気が利いてるね」
　わたしは手に持っていたポラロイド写真を裏返してみた。かわいらしい女の子みたいな字で、犯人のプロフィールが書かれている。

はりひろのり
　　法　年齢　29
12月29日
ＳＥ
　を　うのが得意
高校の時に自殺に追い込まれた片思いの相手のための復讐

「写真を見ると、みんな何処かに拘束されているみたいだけど、これは何処？」
『龍造寺の城です』
「ええっ？　敵の城で敵を拘束しているの？　意味ないでしょ、それじゃ！」

『一応、龍造寺にはばれないように、彼の子供たちを使って犯人たちを監禁していますが、ばれたところで問題はないでしょう。そこにいる犯人たちの素性はすでに把握してあるのですから。彼らには七日間、せいぜい楽しく過ごしてもらいます』
「大丈夫かなあ……」
　リコによって捕まえられた犯人たちは復讐を果たすこともできずに、このまま時間切れで、『黒の挑戦』の負けが確定するだろう。犯罪被害者救済委員会が、この結果をどのように判定するのかはわからないけれど、犯人が標的を殺せないまま時間切れになれば、ルール上は敗北となるはずだ。
　わたしは他の挑戦状と写真を確認してみた。

場所　　黄泉(よみ)水族館　5000万
凶器　　氷塊　300万
トリック　　密室　1億

総コスト　1億5300万

朽木（くちき）　永（かえい）　年齢　56

２月10日

ダイビング・インストラクター

三人の娘有り

十年前に強盗殺人事件で　を殺害され復讐

◆

場所　黄泉水族館　5000万

凶器　硫酸　1000万

トリック　密室　1億

その他　ガスバーナー　500万

総コスト　1億6500万

朽木　子（おつこ）　年齢　21

２月25日

大学生

朽木　永の娘

十年前に強盗殺人事件で母を殺害され復讐

◆

場所　沢目鬼（さわめき）自然会会館　3000万

凶器　丸太　300万

トリック　密室　1億

その他　羊皮紙　5000万

その他　宝石　2億

総コスト　3億8300万

ぼろたつとら

年齢　33

４月13日

探偵　ＤＳＣナンバー『３５５』

国際的偽造紙　犯罪を追う探偵

百五十年前から続く　家と沢目鬼自然会との因縁による復讐

◆

場所　大望洋館　1億8000万

凶器　大バサミ　500万

トリック　密室　2億

総コスト　3億8500万

くま の せい か
野　果　年齢　20
７月１日
大学生
大学生八名によるクローズド・サークルを計画
学生キャンプで　　　に落ちて事故死したとされる友人のための復讐

　これで十二の事件のうち、六つが解決済みと考えていいだろう。たった一日で、半分消化できた。しかもリコの担当分は、いずれも事件を未然に防いでいる。今のところ犠牲者は一名。これほどの好成績を誰が予想できただろうか。

　といっても、わたしと霧切が担当する事件は、あと五つも残されているのだけど……

『ところで結さん。僕が今、何処にいるかわかりますか？』

「突然、なんのクイズ？」わたしはふと閃く。「わかった、豪華客船の上でしょ」

『正解です』リコは嬉しそうに云う。『エキドナ号という船で、今は太平洋の上です。僕が担当する事件の最後の一つなのですが、すぐに解決したらもったいないので、犯人の仕掛けるゲームに乗ってみること

にしました。今は命をチップにしたゲームを楽しんでいるところです』
「な、何それ、大丈夫なの？」
　ノーマンズ・ホテルでわたしと霧切が体験したようなことを、リコも今やっているのだろうか。彼ならどんなゲームでも勝てそうだけど。
「連絡はいつでもできる状態？」
『ゲームの設定上、携帯電話はNGのようですが、このケータイだけは確保しておきますので、いつでも必要な時に連絡をください。では、僕はそろそろゲームに戻ります』
「待って、リコ！」
『なんですか？』
「……死なないでね」
『心配は無用です。僕が無事に戻ったら、今度こそキスしてくださいね』
　電話は切れた。
「本当に大丈夫かな……」
　わたしは携帯電話を置く。
「さて、リコの方は順調みたいだから、わたしたちも次の事件に取りかかろう」
　わたしは挑戦状を確認する。武田幽霊屋敷の事件はコストで云うと、下から三番目。残り五つの事件のうち、二つはそれより安くて、三つはそれより高い。
　先が思いやられる。
「えっと、場所が近いのは確か……」
　束にした挑戦状をめくりながら、ふと霧切を見ると、彼女は何か考え込むように壁を見つめていた。
「霧切ちゃん、どうしたの？」
「――え？」
　霧切はふと我に返ったようにこちらを向いた。
　青ざめた顔で、首を左右に振る。
「具合悪いの？」
「平気」
　見るからに平気ではなさそうだ。
「少し休んだ方がいいんじゃない？　事件の情報ならわたしが集めてくるから、君はここで待っていてよ」
「そういうわけにもいかないわ」
「今ここで君に倒れられたら、本当に取り返しがつかないことになっちゃうよ。お願いだから、少し休んで

て。ね？」
　わたしは霧切を無理やりベッドに押し倒して毛布をかける。彼女は困ったような顔でわたしを見上げた。
　頬にかかった髪をそっと払ってあげると、彼女は観念したように自分で毛布を顔の半分まで引き上げた。
「ごめんなさい、結お姉さま」
「謝ることなんかないよ。君に必要なのは休息だ」
「でも時間が……」
「大丈夫、大丈夫。前にも云ったけど、一件につき二十八時間、使える時間があるとしたら、今のところあと五時間は貯金がある。せめてそのくらいは心おきなく休息に使って」
　霧切はうろたえたように震える瞳で、じっとわたしを見返して、何か言葉を探しているようだったけれど、結局何も云えずに目を伏せた。
　わたしは彼女が眠るまで、ベッドの傍で彼女を見守った。彼女は何かよくない夢を見ているのか、時折苦しそうに寝返りを打った。
　彼女をこんなに追いつめたものは一体なんだろう？
　誰よりも冷静な彼女が怯える理由とは？
　彼女の様子がおかしくなったのは、ノーマンズ・ホテルの事件を終えて、家に帰ってからだ。おそらくそこで何かが起きたのだろう。もう家には帰りたくないと、彼女に思わせるほどの何かが。
　霧切がこのまま調子の悪い状態では、この先いつまでもつかわからない。わたしは彼女のためにも、彼女の身に起こった出来事を知っておくべきだろう。そしてできることなら、その苦しみから彼女を救ってあげたい。
　けれど彼女は、きっと一人で抱え込むつもりだ。他人を巻き込みたくないと考えているに違いない。
　そうだ。わたしはふと思いつく。
　彼女が眠っている間に、彼女の家を調べてこよう。
　ただ見てくるだけだ。それで少しでも、彼女が抱えているものを知ることができたら——
　わたしが立ち上がろうとすると、服の裾を引っ張られた。気づかないうちに、霧切が裾を掴んでいたようだ。わたしが動いたことで、彼女は目を覚ました。
「結お姉さま……行ってしまうの……？」
　ねぼけた様子で、不安そうに云う。
「私も……行く……」

身体を起こそうとする。

わたしはそれを押し留めて続けた。

「ちょっと調べ物するだけだよ。すぐ戻るから。一応、このケータイを置いていくね。わたしのケータイの番号を登録しておくから、何かあったらすぐに連絡して」

霧切の手に龍造寺の携帯電話を握らせる。

彼女の表情は、見てとれるほど変化することはなかったが、最後まで何か云いたそうな口元が印象的だった。彼女が何を云おうとしているのか、わたしには何通りも答えを思い浮かべることができる。もしかしたらその全部が正解かもしれない。

「それじゃあ、行ってきます」

最後まで霧切は何も云わなかった。

わたしが部屋を出る際に、壁に向けて寝返りを打ったのが、彼女のささやかな主張だった。

わたしは寮をあとにする。

彼女を一人残していくのは不安だったけれど、今さら引き返すわけにもいかない。

わたしは学校を出ると、走って霧切の家を目指した。あまり時間をかけてはいられない。

彼女の家はゆったりとした坂道の上にある。まるでこの地域一帯を支配しているかのように、屋敷は坂の上から下界を見下ろしている。その広大な敷地を覆い隠す白い塀と、巨大な門。坂の下から様子を窺っていると、にわかに空に雲がかかり、周囲が陰った。まるで屋敷がわたしを威圧し、追い返そうとしているかのようだ。

わたしは勇気を振り絞って、坂道を上がり、門の前に立った。

この門を幾ら叩いたところで、誰も応答しないことはわかっている。

わたしは門から離れ、塀に沿って歩き出す。

途中、塀の一部に、小さな木の扉が設置されているところを見つけた。霧切を含め、屋敷の住人は普段、ここを出入り口として利用しているらしい。

戸を開けようと試みるが、当然のように開かない。鍵がかかっているのだろう。

今までのわたしだったら、ここで引き返していたと思う。けれど今は危険を承知でも進まなければならない気がしていた。

その思いは、この場所に立ってあらためて強くなる。

以前、クリスマスの夜にわたしはこの場所を訪れている。

それ以来、漠然と感じていた違和感——

わたしは何か大きな勘違いをしているのではないか。
それは主に、霧切の祖父に関する疑問だった。
霧切不比等は代々探偵の血を引く霧切家の現当主だ。世界中を飛び回り、各国の政府関係者からも仕事の依頼を受けることがあるという。
そして彼は十五年前に探偵図書館の創立に関わった一人でもある。この創立メンバーの中には、現在犯罪被害者救済委員会を取りまとめている新仙帝もいた。二人の間には何か因縁があるらしい。十五年前に何があったのか。それを知るのは本人たちだけだろう。
なお霧切不比等は、探偵図書館の創立者の一人でありながら、探偵をランクづけするDSCの導入には反対していたらしい。それは探偵としてランクづけされることに、霧切の名の誇りが許さないからだという。
しかし十五年が過ぎた今、霧切の名を継ぐであろう霧切響子は、探偵図書館に登録しランクづけされるがままになっている。しかも登録はすべて『おじいさまがやってくれた』と云っていた。
これは矛盾ではないだろうか？
それとも十五年という月日が、霧切不比等を変えたのか？
そうは思えない。霧切不比等は現役で探偵を続けており、依然として当主でもある。立場は何も変わっていないはずだ。
そんな彼が、大事な跡取りを探偵図書館に登録させたのは何故か？
たとえば彼女を探偵として成長させるためだったとか？
──そんな理由では浅すぎる。霧切家は探偵としての誇りを重んじる。家族の死よりも探偵の仕事を優先させるほどだ。融通（ゆうずう）が利かないといえばそれまでだが、それだけ誇り高い覚悟をもっているのだ。他の凡百（ぼんびゃく）の探偵たちと同列に並べられるのを承知で、探偵図書館に登録するはずがない。霧切の名を安売りすることは考えられないのだ。
ただ霧切響子自身は、DSCのランクを上げることに意欲的だ。彼女には彼女の目的があるらしい。けれど探偵図書館に登録したのが彼女自身ではなく、祖父だったというところに何か違和感を覚える。
他にも一つ、気になっていたことがある。
霧切が云うには、『お祖父さまは基本的に海外暮らし』らしい。事実、霧切不比等は現在も海外にいて、なかなか帰国できない状況だ。新年が明けた元日も、彼は何処か海外の国にいたようだ。霧切響子は電話口で『ハッピーニューイヤー、お祖父さま。そちらではまだ早かったかしら？』と尋ねていた。時差のことだろう。
霧切響子もまた、昔から祖父と行動を共にし、長く海外で暮らしてきた。彼女が七歳の時、母親が

病気で亡くなったが、その時も彼女は帰国せず、祖父と一緒だった。それから彼女は『五年くらいの間、お祖父さまと一緒に海外のいろいろなところを回っていた』という。母の死後、仕事がひと段落ついたところで、おそらく一度帰国したが、またすぐに海外生活に戻った——といったところだろうか。
　そして彼女は今から二ヶ月半ほど前に、学業のために『私だけ一人、帰国した』という。
　それを聞いてわたしは、この屋敷に『お祖父さんと二人で住んでいるの？』と尋ねた。彼女は肯き、さらに住み込みのお手伝いさんがいると答えた。
　そのあとわたしは、この屋敷から出てきた彼女の祖父に、実際に会っている。
　しかし何かがおかしい。
　なんだか祖父の居場所が定まらない。
　まずわたしが感じた違和感は、クリスマスの夜にはこの屋敷にいた祖父が、元日には何処か遠い国から電話をかけてきたということ。
　もちろんあり得ないことではない。
　けれどいくらなんでも、行ったり来たりし過ぎではないだろうか？
　世界的な探偵ならそういうこともあるか、くらいにしか考えず、わたしはすぐにその違和感をやり過ごした。
　その時にでも、ちゃんと祖父のことについて霧切に尋ねていればよかったのかもしれない。
　彼女はただでさえ自分のことを話そうとしない。しかも家族のこととなると拒否反応を示す。だからあまり突っ込んで尋ねることができなかったのだけれど……
　わたしは今、その違和感の根源に近づこうとしている。
　しかし目の前には、わたしの意志を拒むかのように、真っ白な塀がそびえている。
　塀の真下から、頭上を見る。
　わたしならきっと届く。
　周囲にひと気はない。何故だか屋敷の付近一帯から、人の生活する気配のようなものが感じられない。道路を車が通ることもなければ、犬の散歩をしているおばさんもいない。
　むしろ都合がいいか……
　わたしは自慢の垂直跳びで塀の上端に摑まった。
　身体を胸まで持ち上げて、それから足をかけてよじ登る。意外と簡単だ。あとは向こう側に飛び降りるだけだ。わたしは猫になったつもりで、ふわりと宙を舞い、音を立てないように、向こう側の地面に着地した。
　そこは塀の外よりも気温が数度低いように感じられた。そのせいか、うっすらと雪の残っている箇所もあ

る。丁寧に刈られた植木の庭に、飛び石の道が続いている。道の奥に、和風屋敷の裏口が見えた。
　応答がないのは誰もいないからなのか、それとも息をひそめているだけなのか。
　前者なら助かるのだけれど。
　わたしは身体を低くしたまま、屋敷に近づく。雨戸が閉じられているため、中の様子は窺えない。もし生活者がいるなら、すでに雨戸を開けていてもおかしくない時刻だ。
　いつの間にか空に雪雲が垂れ込めていた。
　あんなに明るかった朝陽は何処に行ってしまったのだろう。薄闇が屋敷を包む。むしろ好都合だ。わたしは闇の中に姿を隠す。
　雨戸の一つに手をかけてみた。
　特に鍵などはかけられていない。音を立てないように細く開けて、窓硝子の向こうを覗いた。
　しかし暗い廊下には、特に何もない。
　やはり外から覗いているだけでは何もわからない。
　何処か中に入れる場所はないだろうか。
　わたしは建物に沿って歩き出した。最悪の場合、窓を割ってでも中に侵入すべきかもしれない。もちろんわたしは今までそんな大胆な行為をしたことなどないけれど、今はやらなければならない時だ。この屋敷には、何かがある。
　建物の角に身をひそめながら、その先の庭を窺っていると、ふいに背後で物音がした。
　わたしは悲鳴を上げそうになるのをなんとかこらえながら、音のした方を振り返る。
　さっき少しだけ開けた雨戸が大きく開いていた。
　中から誰かが顔を出す。
　真っ黒なニットとスカートの上下に、白いエプロンをつけた女性が、不審そうに外の様子を窺っていた。きっちりと前髪を横に流して露（あら）わになったおでこに、神経質そうな皺が浮いている。たぶんまだ若い女性だと思うけれど、老けているようにも見える。
　もしかしたら住み込みのお手伝いさんだろうか？
　彼女に直接尋ねようか。
　この家で何が起きているのですか？
　わたしは立ち上がろうとして、すぐに思い留まった。
　エプロンの女性は雨戸を閉めようと外に手を伸ばしたが――
　その手には鈍（にぶ）い光を帯びた包丁が握られていた。
　わたしはとっさに建物の陰に身を隠す。

あれは……たまたま料理中だったのか？
　それ以外に理由があるだろうか。
　たとえば侵入者の気配を感じて撃退に来たとか？
　気温がますます下がっていくなか、わたしの頬を嫌な汗が伝う。
　ここが引き際か。
　わたしはいったん建物から離れ、植木の陰まで移動する。この先は開けた庭が広がっているばかりで、途中に身をひそめられそうな場所がない。
　戻るしかないだろうか……
　いや、何も得られないまま戻ったって仕方ない。
　時間の許す限り、調べてやる。
　とりあえずこのだだっ広い庭は走り抜けてやり過ごすのが最善だろう。
　さあ走るぞ。
　わたしは百メートルレーンを駆け抜けるアスリートをイメージしながら走り出した。
　けれど途中で足がもつれて、派手に転んだ。
「うぎゃっ」
　地面に足を取られた。そこだけ土が柔らかくて、周囲より窪（くぼ）んでいる。雪がうっすらと残っていたせいで気づかなかった。わたしはうつ伏せの状態から身体を起こそうと、地面に手をついた。
　わたしが手をついたその場所に、着物を着た人が寝ていた。
　いや……正確に云えば、それは埋まっていた。
　屍体だ。
　なかば腐乱し、なかば白骨化した屍体——
　その服装と体格には何処となく見覚えがあった。
　それはたぶん。
　クリスマスの夜に、この屋敷でわたしと霧切を出迎えた、霧切の祖父。
　間違いない。
　間違いない。
　間違いない！
　霧切の祖父は死んでいた。
　どうして？
　誰が殺したの？

ここで何が起きた？

　わたしは転んだ時の痛みと、わけのわからない恐怖で立ち上がることもできずに、腰が抜けたようにその場に座り込んでいた。

　まして、背後に気を配る状況ですらなかった。

　だからその時――わたしは自分の背後に忍び寄る黒い影にまったく気づかなかった。

　影がわたしの周囲の地面を黒く覆った時、初めて危機が迫っていることに気づく。

　振り返ると、包丁を振り上げるエプロン姿の女性が立っていた。

　あ、これ、わたし、死ぬ。

　その瞬間は、他人事のように状況が飲み込めた。

　まるで夢を見ているような離人（りじん）感。

　そこへ現実という名の刃が振り下ろされる――

　そう思った次の瞬間、エプロン姿の女性の膝が、かくんと下がった。

　女性の背後に、スーツにネクタイ姿の男性が立っていた。どうやら彼は手にしたスコップの持ち手の側で、女性の膝裏を突いたようだった。

　そして彼が、女性の肩を軽くトンと叩くと、女性はいとも簡単に地面に仰向けに倒されていた。

　男性はすかさず女性の片腕を取って、器用に側面から身体をひっくり返し、うつ伏せの状態にさせると、そのまま両腕を後ろ手に拘束した。

　そんな光景を呆然と眺めていると、彼は指でわたしに何か合図した。

　逃げろ、と云っているらしい。

　わたしは立ち上がろうとする。

　まるで足腰に力が入らない。よろよろと前屈みのまま、塀の下まで移動した。

　こんな状態では、とても跳び越せそうにない。

　戸惑っていると、さっきの男性がわたしの手首を掴んで、走り出した。わたしは足をもつれさせながら、なんとか男性についていく。

　やがて塀の途中に、小さな木の戸が見えてきた。

　男性は内鍵を外し、戸を開ける。わたしは押し出されるようにして、塀の外へ逃れ出た。

　それからすぐに男性も外に出てくる。彼は戸を閉じると、ポケットから鍵を出して、鍵穴に差し込んだ。

「逃げるぞ」

　男性はそう云って小走りに坂を下る。

　少し進んだ民家の角に、黒い自動車が停められていた。男性はリモコンキーで鍵を開け、わたしに乗

るように促した。
　わたしはその時初めて男性の顔をはっきりと見た。まだ三十半ばくらいだろうか。意志の強そうな目もとに、凛々しいその顔つきは、誰かに似ていた。
　わたしが車の助手席に乗り込むと、彼はすぐに車を発進させた。
　バックミラーに映る屋敷が次第に小さくなっていく。道の先では、雲の隙間から零れた光が筋状になって降り注いでいた。
　やがて車は、繁華街を流れる車列に紛れ込む。
　ようやく現実に戻って来られたような気分だった。
「あの……た、助かりました」
「いや、礼はいい。できることなら、私と会ったことは忘れてほしい」
「え、えーと……はい」
　しばらく沈黙が続く。
　しかし無言に耐えかねたのは、彼の方だった。
「こんなことになるなんて思ってもみなかった」
　彼はハンドルに両手を載せたまま、ため息交じりに云う。
「あの……あなたは……」
「その質問には答えられない」彼は厳しい視線を前に向けたまま云う。「いろいろと複雑な立場でね。察してくれ」
　わたしはわけもわからず肯く。
　ふとダッシュボードの上に黒いバインダーが無造作に置かれているのに気づいた。バインダーの表に、見覚えのあるマークが記されている。確かあのマークは……
　希望ヶ峰学園の校章だ。
　わたしの視線に気づいた男性は、運転しながら片手でバインダーを取り、隠すようにドアのサイドポケットに突っ込んだ。
　そうか、彼が誰に似ているのかわかった。
　霧切響子だ。
　確か彼女の父親は、希望ヶ峰学園で教師をしているはずだ。
　ではこの人は……
「もしかして霧切ちゃん――霧切響子ちゃんのお父さんですか？」
　彼は軽くネクタイを緩めただけで、何も答えなかった。

けれどわたしは知っている。彼が屋敷の出入り口に使われる木戸の鍵を持っていたことを。家の鍵を持っている人間はかなり限られる。
「君はあんなところで何をしていた？」
　逆に質問される。
「わたしには霧切響子という友人がいます」わざと彼女の名前を出す。「彼女の様子が最近おかしくて……家に帰ることをとても嫌がっていたんです。何かあったんじゃないかと思って、彼女の家を調べに来たら……」
「そうか」
　彼は一言そう応じただけだった。
　赤信号で車が止まる。
　静止した車内で、彼は再び口を開いた。
「彼女に怪我はないか？」
「はい」
「それならいい」
　車が再び走り出す。
「彼女はあの屍体を見つけてしまったんだと思います」
　それで危険を感じて、家を出たのだろう。
　そして自ら行方をくらまし、彼女は十日ほどさまよう。
　でも何かがおかしい。
　屍体の一部はすでに白骨化していた。
　少なくとも埋められてから二、三ヶ月は経っているのではないか。
　それじゃあ……
　半月ほど前、クリスマスの夜に、わたしたちの前に姿を見せた霧切の祖父は？
　ああ……
　そうか……

　あれは新仙帝だったんだ！

　一体、いつから？
　霧切響子はいつから騙されていた？

新仙は一体なんの目的でそんなことを――

「彼女は今、何処にいる？」

「わたしの寮の部屋にいます」

「そうか」

「会っていきますか？」

「合わせる顔がないよ」

　彼は肩を竦めて云った。

　寮まで送ってもらい、わたしは車を降りた。結局彼は最後まで名乗らなかった。そして自分と会ったことは誰にも云うなと釘を刺された。もちろん彼女にも、と――

　彼女が心配になって、わたしは自分の部屋に飛び込む。

　霧切はすでに起きていて、ベッドに腰掛けて髪を櫛（くし）でといているところだった。

「おかえりなさい、結お姉さま。ちょうどよかった、髪を結ってほしいの」

　わたしは肯き、彼女の背後に回った。

　彼女の清らかさをそのまま形にしたような、柔らかく美しい髪を三つ編みで結っているうちに、わたしは涙が溢れてくるのを止めることができなかった。

　どうしてこの世界は、この子にこんなにひどい仕打ちをするのだろう。

　わたしはこっそり涙を拭う。

　許せない。

　彼女を傷つけるものは誰であろうと――

――to be continued.

星海社FICTIONS
キ1-03
ダンガンロンパ霧切
3
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
時間内にすべての事件を解決するか、
あるいは未然に防ぐことができたら君の勝ちだ。
だが一つでも解決できない事件があったら君の負け。
いかがかね？
ノーマンズ・ホテル事件から生還した霧切響子と五月雨結を待ち受けていたのは
新たなる"黒の挑戦"、難攻不落の「密室十二宮」!!
絶体絶命の霧切の前に現れた最後のトリプルゼロクラス探偵・御鏡霊は敵か、味方か!?
原作ゲーム「ダンガンロンパ」のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去——。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック城」殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城〉シリーズや、『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿〉シリーズ、『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦〉シリーズがある。
小松崎類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。（株）スパイク・チュンソフト所属。「ダンガンロンパ」シリーズのキャラクターデザインを担当。艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

……結お姉さま。
ああ……またわたしを呼ぶ声がする。
ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA KIRIGIRI
3
北山猛邦
小松崎類
星海社FICTIONS
星海社

星海社FICTIONS
星海社 FICTIONS キ1-03
ダンガンロンパ霧切 3
DANGANRONPA KIRIGIRI
北山猛邦
Kitayama Takekuni
Illustration
小松崎類
……結お姉さま。ああ……またわたしを呼ぶ声がする。
推理せよ、難攻不落の「密室十二宮」!
これぞ“本格×ダンガン”!!
「物理トリックの北山」の真骨頂、
これが本格ミステリーだ!

Illustration　小松崎類

ブックデザイン　　eia

編集担当　太田　史
編集　担当　林　実子

フォントディレクター　　野慎一
電子書籍ディレクター　松島
オペレーションチーム　　万 愛　三本絵理

校閲　　来堂

フォント制作協力　字　工房　リアルタイプ　凸　印刷

制作協力　新　　　堂

本作品は、2014年11月、小　より星海　　ICTIONSとして　行されたものをe-　ICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-　ICTIONSでは、　正部分や図　点数などが異なる場合があります。

ダンガンロンパ霧切 3

2020年10月1日発行（01）

者　北山猛邦

発行者　太田　史

発行所　株式会　星海
112-0013
東京都文京区音　1-17-14
音　YKビル4
https:// .sei aisha.co. p

発売元　株式会　　談
112-8001
東京都文京区音　2-12-21
https:// . odansha.co. p